

山海評判記

泉鏡花作

ゆふ浪

長太居るか

夜の蝶蝶

その呼聲

淺草がへり

山歸り

井戸覗き

一銚子

續井戸覗

合歡の葉かげ

紫の桑

横川 ー 柏原

いらたか

吉丁蟲

掛蓑

逢魔ヶ時

鰈

青帽女子

半日

半夜

姫沼綾羽

歌仙貝

廿三人の馬士

白山の使者

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

ゆふ浪 なみ

これを、旅館の方からすれば、先づ第一に職業、
姓名、年齢、到着の日時などからはじめる處だけ
ど、懐中は知らないが、柄も相當なり、年配だし、
それに見聞のまゝを記すとして――やがて、此
の篇には主要の人物に成りさうであるから、お客の
方からお話をしよう。

客――旅館――と續けると、何うやら心
持が道中らしく成る。其處で、道の記は、

（男もすといふ日記といふものを、女もして見む
とてするなり。） ころから、汁だ、鱈だと、直ぐ
食ものに箸をつける事は、その昔の縉紳方をはじめ、
江戸時代の文人騷客に至るまで、餘りしない事に成
つて居る。勿論汽車の辨當の煮込のこま切の硬さを
突ついたり、玉子焼の正體を怪しんだりする如きは、
實際上品ではない。が、人間、何よりも食ふ事が大
切である。

「申兼ねましたかね。」

と、客は座敷の眞中の座蒲團から、次の室の――
女連がないから、錦紗にも友染にも、緋、朱鷺な
ど、扱帯、伊達巻の張合のない――衣桁の端に、
敷居際にひたりと手をついた白髪まじりの小さな髻
で、繭紬の羽織に、手織木綿の、質實なお媪さんを、
女中頭かと思やりながら、

「贅澤ぢやないんだけど、食ものに少し注文があ
つてね、洒落れたものや、粹なものは薩張頂戴出来
ないんだが、料理をお指圖申すほどの智慧もなし、
黙つて我慢をして居れば腹が空くと云つた勘定でね

「

「え、旦那様、宿へ入らつしやいまして、お腹
が空いては、飛んだことござります。」
と眞顔で云ふ。

「其處でだ。魚は何があるだらう。」
「はい、はい、大抵分つて居りますが、一遍念の
ために聞いて見ますでござります。」

お媼おばあさんは座敷ざしきへ入はいつて、――こゝの内うちのは知らないが、旅館りょくわんの廣告くわんこくに時々ときどき見える、卓上たくじやう電話でんわあり、と云いふ、あれを取とつた。

時ときに臺所だいどころとの應對おうたいで、お媼おばあさんは、別館べっかん、別荘べっさうを兩翼りやうよくに開ひらいた、鴻仙館こうせんくわんの元緊もとじめの隠居おんきよであることが知しれた。

「あゝ、あゝ然さうかい、あゝ分わかりまし
た。」

カチリと掛かけて、

「つい通りとほでござりますが、鯛たひ――それに針さよ
魚りがありあはせませますさうで、鰻あはび、赤貝あかぞひ」

「おかみさん――其その鰻あはび、赤貝あかぞひなどと云いふの
が少々せうくむづかしいんだよ。おはづかしいが。

鯛たひはありがたい、出来できます事ことなら、頭かしらの處ところを一ひと
つ煮にて貰もらひたいんだが。」

「あら煮にでござりますね。」

客は額に手を當てた。

「恐れ入った。いや、あら煮と云ふとね、船を漕出した處があるんでね。——矢張り海岸でしたよ。もう薄暗いのに、水脚を曳いて、渺々たる海を乗るのさ。」

お媪さんは敷居へ戻つて、支膝で、「何ういふものでござりませうね。」

「あとで聞くと板前のは、もう三枚におろしてある。あら煮と云ふから、新鮮い上にも特別の誂へだ、とばかりで、生簀へ刎ねるのを掬ひに出たんだ。御祝儀も出ないのに、面食つた事があるんですよ。」

お媪さんは、屈みなりに、胸の寛い襟を扱いて、「ご串戯ばかり。」

「いゝえ、然も其が東京近間だつたんですからね、——能登は遙々、遠いな、と豫て思つて居た處だから。」

こゝは、娑婆ツ氣な銀杏返しの女中だと、一言句あるべきを、克明に頷いて、

「ようこそ、其の御遠方をお出で下さりまして。お禮を申し上げねばなりません。まつたくの邊土でござりますが、料理番が東京へも修業に参つた事がござりますので、はい。」

「それはー宜く申して下さい。では、あら煮と潮か。あとは其の針魚を鹽焼と云ふ處で、野菜はお見つくろひと飲めます。」

と莞爾しながら、
「お膳と一所に、お銚子を。」

「承知いたしました。先づご緩りなさりましてー唯今お浴衣を。」

汽車は、上野から急行で、この温泉へ分岐する、要所で乗替へ、能登路を奥へ進みつゝ、便宜で午前の中の泊で一泊りして来たから、最う日の四時さがり

である。座敷へ通されると、見た處から黒い塗棧の、
簾込の硝子にさへ、漫々と水が映つて、豫て聞く海
の景色が、すぐ胸前へ透るばかり、見霽しは分つた
が、五月中旬すぎといふのに、まだ風がつめたい。
お媪さんと應對の間も、丸胴の桐火桶を膝へ引寄せ
たほどで、取つて置きの景色へ突如飛かゝらないで、
心樂みにした意味でなく、まだ障子を開けなかつた。

これが爲に、――男もすといふ日記　――
まで引出した次第ではないが、さて膳のものが極
と、肩が軽くなつたやうに、ほつとした顔をして、
客は障子をさらりと開いて、

「佳いな。」
と云つた。

地圖だけの知識では、浪に横たふ能登島が、遠靄
に、すつと縦に浮いて、三ヶ口の瀬戸が瑠璃色にす
ら／＼と絲のやうに靡いて、外灣へ通つて居る。此
の絲で貫く状に、島根の巖は、寄る浪と夕日の色に
薄紫に霞んだ中に、小さく紅玉を刻んで、夜の其の
漁村のかすかな燈をさへ思はせ、さし翳す手に、美

しい渚の貝を蘇芳に染めて視められる。

目の下の内灣は、のんどりと水が曇つて、小波もないばかり、一面にほの白く、透かすと、青く流れて、薄雲に藍を包むだやうである。

餘り静寂だと思ふまで、其の時、一點の舳も行かず、帆の片影もなかつた。

ホーホー、ホーホー

島蔭に櫓を漕ぐ舳か。

否、横庭の圍外に、すぐ明神の山がある、森の茂つた中で、木菟が最う鳴いた。

梢にたなびいた藤の花の眞上の空に、半輪の晝の月がほんのりと掛つて、奥二階の縁にゝんだ、欄干の爪尖へ、水が映りさうに、眞下の其處へ、たぶ／＼と寄せて颯と引く。塀際の棧橋へ掛る静な汐に泡の浮くのを、塵ひぢかで見れば、散つて浮いた波が

しらの藤なのである。

裏木戸も、つい其處にある。小松、絲檜葉の間に、
どうだんをあしらつた庭に、海に面した直ぐの土塀
は、築き方が低いから、内へ立てば、塀越しに外が
覗けさうだし、外を通るものは、肩が浮いて行きさ
うに見えて、遠い沖から末かけて浦波の不斷の穩か
さが窺はれる。其の癖、蒼穹に映る海の色が、樹の
間に水の影を流して――植交ぜた淡い躑躅が漁
火のやうにこぼれて居る。

水天の中に一物あり。

汀に蘆もなければ、隠れたとは思はれぬ。浪際の
石垣に、ぴたりと引込んで居た船があつた。棧橋の
根と、その石垣の四角な處へ、又ツと泥龜のやうに
首を上げた、尖り帽子の眞黒な面が、頤を擡げて嘯
くが如く二階を見上げた。

「旦那、一遍乗つてくらつしやんかねえ、旦那。」
「今　いま着いたばかりだよ。」

「名所の机島から、なあ、筆染崎、瀬戸口なんぞは飯前だよ。」

カタノカタと發動機の音を立てると、青い舷がむく／＼と鰭を振つて、藤の浪をパツと切つた。客は思はず、一禮して、

「義理にも、お世話になりたいが、又の、又の事にしようよ、船頭さん。」

「按摩——按摩は何うで、按摩」

「按摩は何うですかね、按摩、揉療治い。」

ドス聲なのと、嘎れたのと、背後の障子にぶつかつて、廊下を、洞穴のやうに喚いて行く。

行くかと思ふと、小按摩の勘高いのが、すぐ後へ

——

「按摩は何うですか、按摩です、按摩。」

「旦那さん お浴衣を。」

「いや、これは忙しい。」
と、客は、振返つて島田鬻の女中を見て笑つた。

こゝが武藏國だと、一寸江戸櫻とか云ふ處を、里山吹と云ひたさうに、頭痛膏を貼つた。――誰にも苦勞はあるらしい、おつとりした二十ばかりの色白なのが、衣桁の傍のみだれ箱に、廣袖に、棒縞の浴衣を襲ねながら、

「お喧しういらつしやいませう。」

「何う仕つて、寂しいよ。陰氣なものだね。」

「ほゝほ、一向お愛想がございません、こんな地方ものでございますから。」

「これは御挨拶だ。――あとでお酌をしてくれるかい。頼むぜ、姉さん。」

「お氣には入りますまいけど、あの、まあ、おめしかへなさいまし。」

「いや、其の段はお手を借らずと可、太夫身支度は自分でする。
浴室も大抵見當はついて

居る。しかし大構だね、御當家は――實に廣い。
手拭をぶら下げて、けちなバスケットの石鹼を持つ
とと――野くれ山くれ行つたれば
子に成つたら、大きな聲で、きみを呼ぶから、長廊
下をバタノゝと驅着けてくれたまへ。

あゝ、肝心の事だ、名は何と云ふんだい、きみは。」

「巳代でございますの。」

「佳い名だ、お巳代ちゃん。」

「あら、ご覧なさいまし、汽船が入りました、ぼ
ツぽツ煙を立てて。」

「按摩は何うで、按摩、按摩、按摩。」

長太居るか

「―― 何の彼のと言ひましてもな、好ければ
好い、愁ければ愁い、寂しければ寂しいで、旅行が
一番であすてね。―― 此の、樂みは」

によろりと手を肩に掛け、頭をすつと引込めて、
ぶる／＼と面を振つて、

「これでも、私や、一昨年ぢや。信州善光寺へ参
つたであすて。―― 御大人。」

客は瘦てゐるから、はじめから御大人を擦つたが
様子である。―― 此の按摩だが、つか／＼と
入つて来て、「お療治を。」 鐵瓶の湯は湧いて
居る、次の室の火鉢の傍へ、其の衣桁から、這つた、
ひだのない法衣の落ちたやうに坐つた時は、――
晩飯がゆつくりと濟んで、微酔で居た客が、もう
寢床に居て、ぎよつとして胡坐の膝を搾めたのであ
つた。

憚りながら半島の僻地と雖も、和倉は温泉の都で

ある。温泉の都には、藝妓舞妓が白粉を湯氣に溶いて、づらりと居る。然るに揉みほぐしは附けたりで、半ば話相手に、祝儀の處を療治代で慰まうと云ふ量見方だから、祟られたものらしい。九時頃床を取つた處へ、と云つて、女中のお巳代に按摩を頼むと、前刻廊下を流したやうなではなしに、越中の氷見から近頃此の土地へ渡つて來た、うまいと云つて流るのが居る。今晚あたり閑靜だから、間に合ひませう。「でも、あら坊主のやうな人ですよ。」

藝妓がはりの算段を洞察して諷する處ある如し。お巳代の手前も、今更引くに引かれない。「成程、内浦の産物ぢやあない。外灣から顯はれたんだね、眞黒な大入道だらう、海坊主おもしろい。」と一杯機嫌で肱を張ると、「まあ、今に参りますから。」お巳代は笑つた。其が、次の室へ入つたのを見ると、眞黒な大坊主より一層驚いた變りやうは、頭から白い小入道 白髪ではないが、すべりと兀げて、頭が小さく額が廣く頤が瘦けて居る。ハアト形の其の大きな顔が又をかきな事には、いきなり胴から生えたやうに肩へめり込んで、頸が短い。

繪で視た西洋の惡魔のやうな、

然も小男なのが、古鞆から白いエプロンと云つたのを、甚しい猪首だから、――すぐに頭へ當てて、手首でしめて、さて、侵入し來つたのを視て、客は人づてに聞いた、稚い記憶を辿つた。

この邊では、雪達磨のかはりに、地藏形に雪を積むのを、荒坊主と稱へるが、様によつて、肩から直ぐに顔に成る。殆ど頸脚のない事を女中は洒落て言つたのであつた。

其のくひ下つた、あだ白い顔をぬつと上げ、
「――御大人、それが私ばかり、盲目唯一人と云ふのであしたて。」

おのれを嘲けるか、人を駟るか。舐めた笑で、
「あはツはツ、いや、亂暴と言へば亂暴、我武者羅と言へば我武者羅でな。」

「はなツから　　つまり國を出る時からかね。」

客は卷蓑の煙を下段に沈めて受けて居る。

「四人づれですよ。氷見を出たのは。是がさ、隣縣新潟に、私も同業の大会があしてな、四人先づ委員に選ばれて、代表と云つた形、首尾よく任務を果しましたわと、何うぢやい、こゝまで出掛けたものぢや、又と云うては成るまいが、善光寺へお参りを、と誘うたです、とひよもない、とか吐いて、的等、あはッはッ。」

揉む手に押立てた親指が、肩へ摺込んだ顔だから、耳の刎ねるやうに、ピチ／＼と不氣味に動く。

「手搜りで信州の方を向かうともしませぬてね。同行の三人とも卑怯ものめ等、心まで盲目で居くさる。私や、中年二十頃から見えなくなつたです、」

もと石屋で、砕く、破る、削る、穿つ。

一念巖を貫く勢ひだから、と白の按摩服を揺ると、餛飩粉の散るが如く、杖のかはりに玄能を構へた氣で、いきなり新潟の停車場へ駆込んだが、

此の上野行は、午前一時、眞夜中に長野へ着いた。

すなは 乃ち名だたる靈場だから、そんな時刻でも、ぞろ／＼と下車するだらう、其の後へ着いて、澄まして、
プラットフォーム
歩廊の 何うも確にあるらしい、勘定が

其の橋を渡らうと云ふ算段が、飛んだ當ツ
ばづれで、後にも前にも一人も下りたものがないと
言ふ。

「富山の反魂丹賣に貰つた名所繪でな

御大人 ー 幼少の折に見たばかりの善光寺へ、
ぽかんと降りたのであすから、燈だか、繪具だか、
目の蕊がぐら／＼と赤く成つて、何の事はない、御
大人。 いや、はや、足もとは、丁と、其
の比羅繪の端へ乗つたやうで、渡江の達磨様ではな
いけれども、蘆の葉一枚で、波の上に立つた氣がし
て、出るも引くも成りませぬが ー 此時ばかり
は我を折りましたて。 へゝゝ。 ー

今度は俯向いて苦笑して、

「人情は然うしたものはあるまいと思ふであす
が、鐵道の方では、誰も構ひつけてもくんさらぬ。
尤も、はや、廣大な國々山川、信州中の、長野驛へ、

盲目めくらが一つポツリと來きたんでは、雨垂あまだれ一粒ひとつぶで人ひとの目には消きえたかも分わかりはせず 私わしの我慢がまんが、我慢がまんであるから、盲目めくらとは見みえないで、まご／＼すればけんつくを食くつた處ところかも分わかりませぬ。躡しやがんだですて、先まづ氣きを鎮しづめて見當けんたうをつけようと。――其處そこへ、カランと、カラコロンと輕かるい駒下駄こまげたの音おとがしたです。――

「化ばけたのかい。」

と、客きやくは揉もまれながら振返ふりかへると、床とこの間の黒猫くろねこが目に着ついた。一間いつけんの疊床たゝみどこに青銅せいどうらしい蝦蟇がまの置物おきものが腹はらを見せて、仰向あをむいて――活花いけばなはなかつた――壁かべに其その仔猫こねこの繪ゑが掛かけてある。今いまはじめて見みたのではない。仔猫こねこと云いふほどだから凄すこいのではない。金目きんめで、眞黒まつくろなのだが、目めのふちと、額ひたひの處ところが白しろい毛けで、花はなのさら／＼と咲さいた南天燭なんてんの根ねに、一寸前ちよいとまへ足あしで、けれども、お手玉てだまも蝶々てふ／＼もないから、戯じやれたさうに、うつかりと無邪氣むじやきな面かほをして居ある。なほ其そのもの柔やわかに思おもはれたのは、――それは、と確たしかに、畫家くわかが女をんな名前なまへだつた事ことである。

「飛んでもない、御大人。」
客も笑った。

「しかし、御利益ですな。あゝ貴女、御参詣であすかと申すと、（はい）と言ずくなだが、情が籠つてござられましたな。驛をしますまで、お連れ下さりたう存じますが。（はい。）それから御大人、カラン、コン、カランコンと、橋を渡つて下りるまで、面白い足がたなびくやうであしたがない、勢ひよく、さつ／＼と、お底で驛をしますと、さすがに氷店がまだ起きて居ました、駆けつけ三杯。」

ごし／＼ごしと背筋へ當る。

「氷水を四杯 心から涼しうなつたです、餘程息を切つたものと見えてね、我ながら。腹に堪へるものと、干葡萄の乗つかった。パン菓子五ツ喰べて 喰べながら、さて今私の一足さきへ立ちなされた御婦人は、と氷屋の姉えに訊くと、どんな方も見なかつた、と言ふであすね。夜は晩し、坐睡つて居たと申さば其までであすが、し

かし、聞いた方でも、此は然うあらうと思つた事で
「一念巖を貫く。」
石工の無鐵砲

が、自ら、御利生を被つたと云ふわけ
「

これだと大慈のあはれみを受けたのでなく、力あ
るおのれに、佛が手を貸したと云ふやうに聞こえた
ので、客には、何故か憎かつた。

「私も一寸御利生を被つたよ。」

「はてね。」

と嘲つたやうにニヤリとする。

「矢張り婦人だ。」

「はーん。」

「何、前刻晩飯前に、一風呂浴びに出掛けた時だ
よ。大概其處等だらうと見當をつけて居たが、何し
る着いたばかりではじめてだから、いきなり裸には
なれません。洗面所があつて、大姿見の

かゝつたのに、湯氣が掛つて居るのを、浴室は近い、
と視ると、雪の霞んだやうな眞白な姿が、胸も腰も
ふつくりと立つて居る。餘り眞正面に打つかつたか

ら、此方が思はず瞬きをすると、今度は柔い、長い
臂ばかりが、扉にからんで、バツタリと閉つたんだ
がね。女湯の方が、手前にあつて、通りがかりの洗
面所と眞向のやうに成つて居る。

「であります。然れば此の家は然うであります。

はあ、眞白で、ふつくりと

「いや、何とも。」

「晩方で？」

「凄いくらゐさ。」

「御大人——其の白い手が招いたでもなし、

男湯の方へ指さしをしたでもなし　　します

ると、其の、其は何の御利益で。」

「いや湯の精と云つても可い、それが直ぐ温泉の
御利益ぢやないか。」

やゝ、はぐらかし氣味だつたので、按摩は腹に顔
をつけたやうに、首を引込めて、少し黙つた。

ホー、ホー、ホーホー

明神の森の木蔭が、庭の樹へ来たらしい。

波の音は聞こえないで、一齊に鳴く蛙の聲が、風に乗つて、水に流るゝやうに、颯と来て、また遠くなる。

仔猫の面に薄あかりが、ぱつと掛つて、大構の屋の天井は、高く暗かつた。

「御大人、そりや御利益ではなうて、崇りかも知れぬです。魔ものだに、へ、へ、へ、」

要もない、此の反抗をはづすのに、客は坐睡つたふりをしようとしたが、

「其の白いのが、もの凄い聲をして――（長太居るか。）――と来てご覧じろ。」

「何、」

「御大人は、手拭を持つたまゝ尻をつくだ。」

此の言葉をさへ氣にしないで、客は尻をつくかはりに、氣を籠めて胡坐を直した。

「知つてるかい。――（長太居るか。）

あゝ、それは凄（すこ）い。」

「居るは、何ぢや。」

七年前の夫の仇（かたき）。」

――夜がたりの一言（ひとこと）で――客は、もの心を覺えてより何十年、殆ど血の中に消えて居た不思議な聲（こゑ）が、忽ち（たちま）ち、山の火を噴（ふ）くが如く記憶（きおく）を爆（やぶ）つた。

唯（ただ）今の「長太居るか。」である。

木菟（みう）も蛙（かはう）も、鳴音がはたと留（とど）み、縁外（えんそと）の浦（うら）の波（なみ）が堀（へい）を打（う）つて、煽（あふ）るやうに、胸底（きよつてい）に轟（とどろ）いて、好奇（かうき）の念（おもひ）を揺（ゆ）つた。然（しか）も其（そ）の所解（いはれ）の斷片（だんぺん）さへ忘（わす）れたのに、聞（き）くと齊（ひと）しく、凄（すこ）く可恐（おそろ）しく感（かん）じた事は、前段（ぜんだん）の客（きやく）の言（ことば）の通り（とほ）である。

按摩（あんま）の言（い）ふには、花咲爺（はなさかぢい）さん、桃太郎（もつたらう）を知（し）つたもので、此（これ）を知ら（し）ないものはない筈（はず）だ、と言（い）ふ。

尤も北國に限るであらう。

「 凄いにも、そりや、私らは隣國の生

れで、今で申さば川向うの火事です。おまけに、
五里と七里、山も峠も隔たつて、おなじ可恐いにし
たところが、夜叉も、魔も先づ其の背中を見る態で
あす。なれども小倅の折、別して冬分 ー ー 雪は、
どんどと降るわ、海はぐわうと荒れるわ。燃え上る
圍爐裡の火も、鯨の血が氷に閉ぢられたやうな處で
（長太居るか。居るは何ぢや。七年さきの夫の
仇。） ー と、ほれ、それ古狸の女房
と云ふ條、然うなると、魔の夫人ぢや。夫の仇を
取るために山小屋の外で聲を掛ける。此の應對に、
寂しい凄い力味のある、また可哀な、悲しい調子が、
おのづと備はるので、かう來ると、ほし栗も榎の實
も、貝殻か、はや砂利、霰でも噛るやうに、齒に沁
みて、舌が冷たかつたものであす。」

爾く、善光寺の御利益を、おのが箔に使ふやうな
按摩の玄能が言ふのを聞け。

波は山とともに荒く、谷深く、路の嶮し
いために――今と違つて、越中へも加賀へも、
續いて、越前、越後へも、通路が稀で、半島の奥は
鎖されて居た。かりそめにも、今昔物語を繙くも
のは――能登國、鳳至の「孫」が、沖の彼
方に、何ならん世界が有むとも見及ばざる濱に居
つゝ、海の面奇異怖しげに成つて、沖の方より高さ
百丈ばかりはあらんと見ゆる浪の、乗せて寄つた、
通天の犀の角の艶ず微妙き帯を拾ふ語。――鬼
の寢室より、猫の嶋へ渡る遠さは、高麗に渡る許あ
るにやあらむ、其處は人の行き得る處でない。光の
浦の海人は唯其の鬼の寢室に渡つて返れば、一人し
て、鯨の數、萬をぞ國の司に辨へるのが、一度に四
五十人ぞ渡る語を聞かるゝであらう。

舢倉嶋の海士小屋は、今聞いてもニ々たる沖の白
波に、夢の睫毛を見るに相齊しい。

かの、判官殿の十二人のつくり山伏も、加賀の
關所は金剛杖を脇挟んで通られたが、黒雲に礁の牙
白き、珠洲岬を吹放たれては、外浦の富來の巖窟に、

夫人の紅の袴と黄金造の佩刀を潜めつ、と荒磯の波の響きを傳ふるのである。

が、此國に浦々の渚に敷く、梅の花貝、櫻貝。玉子絞の紫貝。馬刀の馬方、袖貝の草刈娘。千草貝、妹背貝、子安貝。苦屋の炊ぎに梅松の添ふ、時雨の濱の板屋貝。霞む眞珠の阿古屋貝。烏帽子、蘇芳の貝の名は、國の長者、里の女、村の家、伏屋茅屋を象徴して、深遠、怪奇なる連山と波濤の間に、幽艶、明娼の、姿と色を、優しく鏤刻し、點綴する。

一 鳳至郡、西保村は、峻しい奥地で、西に纒に路を通じ、北に番場山、大長崎の斷崖が、北海の洪波怒濤の襲ひ討つに任せて居る。

道心のおこりは花のつぼむ時 去來
能登の七尾の冬は住みつき 凡兆

内浦唯一の良灣の七尾にさへ、此の句がある。外海の荒磯と、片山家の冬の状を想像さるゝが可い。

昔、長太は、二十三の壯者にして、西保村に住んだ
のが、山入、芹ヶ池あたりの森林を許されて、斧を
入れようとしたり、趣は、爺は山へ柴刈にを、
やゝ近代にした式がある。其の人跡未到の大深林に、
小さな木小屋を結んだのは霜月であると言ふ
従つて此の話には冬が相應しい。海鳴は山を轟
かし、梁を揺つて、然も孤屋の状に、隣も白く閉さ
れて、雪の飛狂ひ、降埋める中の、爐と、炬燵は、
濡柴の空蟬の綾にも、楯に絡ふ蔓の黒髪にも、哀怨
幽怪の煙り、脈々として附絡ふ。古翁老媪が、乃ち
兒孫を抱いて語り部と成るのである。

扱とよ、長太の小屋のある處、檉、檜、檜、柏、
巨木大幹、森々と、晝も日の光を漏らさない。毒蜘蛛、
大蛇は群亂れ、蜈蚣は三尺を走り、蝦蟆は五尺
に蟠まる。老猿晝叫び、怪禽夜鳴いて、あの、光
るものは何ぢや。燐火と、狼の目ぢやといのう。瘡
煙 毒霧の影の中を、ぞろ／＼と魔界の兵隊さんの
如く往來ふものは、狐狸よ。此の中に、目まじろぎ
もしないで、斧をそばめ、鎌を研いだ、開墾の壯者
を思へ。朝は梢の霜に覺め、幹の蔦の紅に夕日の燃

ゆるまで、勇しく丁々の笏を打つたのである。

宵々には、麓村の、榮螺殻の魚燈に遊び、更けては浪の上の月を高く背負つて、木樵唄で、深山の岨道に健な影を黒く曳いた。

讀者よ

坊やも寝ないで聞きたまへ。

「それで、市が榮えれば、何事もないです、が、こゝに勘辨の成りかねたは、其山、八谷を押領して、魔王のやうに、蟲けらまでも従へて居た狸です。這奴、肝を奪つて、森の中を追出さうと、年古り、功を積んだ通力なれば、枕返し、床返し、柱倒し、棟ゆすり、大木大樹の天狗倒し、天狗礫。

初段、そんな事は風が吹いたとも思はぬ豪膽な和郎ぢやによつて、森が忽ち黒煙りに包まれたと思ふと、小屋が火の海、火の浪に漾うて、浮出て動く。この時、魂が据ると、嵐に狂ふ緋葉ぢや、と見届ける。初手から魔魅の障碍ぢやと觀念をし

とるので、長太は斧にかつた柄のやうで、びくともせぬ。私等が聞いては、其の火の海の方が可恐しい

と思ふであすが、長太が、後で言ふ事には、水の方
で肝を冷した。何が、例の里へ夜遊びして販る道の、
皎々とした月夜です。山の峰が、晃々と光つたと
思ふのが、雲でなし、電光でなし、湧き上つた水柱
で、龍が飛ぶとも、馬が馳るとも、瞬く間に、大瀧、
大川となつて、巖を崩して目の前へ落ちかゝつた。
これには思はず退つたさうで。
太ぢや。持つのを忘れぬ、斧と鎌を眞つ直に打違へ
に顔へ立てた人間の牙です。
の漲りかゝる水へ嘴ついた。」「
處を長

をめ》いて其の漲りかゝる水へ嚙ついた。

ぱく／＼と、口も動きさうに言ふのである。
客の記憶は、一點の月夜の水が、遠い峰に迸る。

「山氣骨髓、毛むくぢやらの手で撫でられたか、
大な嚏をしたばかり。ハテナ、水どころか、道の霜
で、枯草に露もなかつたと申す事。根本が其森へ入
れまいための障碍ゆゑに、長太が山籠をして居る時
より、村から歸らうとする
路の折れ角、

山口で、種々の天變地異が起る次第。なれども日が暮れると燈が戀しい。又しては歸途に難に逢ふ。或時は、身の丈三丈ばかりの眞黒な大坊主と成つて、両手を擴げて道を塞いだ。此は妖方にある術と見えて、越前鯖波の山中へ、大佛ほどの、凄じい緋の衣を着た、親鸞上人と成つて又ツクと立つて、本山參詣の同行たちを、あらう事か、將棋倒しに手足を刎ねて氣絶させた話も、まだ別に聞いたですて。長太は、斧で横薙に脛を拂ふと、霧のやうに、入道は消えただけで。尤も刃形は、ガチンと大巖の根に打込んだ。

「負けるも勝つも、そんな思をせうよりは、夜道を掛けずとも、夜が明けて小屋へ歸れば可い。理合ですすが、其處が魔ものぢや、白晝を暗黒にするぐらゐは朝飯前で、夜晝分たず爲う事ない。」

「

相變らず霧の中を山口へ攀上ると、其の入道にも較べよう、眞白な大女が乳房の装上つた雪のやうに、身に一絲も纏はず、白裸にして、道一杯に仰向けに

寝て居た。足許に通草のやうな赤い唇が見える。これは、男として、此の姿に對した以上、とに角一應は遠慮もし、此處を通すやうにとか、路を開くやうにとか、聲を掛くべき處であつた。しかし野生の強勇は、訓練されたモダンの騎士ではなかつたらしい。いきなり泥脛で乳を踏んだ。此の不法法は、聞くものさへ、やゝ憤慨させる。果して踏むと同時に、百雷の轟く音して、白女が微塵に碎けた。これには、長太も腰を抜いたさうである。

スツノと雪片の摺合ふ音して、其の粉ごなの女の膚が中空で一個づゝに附着き合ふと、凡そ三十像ばかりの裸身となつて、さすて、ひく手、ちらりと脇が上り、腰が揺れ、踵が空に白く踊つた。

頃刻して、松吹く山風に皆消えると、長太が地に坐つた一段低い道へ、すらりと華奢な美しい、二十ばかりの女が――變化の例によつて、夜目にも頸脚を長く白く、薄い空色の小袖に、黒い帯を〆めて、髪のはりは分らない、白い手拭をふはりと掛けたのが艶々と照る鼈甲の笄に留つた後姿

で
横顔で振り向いて、褌を捌きざまに、染
めた綺麗な歯で莞爾した。

可哀相である。千年の古狸にも、此が最後の妖術
であつたと見える。何故と言ふに――恰も此の
時分は、江戸へ用のため留守であつた――其の
女房の、七年後に、夫の仇を討つために長太の小屋
を襲つた時が、此の妖方と殆ど同じ姿である。

其の妻を戀ふ一念が、こゝに妖怪と成つて、髣髴
と顯はれた。また其だけに、奇驗はあつた。長太は、
其の何時の場合よりも、此を見た時はゾツとして身
がすくんだ癖に、胸の鍵が抜け、口のしまりがなく
なり、ニタノゝと笑つたと言ふのである。

女が、手招をして、向直ると、下へが時ならぬ躑
躑して、帯がする／＼と解けかゝつた。

黒い帯の――跣足で居た――女の足許へ、
ずるりと、這つたのが、ぐる／＼と畳まると、片端

首の如く上つたが、尾を宙に捲いて、一團の眞黒なものが、長太の胸元へ飛蒐つた。

魔の狸は、機を見て、虚を衝いたに相違ない。

長太が腰を抜いた時、帯にさした斧が抜上つて、恰ど、肋骨を四枚圍つて居た。妖獸の牙は、鋼鐵を噛んで、――だから流れたのは、人間の血ではない。

長太の手は自由に利く、鋭鎌を敵へ突刺した。キヤツと叫ぶと、血か、火か、一塊の赤い雲が、落ちかゝる月を蔽うて、飛んで消えると、月の光は新しく峰に冴え、三更の嵐が峰を領した。此の傳説には年代と、日が添つて居る事を忘れないで置かう。實に、文化一四年よねん》十月十五日の寅の刻であつたと言ふ。

聞いて尚ほ可哀なのは、――此の魔が失せて、山も淺くなつたらしい。巖窟にも隠れ果せず、西の谷の芹池の汀で見出された死骸は、耳尖り、口裂け

て、如何にも年古る狸の、毛も斑に、思ひの外小さ
なのが、ちやん／＼子を被つたやうに、ちぎれ古び
た赤の陣羽織を着て居た、と言ふのである。

これは焼いた。其の煙は、すぐ霰雲に黒く成つて、
毎日山あれの續く中に、早く雪に埋もれた。年の其
の一冬は、老爺、老媪が孫子に言傳ふる、爐邊の夜々
の――斯の如く、いやそれよりも幾層倍、烈し
い吹雪、海鳴りであつた。

春が返ると、床凡で、嘗て古狸を見届けた――
庄屋を従へた――お代官が、太平谷と名づ
けたほど、四邊は、明るく靜に成つて、長太の斧は、
唄とともに霞に響く。

「さて、長閑に煙草をふかし、甘い味噌焼の獨活
を嚼つて、のび／＼と山住居に馴れたであすて。

――二年三年五六年と經ち、丁度七年めの九月
ぢやと申すことで。」

「あゝ好い時節だね――
霜 滿 軍 營 秋 氣

清。數行過雁 月三更、と言ふ頃だ。」

と云つて、客は枕に、能州の景をあはせた面色した。

「それ／＼、はあ、成程、丁ど其の時節 ー
太平谷の奥に籠つて、炭を焼いて居た長太です。
山々谷々、肅條と、秋風が白く渡る幻の夜さり、炭
竈の蓋をしめた、これが大達磨が蝦蟆を吹くやうに
月夜に白い、もの寂しい初夜過ぎに、やがて、木枕
に轉がらうとしたと御覽ぜ ー 嶽の高峰さなが
ら空天から、一あらし嵐が渡つて、爐の火も魚燈も、
小屋を吹抜けて冷たく身に沁むと、其の時。」

「あゝ、其の時。」

と客は應じた。

「其の時ぢや。」

と聲を合はせて、

「戸の外で、鋭い、が、澄切つた、まだ、うら若

い女の聲で ー ー (長太居るか) ー ー」

「――（居るは何ぢや。）――と長太が
答へる。」

「然れば、然う、然うです。――」

「七年さきの夫の仇。――」

「あゝ然うか。思出した。」

「長太居るか、と――」

「居るは、何ぢや、とうけるんだね。」

「七年さきの夫の仇。――さ、さ、其處です

て。」

按摩の耳が、又いと立つ。

「一夜に、それを何遍も押繰返すではないのであ
して、悲しいやうな、怨むやうな、然ればとて、凜
として、――（長太居るか。）（何ぢや）
と受ける。――（七年前の夫の仇。）――
とまでで、聲も姿も、フツと消える。」

翌の夜も、又おなじ時刻に呼ぶであすな。

處が、さしもの長太が、戸を開けて、うかと出合はぬ、と申すものは、それ、密と隙見をした、其の姿と云ふのが、牡狸が最後に顯はした幻に肖如であせうがや。――御大人 初手から慄氣したてです。それに、あの時退治したのは、何うも長太の自力と云ふより、神佛のお助けがあつたに相違ないのでです。――

按摩は、彼に對する善光寺の功德の割引より、長太のための利益には謙遜した。

「また仇を討つ女房にしても、炭焼小屋の筵戸なんど、蹴破つても入りさうな處ですが、此の人間一人の城に構へた戸と云、ふものには、對手が魔もだけに、おのづと幽冥の間に約束があるものとも思はれもすれば、又、此の話が、然うなる因縁であつたかな。三晩めの夜半から――

(夫の仇) ―― と呼ぶあとで、

(討たれうものか。)
と長太が申す。

「出て来よ、長太。」

翌の夜を待てや。」

「姿が消える、となるのであしてな。」

「む、然うだっけか。」

「然れば 其處で長太が、朝迅うに里へ

下り、眞成寺と申す、山間の貧地なれども、殊勝の

老僧が守してござる、楊柳勸音の白衣のお像、ひか

への軸を授かりました。斧も鎌も我を棄てて、押頂

いて負ひ申し、土橋際の柳を大束に、早や、繪姿の

感應と見えますが、其の柳を炭竈の前に半分さして、

半ばの枝を、天井裏に掛け、畫像を開いて、伏拜み、

夜を籠めて、静まりかへつて ー ー 待設ける。

長太居るか

七年前の

仇！ と云ふに、戸を開けると、黒髪が颯と流れ

る。鬢に、銀の鍬形打つたやうに見えたのは、軒に

傾く月影で、其が薙刀に輝きました。覺えたか、と

云つて、ひらめく刃に、柳の枝がしだれかゝり、し

た／＼した／＼と押伏せる。伏せられながら、熟と
視た、其の美女の目が、勸世音のお姿に、しばらく
瞬きもせず、と見ると、敷いて靡くやうに襦を破
綻について、なあー（此の御利生を分けたま
へ。）畜生の苦艱が助りたいと、がつくり坐つた
長太の、むくつけな握拳に、細い手が縋つたげぢや。

其の夜、牝狸の申したには、七年の間、江戸のお
城へ、姨の病の介抱に行つて居たとの事。――
此の姪どのが、千年を経たと言ふにつけても、姨
前の年のほどが思ひやられる事です。

徳川家の大奥に、大概の怪異變化は、おほかたに
大狸の所爲ぢや、と申す事は、不斷聞き一傳一へて
居るであすが、八百萬石の城内を住家にして居た
のは、狸も偉いであすな。鯖波で、親鸞上人に化け
たり、江戸麹町、貝坂とやらの大銀杏に住んだ狸が
長持に蓋をしてかくれた武士の首を、屋の棟へ抜い
て、血の大雨を降らしたとか言ふうちは凄じけれど、
田舎娘を尻尾で叩いて呼出したり、竹の子笠で、酒

を買ふやうに成つては、睨みが利かない。――長
太の此の時の女などは、雑と城持の奥方であすて、
さて

此の様子であすで、古狸と申した處で、それが、
例の吻の尖つたものやら、内々であすがな、鼻のづ
んと高い
御仁躰やら、

「暁起に空見れば、間違つて、山の神かも分らぬ
のであす。その證には――

「暁起に空見れば、
頻迦のやうな女房が。
空色の小袖着て、
檳榔子の帶しめて、
白雪山の薄化粧。」

で、――解脱して空を歸る處を、麓のものが
見た姿ぢやさうにあすて。これぢやと、
仙人だか、人間だか、とに角狸より偉く立まさつて
居りますでな。」

客は静に受けて言つた。

「それだけに、又話が、高く、遠く思はれるんだよ。先刻——（長太居るか。）と聞いたまでは、まるで忘れて居たんだから、一向記憶に取留めはないんだがね、口傳への其の唄のあとには——

「芥子の眞紅の小杯、玉の白露蕊にうけ、」

とか謡ふぢやないか。」

「へい、初耳。よう御存じで。——しかし、それだと、霧に乗つて、長太と婚禮でもしたやうに聞えるであすな。」

「處がね——すぐ後へ——これも今ふツと思ひ出したんだが、

「思は色に移れども。」

柳の枝に珠數掛けて。」

と言つたらしい。これだと兩方發心して捨身で佛門に歸依したと思はれない事もない。」

「はあ其處ぢや、いや唄は唄で話では

――牝狸が、其夜の長太に、ほろび亡せた夫の後世の供養を、染々頼んだと申すことな。長太はお寺へ返す御像を、其のまゝ老僧から授つて、すぐに、眞成寺で剃髪をしましてな、後には大知識と成つたとか言ふのであす。ぢやが、此の邊は、誰にも判明とはせぬのであすて。」

「雲が深くなつて隠れるのでなく、次

第に霧が晴れるんだね。明るになると、變化はうすく、唄と一所に切れぎれに消えるんだよ。其の、お前さんの覺えた――暁起に空見れば、頻迦のやうな女房が、と云ふのは、（向の山へ花折りに、牡丹、芍薬、菊の花。）薬草が一時に開く、あの醫王山の事だ、と加賀では言ふが、何、他所にもある。枝を折るうちに日が暮れて、宿に

迷つて、やう／＼泊つて、夜具は短し、夜は長し
で、其處で（暁起）に成るんだと思ふ
が。

續いて私の云ふ、芥子の眞紅の小杯　ー　もす
ぐ　ー　白雪山の薄化粧と　ー　其のあとへ續
くんだか、まるで、山々隔たつた他國のもので、珠
洲、緑剛の能登の岬を、向岸へ離れた、親不知、子
不知と言ふ形なんだよ。」

客は其の襟を合はせたのである。

「其の癖　ー　幼少の折、かうした、唄も話も
聞かしてくれた、きれいな町内の娘さんが、行方知
れず。それが何故か路の白い　遙々と續い
た桑畑の中へ隠れたやうな氣がするんだ。
後に此の能登の奥で、学校の習字の教師をして居
るとか云ふのを、夢のやうに聞いて居て、そんな事
も可懐くつて當地へ出て来たんだがね。」

何を世迷言を、とばかり。按摩が、

「ウム、これで。」

もぎ離すやうに云つて　　「長太居るか。」

「　と口の裡で呟いた。肩に耳をつけて嘯いた

面は、煙を吹きさうに、蝦蟇よりも不氣味に見える。

が、客は七十銭の按摩代を、三百、いや三十銭増し

て和睦した。

「さあ、茶を一つおあがり。」

夜の蝶

座敷を出た。横廊下の取着が直ぐ階子段で、段は
廣い。が、中ほどで、急に曲つて、S形に下らない。
それだのに欄干がない。きれいに掃除の届いたのも、
何うかすると可不可で、つる／＼と出足のスリツパ
が宙へ抜けて、裏返しにポン／＼ポン、おやおや、
下の段で馬鹿にしたやうに、ちよん、と留まつて、
眞面で、甘酒進上、と澄まして居る。

客

に其の経験があつたから、右の三十錢で軟か味を帶
びた石工である。「送らうかね、大丈夫かい。」
「御串戯を。」しかし、其處は心得たもので、
此の急坂を便らずに、遠道をするらしく、廊下を横
つたひに、一つ二つ、三つばかり、一列に並んだ
「御存じの、貝の名の、梅か、櫻か。一番、
二番を傳つて行く。次も、其の次も、座
敷は明いて居た。」

勢ひは玄能だらうが、廊下を夜行く盲目は寂しい。

それが濃い鼠の被布仕立て、いづれ、帳場では除
つて挨拶もしなければなるまいに、宗匠かぶりに、
高い土耳其形の黒帽子を押立てた。成程、縁のある
のでは、あの頸が隠れよう。――客は障子に立つ
て、其の坊主影をうつかりと向うへ視めて居た。

目の前は中庭で、植込の茂った樅、楓の幹がすく
／＼と立つ中に、八ツ手の梢が欄干越に、大きな青
い手をぶらりと出す。梯子の上り口と鍵の手に、正
面へ――づつと最う一條廊下がある。

按摩の白足袋は横の方に――それが突き當つ
て、此の中庭の片端へついて、もう曲らうとした時
であつた。

四番か、或は五番であらう。角座敷の奥で、沈ん
だ、暗い、しかし底力のある聲がした

按摩が、

「は。」

と、裾を捻り氣味に足を留めた。口が掛つたな、と思ふ間もなく、

「殿とか、様とか呼べ。ふゝんだ、へゝん！」

づづと疊障りの音が響いて、障子が開くと同時に
ある。

「生意氣だ、かつたる坊主。」

拳が宙に躍つて、横なぐりを啖はした、瞬間の想像によれば、廣袖の醉漢でなければならぬ、が、然うでない。細い緋の羽織を着た、瘡せて背の高い男子である。

小男の按摩が、殆ど本能的に縮んだから、拳は自然土耳其帽の頂邊をそいで、辻つた。ぐにやりとしたらう。張合のない事は、帽子が脱げて飛びもしない。

其處へ、三尺の蝶のやうに、翩然と出て、再び振上げようとした緋の袖の下を潜つた、六つ七つのお下げの嬢ちゃんが、いきなり、袖で按摩の手を搦むと、ツツと引き状に、向う廊下に飛んで遁げた。可憐な褌が宙へ浮くやうに見えて、按摩も一所に、庭樹の茂を、梢へ乗るやうに、もう隠れた。

あとの障子の、閉めやうの激しい事！

少時すると、眞暗な隣の空座敷に、ごそ／＼と音がする。尤も二三人で階子段を上るのが聞こえたから、新しい客が着いたらうと思つて居たが。

「ご免下されまし。」

「あゝ御馳走でした。」

「お疎末様で。」

「

入口の障子を開けたのは、元緊のお媪さんで、挨拶をしながら、其の障子の引合せ、しまりの折釘の引掛工合を、コチ／＼と行つて見て、最う一度お辭

儀をして戸を閉めた。おなじ時、空座敷の聲音は、
其まゝ海を見霽らしの縁へ出たが　――　ふツふツ
と言ふ鼻息ですぐ分る。

――　夕方浴室で知つた、酒ぶとりはしたが體格
のがツしりもので、紺木綿の三尺に、古風兩提の煙
草入と、矢立をきちやうめんに、恰も町人の兩刀構
へで居るくせに、鴻の字の半纏を太い頸に、ぐたり
と抜衣紋にした、威勢がよくて、朴訥な、酔拂ひの、
其の風呂番に、　――　お巳代がついて　――　惡
く潜まつて靜に開けた障子へ、眞赤な顔を出して、

「へい、旦那。ふツ。」

と妙に低聲で、むつくりと、半股引の尻を向ける
と、一挺の三目錐を、敷居に當てた。

お巳代に半身で覗かせながら、ハツと一つ掌に呼
吸を吹掛ける。

「一寸、お待ち。」

客が又をかきな態で、寢床にも入らなければ、火鉢にも坐らず、夜具の裾に中腰に踞んで居た。

説明が要る。

たとへば、路地の突當り、

奥のお長屋の唐突の一騒動が、氏神のお使姫のやうな嬢ちゃんじやうぢやんの捷術はやわざで、火の消えた如くに鎮まつて、仔細しさいは知らないが、先づ無事だ。

處が、廊下から消え失せた筈の按摩あんまが居る、まだ居る。ソレ背中に附着くついて居るやうに、可厭いやな臭氣しうきがするのである。なか／＼以て、「夫の仇。」

の引上げ襖つまに、長刀ながなたを構へた、其の薄化うすげし粧やうの移り香かのやうなものではない。酒さけを買かふ小僧こそうより、尚ほ世は下つて、汗あせと膏あがつらが、むつとして、知らない狸たぬきより、餛飩粉うどんこの餛すえたやうな臭氣におひである。

假着かりぎの廣袖とてらだ。浴衣ゆかたぐるみ惜氣をしげもなく打棄うつちやつて、恚いかう言いふ時の用心ようじんに、面倒めんどうだ要いらぬと言いふのを宿やどの妻つまが黙だまつて入いれて寄越よこした、フランネルの單衣ひとへものを、靴かはんを搔かきさがして、棒立ぼうだちで、裸身はだかみへ勢いきほひよく着きると、肌觸はださばりが急に柔やほかくツて、波なみを誘さそつた隙間すきまの夜風よかせが

ヒヤリと沁みて、脇の下へ冷たく吹抜ける。

ふはりと氣を取られて、うか／＼と成つて氣がつくと南無三、女ので。
白粉の香がほんのりと媚めかしい。

「馬鹿、あゝ、間違へた。」

しかし、客が――其の所謂家庭なるものに於て、細君と對の柄寢衣を着たか何うかは、いま穿鑿の限りでない。

まだ一枚浴衣がある筈。

着替へる間なしに、お媼さんが顔を出した。引續いて、風呂番の赤面であつたから。

「ふツふツ、へい、旦那。ちよつくら、釘を刺すだでね。」

お巳代も端の方へつき膝して、

「少しばかり、あの用心をして差上げ

ますの。」

木菟がまた聞こえる。

時に――用心と云ふのは――實は、風呂番とお巳代が入交つて、ひそ／＼とお客様の耳に入れたのであるが、申すも如何で、極内々の事だけれど、梅の五番、（四番は故と抜かして置く。）あの端の客人は、少々気が狂だと言ふ。

――軍人さん

休職の中尉殿だ、とこ

ろが活發であらつしやるべき軍人さんが、何うも陰氣で、はじめから憂鬱に見えた。久しい神経衰弱のため、しばらく静養の休暇を取つて、湯治場まはりをしてござつて、片山津、山中から――づつと、汽車が一條だから、泊の小川温泉。それから宇奈月――字奈月から當地和倉へ廻つたと三日前にお着様で、其の當座は、ポツポツ、そんな話を、此の巳代にも堅い口でなさつてであったが、段々沈み込んで、お給仕についてもむつりとして、些とも、ものを言ひなさらぬ。

ぐいと、腕を組んで、海の景色ばかりなら可いけれど、女中の顔を、恚う睨まつしやるによつて、氣味を悪がつて、鐵瓶の加減を見るふりして、次室へ下つて、密と様子を見る始末で。

何と、七歳とおつしやるが、あの嬢さまが、父さん、と膝を撫でて氣をつけて、御飯をよそつて進ぜさつしやる。

其の嬢さまは、――中尉殿は雑と先づ湯に入るとお膳の時のほかは、苦い顔をして、机向つてばかりござるものだから、朝に晝に、宵のうちも帳場へ来て、皆と一所に――手のあいた女中と、トランプをしたり、獨りの時は子供の雑誌の繪を見たり。其のうちはまだしもなれど、帳場が混雑つき、ついあしらひも疎かに、御自分でも遊びに飽きなさる時、玄關の衝立の蔭に立つて、うつとりと戸外を見さつしやる時なぞは、――飾つた鉢植の牡丹は好けれど、衝立の繪の、あの大きな鷺が引攪つて飛びさうで、そんな事さへ、おいたはしい。

言いすはくなひない嬢ぢやうさまじながら、其その口くちうらなぞ伺つかつたやう様
子すでは――中ちう尉めい殿どののお夫く人さんが、昨き年ねんあたりい家へ出でを
なさつた。
おさ實と里とへか、と聞きけば、いゝ
え、とおつしやる。

おみ巳よ代が、

「あんなか可愛はいいぢ嬢ぢやうちやんをおつぽり出だしてさ。」

「おま前まへなんぞもあ怪あやしいもんだべ。」

「知しらないよ。金きん兵へ衛えおぢい。」

「あゝ、金きん兵へ衛えさんかい。」

「へい、おほせの通とほり、堅かたいもので」

「嘘うそばツかり、木き津づ金きん兵へ衛えとい云いふんですの、きず

だらけでございますわ。」

「それゆゑに、此このこ娘こがい言いふことを肯きましねえ

で、へい、きかねえでし合あはせだね。もの、女に房むらにな

つたら、小が兒きをおいて、色いろ男をとこのお坊ぼ主うずとつ突つ走はしることは

受う合あひだでね。」

「坊ぼさんが好すきなのかい。」

「可い厭やな、旦だん那な様さま。」

と優しらしく、ポツとなつて、

「早はやくおしよ、旦だん那な様さまはおよるんぢやあないの。」

「何うして、其處どころでないよ。」

と、客は振のあいた女寝衣を、腕へしめて、人知れず苦笑した。

「えらく床急ぎだあ。」

「うるさい！ 早くさ。」

「それだが、へい、此の立人には、坊主に縁が絡はつて居るだでね、へい。」

そんなで居て、中尉殿が嬢さまをお最惜がりなさる事は一通りでない。――此家へお着きに成つてすぐ申しつけになつたのが、赤い端緒の小さな草履で。成程六つや七つの子のスリツパは、一寸旅館に用意がなかつた。其の赤い端緒で、ちよこノ、ツと廊下をお歩行きなさるのが、眞個に可愛らしい。

けれども、お父さんが、夜晝殆ど無言の行 同様だから、もの音一つしないで、寂寞と重たくるしく、陰氣に それこそ灰吹の音一つするのではない。お座敷うちに、二人で籠つて居なさる時、障

子外うじそとに並ならんだ上うはばきの、一つひとつはおなじスリツバでも、
づつしりと軍人ぐんじんらしい。その傍そばへ 離はなれて
でも居ある事ことか、 便たよりたさうに縊すがりたさう
に、並ならべて、附くっつ着つけて脱ぬいであるのを、通とほりがかり
に見みるものは、誰だれでも胸むねが疼いたく成なる。

そんな時とき、座敷ざしきでは、膝ひざへも抱だかれず、お頭つむをさ
すられても居あるなさらぬ。 一方いっぽうは例れいの書しょ
見けん、嬢ぢやうさまは遠とほくて離はなれて ー ー だから、一ひとしほ、
ごふびんだと言いふ。

ー ー 前刻まつき、宵よひのうち、けたゝましい卓上電話たくじやうでんわで。
行ゆけば手足てあしを引きひき緊しめられ、息いきが詰つまるやうな氣きがす
るので、誰だれも是これを一役ひとやくにして出でたがらない、と言いつ
て何どうにも成ならないから、受持うけもちの女中ぢやうちゆうが出向でむいて、
次つきの室しつを遙はるか下さつて、 おつかなもので承うけたまは
ると ー ー 宗子むねこ ー ー

「むね子。」

「宗その字じをおかきになりますの、お嬢ぢやうさん。」
とお巳み代よが註ちゆうした。

中尉殿は濃い眉毛に八を寄せた、むづかしい顔をしながら、「宗子が退屈だ、十六むさしを買つて来い。」――お正月でもある事か、今は辨慶や、兩刀づかひの源心先生より、小兒も忘れて居るものを、直ぐに大急ぎだ、と云ふ申しつけ。ないとは知つても、念のため町店の心當りを探すうちに、二度まで催促をなされる。

「催促だけは、いよ／＼おつかなものながら、女中が承つたが、さて無い事に極つた返事は、足腰が震へて女は立てぬ。金兵衛儀、そこで主の身代りほどの覺悟で、五番の土壇へ膝をついて、ど、ど、ど、何處を探しましても。」――「無い事は斷じて無い。」――咽喉を扼るやうな號令と、床の間のぎら／＼鞘に、ぶる／＼と震へた時、――もう別々に取つた大人ものの寢床の上で、坊主枕に、俯向に成つて居なすつた嬢さまが、ツイと起きて、ツイと出て、ツイと出しなに、金兵衛の肩を胸で壓して「遊ばうや。」と、ひらりと廊下にお出まし。さうして、此の急な段を、小さな草履で。や、嬢様驅けては危い、をきつかけに、大慌

てもものに成つて飛んで遁げて、御發明さと、御情愛と、尚ほそのお哀さに、可厭だを構はず、高い、高いで、帳場まで抱へ込んだ、と言ふ。

やつと事ずみ。時がうつつて、嬢さまも座敷へお歸り。が、日に増しに思はれる、段々癩が昂ぶるらしい、困つたものだ。一度警官の耳へ入れて置かずとも仔細あるまいか、と隠居も小首を捻る處へ、按摩の騒ぎの突發であつた。

「——良寛、良寛——旦那。」

と風呂番が酒の息で、草色の股引の膝を寄せた。

「旦那がお着の時、帳場に居ただがね、あの長い髯の、此家の男隠居も知つとりますだよ。良寛ちつて、歌よみの坊主があるげでや。中尉殿の奥さまと突走つた、間夫と云ふのが、ハテ其の坊主だてば。」
と眞赤に意氣張る。

お巳代が、疊を叩きたさうに、
「慌てては不可いよ、木津金たら！」

「木津金が怪我鐵でも、ふツ、此が慌てずに居られるかの。七つになる子を打棄らかして、嬢々が坊主と驅落したゞで。」

「坊さんだか何だか、
知りもしない癖

にして。」

「だちツてお前、宗旨を擴めるなら、坊主だべが

や。」

「宗旨ぢやありませんよ。歌ですよ、ねえ、旦那。良寛さま、と云ふのは、歌よみでございますわね。」

「まあ、何しろ、穩かに談じておくれ。」

客は成りたけ、脇明をすぼめ、肩を聳かすばかり
女ものの袖を手加減しながら、

「聞取法聞で、私もよくは分らないが、名が同じ
で——
現今の人なら知らないけれども——
良寛と云ふ坊さんは、百年ぢかくも、昔の人だよ。」

「え、越後の西蒲原——
なんでございます
つて
方々芝居や、活動になんぞもします

さうで、あの
内の隠居も申して居ります
の。
手毬をつけて遊んでござつた、風流
なお方ですとさ、お優しいわね。」

「へッ、それだ！ だから言はねえ事ではねえて
ば。其の術で娘子を誑すだよ。好くねえ入道入ぢや
ねえだかの、可厭な野郎だ。早え話が、己が手毬を
ついて見ねえ、嫌味だか、嫌味でねえか。」

「違いますよ。
墨染のお法衣で、綾の
手毬の綺麗なのを、しをらしくさ。」

「畜生、法衣の袖がひいらひら、とけちがるだ。」
と口のへ形を引曲げて、
「それを言ふだあ。
坊さん忍ぶにや闇
がよいと、何だちツて了見が間違つてるだ。歌を詠
まうが詠むまいが、山寺の和尚さんなら、猫を紙袋
へ入れて突けさ、ポンと突きやニヤン、へ、へ、へ。

ニヤン。」
と床の間を、額でしやくつて、

「面あてがましく云ふではねえだが、時節かまはず突かれた日には、今時のゴム球は違ふべ。娘ツ子が五色の糸で縷った奴だ。正月の遊びだものを」「十六むさしを買つて来うい。」「第一旅籠屋が迷惑するだね。」「旦那の前でがすけんかね、中尉殿が間違つてれば、その良寛坊主も狂れてるだあ、これ。」「

「然ういふお前さんも少し可訝しい。」

まあ、穩かに頼まう。よくは私には分らないが、様子何だね、其の軍人の奥さんと云ふのが、良寛の歌に太く凝んなすつたか、それとも、良寛の歌を弘める弘めるは變だが、世間へ教へる男を信仰するかして、間違ひが出来たと言ふんだ。」「

「そ、そ、そ、その通り、その通り、お見透しだぞ。」「と三度ばかり叩頭をした。」

「そんなら御存じでございませうと、お巳代が言を添へて、おなじ越後出雲崎の床屋の職人

で　　―　　人は彼を立志傳中の士とか稱へる　　―　　良寛の歌を、國訛のまゝ、鶉呑に暗んじて、上人の、雲の如く、水の如し、とやら、其の行状とともに、諸國に講演鼓吹して廻るのがある。

此家ではないが、近い頃能登へも来た。其の、行李で持歩行く良寛書の中の一幅を、眞偽のほどは知らないが、歌が教訓に成ると喜んで、髯の隠居の購つたのが、偶然と言はうか、不可い事は、中尉を通した、梅の五番に掛つて居た。

あら！　と嬢ちゃんが、いきなり目に留めて、すら／＼と詠んだ。　　―　　七つになるのが、餘程見馴れ、聞知つて居たらしい。

中尉が憂鬱酸苦なる色して、　「取下げる。」

―　　あとは前に言つた通り、その五番さんの日常の　　―　　と言つても三日か其處等だが、行爲と、間さへあれば帳場でぼツとなつて遊んで居る、

嬢ちやんの稚い。口うらとで、鴻仙館中が摸索推薦した處なのである。

「良寛さま 然ういつて、う

つかりしたやうに、小さな掌をお合はせなさるのな
んか、見て居られませんですの。」

「おらは又、床屋の兄ちゃん 何かの取

つかゝりに、嬢さまの獨言を聞いたゞが、ふツ、澁
いやうな、酸ぱいやうな、鹽ツ辛い涙が出ただで、

旦那。

「あの、おいとしい、小さなお手で、お父さんめ
しあがれと、お給仕をなさるかと思ふと。」

袂の端を、ツと噛んで、お巳代が俯向くと一所に、
金兵衛がペソを搔いて、くひしばった。

客は何うしたら可いだらう。こゝに大きな酢甕か、
手頃の象があると、繪にも話しにも成るのだけれど、
夜具を敷放しで、其の裾の方へかたまつた三つの顔

は大掃除に腹の空いた状であつた。

處で、其の理由の――これは前提であつた

――肝心の お媪さんが戸じまりを檢

め、風呂番が錐もみをしようとした仔細を、いま簡潔に説くものは、何よりも、やけに横外頬を撲曲げられようとした按摩の名である。

「按摩は、ありや、良かんチツて、おらが好物の――升だ、酒の爛。」と矢立を捻る。

「違ふよ。良勤ですよ。ご勘定だの、お帳面にあるのぢやないの。」

金兵衛は率直に抜きかけた矢立を引込めた。――
成程あの按摩が自から名のりさうに思はれる。

良勤が、廊下づたひに、五番の方へ廻つたのは、
客が見て居た通りであつた。

「良寛　——　良寛　——　」

想像だ、と言ふが事實であらう。座敷の奥で、中尉の呟く聲がしたのを、「良勘、良勘」わが事と按摩が聞いて、呼棄にされたを憤り、むきに罵り返したのが、あの騒ぎになつた。

帳場へ駆け込んだ良勘も、ひそかに隠居から、あとさきの事情を聞かされた時は、溜息をほつと吐いた。「氣の狂れたのでは大變だ　——　洋刀がある。」と身震ひして、

「一昨年の善光寺　——　あの時以來の御利益です。まるで宙を飛んだやうで　——　歩廊下よ、この階子段は一呼吸であした、お嬢さま難有い。」十六むさしの風呂番と合はせて、宗子は、一晩に廊下を左右へ、二人を捌いて救つたと言つても可い。

あとで評議がはじまつた。五番さんの今夜の様子では、何うも癩の昂りやうが度を強くしたらしい。

その呼聲

木口も選んである。古い、健全な建ものの、百年以上も無疵な敷居へ、錐釘を刺されては何うも見て居て頭痛がしさうだ。――

客は平に斷つて、もとの空座敷の方へ二人を返した。

すぐに降りられる階子段を、大回りに、悪く聲音を潜めて、二人が廊下を傳つたのは、それとなく軍人の、別して嬢ちゃんの様子を餘所ながら窺つて行くらしい。

客は、もう一枚

正にあつた

浴衣に着換へて、女もののフランネルを袖だたみ、否々、われ／＼男性の地位恪守のために、こゝは押束ねとしよう。が、どの道名譽な事ではない。黙つて棄て置いて然るべきだけれど、然うすると、女中が手掛けて、直に脇明から家庭を覗かれる憂ひがあ

る。鞆へ突込んで、それから、バスケットへ轉がした
たなりのウツスキイを、かう踞んで飲むと、あの風
呂番が喇叭を極める時の形を思つて、獨りで笑つた。

最上一杯。――さうして帶をしめ直すと、行
動は金兵衛でも、様子だけは良寛上人と間違へら
れない自信が出来た。

（――） 但し皆これは後日に分つた事である

――）

また、もう一杯。

「長太居るか。」

と、思はず聲を出した。――實は古狸のもの

語を聞く時は、其の聲を口へ出すと魔を呼ぶからと、
禁制されるのが習慣になつて居る。客が稚い時に話
をしてくれた、町内の姉さんは、特に戒めた筈だと
憶ふ。また不思議に、此の話のあとでは、

おのづから口へ出して長太居るか、と言ひたくなる。

あゝ、又木菟が鳴出した。――鷲の

手球唄も、ギアとが五月雨の夜の笹鷺のお化聲も、
傳説や昔話が、それ／＼その存在を傳ふる手段で
あるらしい。

實は、聞くと直ぐ、もつと先から、つい口へ出さ
うなのを、人前憚つてゐたのであつたが。

「居るは何ぢや。」
と障子を明けながら、一度廊下を見た。赤い端緒
の小さなのが、拭込んだ黒い廊下に、生々しく動く
ばかりに目について、蝶の袖に對しても、躑躅の散
りたまつた毬の風情であるべきを、何となく水を離
れた、金魚の寝た状に想はれてならない。

折から、遠い湯女唄が、廊下を流れて欄干に滴る。

「七年さきの
あゝ、馬鹿な。」

客は袖で消して障子をしめた。此のしまりは鍵を
掛け、嬢ちゃんの一人で寝ると聞く、枕に一寸目を
閉ぢて――時は今を咲かゝる、柘榴の緋を幻

に、鬼子母神を心に祈つた。

寢床へのび／＼とすると、ありあはせた旅行案内の折込みを其まゝ、何となく、按摩の自慢の長野を辿つて、柏原、高田、順に直江津。名立、能生、梶屋敷、素魚川、親不知、市振、昨夜の泊の小川温泉。――其處で聞いたもおなじやうな湯女唄が、蒼海の夜の浪に、兩方で、とけて、もつれて、結ばつて、また解けて

「長太居るか。」

「長太居るか。」

「含んだ、うるほつた婦の聲が――廊下から、長太居るか。」

夢、現などと言ふべき場合ではない。空耳にしては、餘りまぎ／＼と、すぐ其處に。

しかし、次の室との間には、もう一重襖があつて、

要害は先づ堅い。

「長太居るか。」
唯、間があつてまた呼んだ。

「――實は、筆者は、こゝを記すために、最初から宿帳を預つた。それは客の名が長太ではないからである。全然違つた名を呼んだのでは、一聲聞くとともに、直ちに我を呼ぶ！？」と、客の直覺するのが、讀まるゝ方々に、打つて響くやうに行くまいと思ふ。其のための不束な用意だつたのである。

名告るのを惜んだのも、客のために自重したのでも何でもない。矢野誓と言ふ、名の確な品行のほどはよくは分らないが、仕事は世が柔かわれ／＼のなかまである。年紀は、筆者などより少いが、伎倆は好い。眞個は、いきなり古狸の對手にするのは、ちと氣の毒な人品である。

が、さし構ひなく話を続けよう。

尤も襲つたのは雌狸らしい。矢野誓もまんざらではあるまい。

「あ、」
女中の唄も留んだ。それきり、しばらく

く聲も氣勢もしなくなつた時、渠は密と起きて、

「――猫よ、おどかすな、蝦蟇、化けるなよ。おなじ八疊の巖窟に籠つたんだ。――」

それほどの餘裕、いや、ウヰスキイ三杯の元氣である。少し身構へ氣味に襖を開けると、其の
「あ。」
轉がした黒い鞆が狸に見えた。

薄あかりに、けばの立つた疊の目が、一面にぼんやりと浮いた中に、我がものながら、其の革の兀げたのなぞ、野山に年経る装ひである。

すぐ障子までは、心を急かせず、靜に様子を窺つ

た。

梅の五番　――廊下の曲角を、軍人が物狂はしく閉籠つた前あたりで、海の風の吹とまるやうな細かなもの音があつて、寂然となる。

誓は、此の時、少しばかり寒氣がした。

あるべき事では断じてない。が、假りに、あの小さな赤い草履が、こゝまで動いて来て呼んだとするのは、それは三ツ目一ツ目の小僧より、身の丈大佛ほどの親鸞上人よりも不氣味だつたからである。

勿論、女の聲は？　――空色の小袖に黒い帯、ふうはりと白地の手拭　――　そんな姿は此の温泉宿の二階の廊下に、想像にも及ばないが、聲は、僻耳でなく確と中年増

「白雪山の化粧して、
芥子の眞紅の小杯。」

何故か、唇は紅いやうな。

霜の白地の手拭は被りはしまいが、温な湯上りの濡れたのを袖に添へて居ようも知れない。それに、月の鍬形打つて、薙刀を引そばめた、鋭く冷たい扮装でなしに、何だか、聲までを、湯氣が、ほんのりと包んで

寢床で、枕に頬杖した。

「長太居るか。」

「長太居るか。」

「何誰？」

「何誰です！」

「長太居るか。」

呼聲の顔が、正面に向いて、身も大きく、障子を蔽うたやうに、然もわれに應じるにあらずして又呼んだ

急に襲はれた気がして、呼吸を詰めた間に、偶と黙つて、途中を何う飛んだか、今度は其の五番の眞向う――此の座敷の廊下と、中庭に並行する一條の長廊中に、しと／＼沈めた上草履の音がした。子供のでは決してない。

それに、たつた今人氣勢が障子を壓した時は、柔かい、軽い、量目も凭れかゝつて、人膚の氣らしいものが、目に見えない陽炎を白く立てた。胸も乳も露呈なやうに。

――長太の月夜の岨道に寝た姿だ。狸は高潮の術を使ふらしい。

誓は思慮した。

――これは警戒をすべきである。思ひ切つた大女の裸體でもあつて見たが可い。いきなり惡戯に抗らつて廊下へ出るとして第一足場がよくない。衝と進むにも、横に開くにも、其處は欄干のない急螺旋のつる／＼にる階子段である。其のうへ、襲はれて居る癖に酔ひは廻つて、足許がやゝふ

らつく。夜は次第に深し、ともすると憊うした海も山も、温泉宿も、狸が噴出した屋氣樓のうちに居るらしく、――をかしい中にも思はれたから頻りに足許が氣になつた。

其のうちに、跽音は遠くなり、なり、次第に低くなる筈が、段々ばた／＼と聞こえて、一廻りして向う廊下――大きく箱形に取つた中庭の眞正面の、其處には劃ると九つばかり、取拂ふと百疊にも餘る、だゞ廣く、古く煤けた道者旅籠といった構造の、鼠の古戦場のやうなのがある。それ、其處を傳ひつつある音を聞け、ばたん、ばたん、ばたん
と遠音にも高く響く。

山道充満、障子一面の大女ではない。背のすらりとした、見立てのきくおいらんだ。

中庭のつくり状が、其の女郎屋に似て居たさうである。今時、そんな心得違ひの男はありさうにも思はれないが、誓なぞが少年の頃は、一代の道中双六に、賽の目が何う出ようと、一度は此の關に引掛つ

た。提灯なしに峠を越すに似て、要するに、草鞋ばきのまゝ乗つて行く、たとへば汽車の隧道であつた。

其處で山幽に、斧を打つやうな長廊下のばたん／＼は、きこえた。眞夜中においらんの苦界を往來ふ音にきこえた。

さて其の音は、學者の統計にも、客の經驗にも――大方は待つ身の枕、臥猪の床には通はない。遠寺の鐘も他所へフツと外れて、山鳥の羽に抱かるゝ花と成る。

其の氣で。

「さあ寝よう。」

誓は肱を袖で捲いて、其手で蓆を落した。

「長太居るか。」

「居る。」

うっかり應じた。

「居るは何ぢや。」

「七^{しち}年^{ねん}さきの夫^をの仇^とかたき」
ほゝゝゝ、と桃^も色^{いろ}の笑^{わら}ひが、障^{しや}子^{つじ}を染^そめたやうで
あつた。

淺^あ草^{はく}がへり

「――長太居るか――と親仁、一つ願は
うぢやねえか。」

「森林の草樹が一面に燃え上る處も壯んだがね

――何うも些と氣になるよ。震災に怯えて居る
からね、ありや、ありや、とか云つて、お前が、背
景の繪の炎を揺ぶる處なんざ、火事と地震が一時だ
ぜ。」

「――くさり洞抜いてよ――長太今宵も里遊び」

とか、「月は高嶺に冴え返り」とか口上があつ
て、それ、大女の白いのが。――

と、急に聲を小さくしたのは、洋服屋の松川何某
――續いて京染の若旦那。

小兒對手の、紙芝居、人形繪とも稱へよう。

人倫訓蒙圖彙にも、職人盡しいにも記して
ない。餡を賣る景物に、くり抜繪を操るので、追つ
て考ふべし。假に飴屋芝居と言はう。裏道へ荷を下
ろした、其の屋臺店へ、六七人で集つて居る。足袋
屋の太助、銅壺屋、鋳屋、魚屋の八五郎、が、唸る

から魚八うをばちと言いはない、ト、ト八はち　　―　　―　　床屋とこやが交まじつた、此この屋號やがうが、時代じだいに鑑かんみて、曰いはく共同軒きょうどうけん。鬢びんだらひ盤ばんの町内ちやうない無盡むじんか、大理石洗面器だいりせきせんめんきの寄進きしんについて欲ほしさうである。

―　　―　　場所ばしよは芝しば

門前もんぜん、片門前かたもんまへあたり

震災しんさい後ごもおなじ事こと、界限かいわいの軒のきには、門札もんさつより、池上いけがみ、堀内ほりのうちをはじめとして、大山講おほやまかう、大師講だいしつかう、三峰みつみね、二十六夜にじふろくやなど、講中札かうちゆうふだの數かずが多い。焼野原やけのはら同然ぜんの家並やなみにも、町まちの由緒ゆいよ、土地とちの傳統でんとうを飾かざつて、森もりの影かげ、山やまの影かげ、おのづから穂屋ほやの薄すすきの影かげを宿やどし、火ひよ除けの符ふさへ、水みづの音おと、風かぜの聲こゑを、奥深おくぶかく淺間あさまな家いえにも通かよはせる。

そこらに巢食すくふ町内連ちやうないれん。

一人ひとり々々／＼に言行げんかうの記しるすべきはない。が、お立合たちあひの中なかには、氷見ひみの良勘りやうかんならねども、組合くみあひの委員ゐんん、町ちやう會くわい議員ぎんんが交まじつたから、敬意けいゐを表へうして、一二いちに姓氏せいしを録ろくしたのである。

たゞし其の言ふことは、洋服屋とともに聲を潜めておく。

「あれがさ、むつちりと、白い乳を仰向けに、黒幕へ浮出る處は、少しばかり其の何だぜしかし見ものだよ。」

「狸でも大事ござんせぬ。」
と誰だ？
鋸屋が眞鍮色の聲を出す。

「あれをさ、いきなり土足に掛けるといふ法はないよ、町會決議によつて、もだね。」
「ト、吉さんが鮫鯨を料ればつても、一應は挨拶をしてから出刃庖丁を使ふだらう。」

「す、す、す、すべつこい、も、も、もち膚だと云つてね。」

「縹子羽二重の手觸りでござんすかい。」
と、足袋屋の太助將棋に「待つた」ばかりするから、稱して、またゝびの太助がコハゼの緊らぬ

口くちをきく。

「何なにしろ、あの濡場ぬればから見みせないか。」

「濡場ぬればはをかしい。おどかし場ばだ。」

「何を何處どこに隠かくして居ゐるんだか、彼處あそこで可恐おそろしい音おとをさせるが、あれは不可いけね。」

「いつか、のツけに啖くらつた時は、私わたしなんぞも吃驚びっくりした。」

「小兒こどもに毒どくだよ。」

「穩おだやかに一つ頼たのまうよ、なあ、紙芝居かみしばい。」

「はあ、へい、え、え、」

と、誰方どなた様さまへも觸さはりなくあしらつた、荷にの舞臺ぶたいの

正面しやうめんから覗のぞく芝居屋しばゐやは、ちよんぱり眉まゆの匆はねた、丸まる

顔がほに、黒坊くろんぼのやうな頭巾づきんを投なげて、黒袴くろはかま ー ー 裁たッ

着つけを穿はいて、無地むぢの白しろい行衣ぎやうえに似にたもの

兩部りやうぶ混合こんがん、風體ふうていは怪あやしい。が ー ー 飴あめは太白たいはく甘露かんろ

糖たう、越後えちごのさらしを進しんじ申まをす ー ー 即すなはち、不ふ斷だんの

口上くちじやうである。

「あいや、皆みな様さま。」

と少し氣取つて、

「紙芝居ではござりませんな。當一座の儀は、姿歌舞伎と稱へまする。へい。」。

―― 姿歌舞伎 ――

「え、え、え、え、偉い！」

恚ういふ時には、魚吉のうけ方が打つてつけで、

京染の若旦那が、

「姿歌舞伎寫素裸、は難有いね。」

と云つた。

「よう、能登屋ア。」

と、銚屋の眞鍮聲。

紙芝居の舞臺裏と云つた屋臺の後で、黒頭巾を揺がして、

「能登屋は、何うも、どつとしねえお聲がかりだ。」

様子で見ると、何の郡か、飴屋の出の能登國である事を、いつか町内が聞知つて居るらしい。のみな

らず、幾立か、其の番組のうちに、郷土の古狸を脚色して、毎々繪で操つて居るのも知れる。

「お湯屋と言やあしめえしよ。」

「能登ものと言へば三助と相場の通つたものなんだが、芝居とは進歩したぜ。」

「おまけに、操、假聲、衣装、小道具よ、背景に、鳴りものと、丑満の鐘がボーンから、駆けつけのバタノ、まで一手に行るんだから大したもんだ。」

「その上に、手前の方は、又格別科學應用と申すので。」

芝居屋の言ふ心は、小兒衆がよくご存じ。手返しの繪姿を、平面にパツパツ、クルリ、ギクリ、トン、と扱つて、一面の硝子張に立體に働かせるのが映るのである。

「第一繪が好い、此處のは眞個によく出来てら。」

「お待遠様。」

と、言ふのが、「待つた」の足袋で、皆が笑つた。

町會議員は、薄髯の頤を撫でて、

「能登だから三助子で、湯屋で思ひついたなぞと、冷評す譯ではないんだからね、素裸のお早い處を、」

「おゝ、一層恥かしうござんすわいな。」

黒頭巾が女形でしゃべる。

「わあゝ、狸が出た。」

と、あとへ退つに、またゝびばかりか、怯えたのが二三人。

「狸といへば山の手は勿論だし、下町にも景物だつた鍋焼餛飩は、越後から冬中の稼ぎに出るんだ、と聞いて、驚いた事がある。一寸新内と

云ふ商賣だらう。博多帯しめ、筑前絞ぢやあないが、田舎の人とは思はぬサ。何かい、頃日、盛場は一面だし、方ノ、で見掛ける、此の芝居の同業は、

おなかまはだ

皆、能登出かね。」

立役がまへの黒頭巾が、軽く三枚目に又頭を掉つて、

「同じ國も、そりやあるですだ、しかし、皆が、然うぢやあねえんですよ。私どものは、他に眞似手はないのでね、第一仕込みが違ひますでね。」

「實際器用だよ。催促をすると、お待遠様なぞと、云ふ人があるから氣に成るが、何かい、あの際どい處なぞも、お前さんがやつつけるのかい
いゝえさ、あの白い處を描くのかね。」

芝居屋は頭巾の下で、ニタリと行つて、

「違ひますだ。そりや間に合ふものは、

私どもが間に合はせるけれども、肝腎の立役、立敵、別して立女形と成ると、そんな飴を賣るやうな甘口なものではないのでね
誰某、様々と云ふ

歴乎とした、其の

「

共同軒が、理髮衣の胸に、高く腕を組んで反りながら、

「繪師かい、ふうん。」

何と云う？ 何處の と二三人早口である。書畫を掘出す氣の男が交つたから。

「それを、名告るほどでござりますれば。」

と聊か臺辭じみると、芝居道に思入れとかいふのが、一寸あつて、

「就きましては、恚やうに御大人方のお集りは、未曾有とも申したい。」

と言つた。二錢が飴の景物に、いかにも未曾有、と言つて可からう。町會 議員まで出た譯は、
「此の頃植ゑたらしい、其處の辻の柳に添つた
妍麗い娘の立姿を見ればわかる。」

花柳の女 師匠、數枝の娘、お李枝である。

帶の薄お納戸に、女郎花、萩などの、優しく弱腰

を^しめたのは、羽^は二重^{ふたへ}か、縞^ろであらう。久^く留^る米^めの紺^{こん}
がすりの單衣^{ひとへ}に、細^{ほつ}そり朱鷺^{とぎ}の肌衣^{はだぎ}の覗^{のぞ}く、襟^{えり}白粉^{おしろい}
がくつきりと、肌^き膩^めの緻^よさに、透^すき通^{とほ}るやうに見^みえ、
柔^{やわ}かに濃^こい髪^{かみ}を無^む雑^ざ作^さに取^{とり}上げた、至^し極^{ごく}今^{いま}風^{ふう}でない
束^{そく}髪^{はつ}の鬢^{びん}のおくれ毛^げが、清^すい耳^{みみ}許^{もと}に、ほんのりと幽^{かすか}
な蔭^{かげ}を取^とつて、殆^{ほとん}ど白^{おしろい}粉^け氣^けのない、素^{すが}顔^{がほ}である。こ
れは、自^じ分^{ぶん}の心^{こころ}掛^がか、おつかさんの師^し匠^{じやう}の注^{ちゆう}意^いか、
知^しらず、いづれにしても包^つましく派^は手^てでないから、
顔^{かほ}の白^{しろ}さも、薔^{さう}薇^び、牡^ぼ丹^{たん}の装^{よそほひ}に似^にず、ほのかに咲^さい
た夕^{ゆふ}顔^{がほ}である。

突^つ掛^かけの駒^{こま}下^げ駄^たに、素^す足^{あし}の惜^{をし}氣^げのない指^{ゆび}が、きり、
とした襖^{つま}に、裏^{うら}透^すいて、白^{しろ}く、ちら／＼して、撫^な肩^{がた}
のすらりとしたのに、辻^{つじ}の角^{かど}の、其^その柳^{やなぎ}の小^こ枝^{えだ}がし
だれかゝるので、折^{をり}からの打^{うち}水^{みづ}に露^{つゆ}のこぼるゝ風^ふ情^{ぜい}
がある。

芝^し居^ゐ屋^や臺^{たい}から、如^に法^{ぽう}の男^{おとこ}連^{づれ}を、二^に三^{さん}間^{げん}横^{よこ}に避^さけて
―― 前^{まへ}へ屈^かんで大^{おほ}供^{ども}に饒^{しやべ}舌^へる飴^{あめ}屋^やの―― 裁^たつ
着^{つけ}の腰^{こし}を斜^{なぐめ}に觀^みる場^{ばし}處^よを取^とつた。

柳やなぎの植うわつた角かど家は、白木しらぎ造り、みがき格子がうしの二階い家で、丁ちやうど簾すだれを捲まいた連子窓れんじまどに、水浅黄みづあさぎの深草團ふかくさうち扇は。何どう云いふ好このみだか紫むらさきの房ふさのついたのが透すいて、浮ういて、軽かるくお李枝りえの背せなを叩たいて、お使つかひなさいまし、と言いひたさうに覗のぞかれる。

こゝは女をんな名な前で、札ふだに胡粉ごふんの三柏みつがしは。向むかう相角あひかどのおなじやうな二階にかい造じゆは、朱しゆの横木瓜よこもつこが廂ひさしを潜くつて、燕つばくらが嘴くちを出だしたやうなと見みると、三柏みつがしはの方はうは、小ちひさな白鳩しらほと。お妾めかけ横町よこちやうと云いふとか聞きく。こゝの町柄まちがらを思おもはせるとともに、お李枝りえの人ひとがらに親したしみと愛あいを寄よせて、鳩はとは含ふくんで居ゐる。

燕つばくらは性急せうかちだから、ツイと出でて、肩かたをさすつて、柳やなぎに飛とびさうな氣勢けいひがある。

また、あの紫むらさきの總ふなが、そよいで、持もつたら似合にあひさうに、何處どこか、不ふ斷着だんぎの袖そでにも品ひんのあるお李枝りえが、臉まぶたをほんのりと、上氣じやうきをして居ゐた。

然さうだらう、疊たぐみにすれば半疊はんてふばかり、茶棚ちやだな一つほ

どの飴屋芝居の舞臺前に、其の大供の跋扈を見よ。

常じやうとくい肝心かんじんの子供こどもたち、凡およそ二十人にんばかりといふものは、鯰なまづに搔廻かきまはされた丁斑魚めだか、金魚きんぎよのやうに、一ひと煽りあふでなだれたつけ。見みたさは見みたし、補助ほじよ椅子いすも何なんにもなし、引ひかたまつて、ごしや／＼と、お李り枝えのまはりに土手どてを築きづいて居ゐたのである。

其そのお李り枝えも 就中なかんづく、いたいけで、どの子供こどもよりも小ちひさく、群むれの中なかに眉まゆも口くちも沈しづみさうな、おかつばさんの振袖ふりそでで、紋もんの中なかへも入はいりさうな、踊をどり子の揃そろひの手拭てぬぐひでふつくり捲まいた、舞扇まいあふぎを――常夏とこなつに文箱ふばこを添そへたやうに胸むねに抱だいた、五いつつ六むつの女をんなの子この手てを引ひいて居ゐるのであつた。

町まちを二ふたつほど隔へだたつた新道しんみちから、此處こゝへ來きたのは、實じつは此この子このためなので。

「咲さきちゃん

また來こようか。」

「うゝむ、もつと

」

踊の師匠の住居は、つい其處等の横新道を入つた處で。――以前は烏森邊に、緑の一本、しげる柳に、島田振袖いろ／＼の、姿の花を咲かせたが震災とだけで、言を費すには及ぶまい。今更、干支、九星に問ふまでもなく、年とつて住所定まらず、諸々方々、山の手場末新開地などを苦勞の中に、經歷つて、こゝに、最う三尺ほしいと云ふ、二室ある奥座敷へ稽古舞臺を据ゑたのは、漸と去年の秋だと言ふ。

はじめは、町の角の處に、花柳數枝と記した、一寸道しるべ、と言つた白塗の杭が立つて居て、それにさへ、夜目には招かれる、と若い衆は立集つた。

これは道路課から沙汰があつて、住居の木戸の柱の根へ引込んだが、普通の折戸で、萩も植ゑてなし、船板塀でもないのに、何うも、其の杭の、すこし斜立つた處が、船頭の櫂に似て、若い衆の魂は、善玉、悪玉となつて、腰蓑で、其のまはりをふらつくと言つて、町が騒ぐ。

午の日だっけか　ー　お花、お花　ー　の荷が留まつて、椿の紅い花片をぱらりと散らして行つたのが、おなじ道しるべの杭に留つたのを見て、錦木が立つた、と又騒ぐ。

お師匠さんは、四十を一寸　内外か、もう些と出たらうか、色がくつきりと白のところへ、娘よりは肉づきが豊で、銀杏返しでも、引詰めでも、白襟で極つた鬘でも、水々として艶がある。第一、あの、目の働き、其の色氣は、雪を使ひ、花を咲かせ、鳥を鳴かせ、蝶を吸ふ。　當代に於て、それ此を微妙の表情と稱へる、と床屋で若旦那の説くところ。

會社通勤の弟だと云ふのが、朝出て、夜分に二階へ歸る。おなじく役者にしたいたいほどの容色だが、年頃も姉より無論下だし、師匠に似て居るから、先づ安心。ほかに旦那らしいのも、いゝ人らしいのも、まるで男の出入りが無い。が、門並に打つた講中札、弘法　大師の分別でも、二女を、ひとりものにして置くわけはなからう。戀のかけ橋中絶えて、戸口に

溝板も見えないけれども、あの道しるべが、櫛ならよし、錦木はまだしもだ。焼木杭にならなければ可い、と尚ほ騒ぐ。

また、び、魚吉、共同、軒、隣町、横町の各自、家業は違つても、經師屋たる事に於て、相讓るまじき連中が、一人も弟子入をしないのは、師匠が張手を遁げるのも、封ずるのも何でもない。尤も、預る教子の娘たち、女連に對して、男弟子を引入れるのは、歴乎とした女師匠の潔矣としない處ださうである。が、其の意味でなしに、經師屋の入らないのは時世であらう。

晒すのは雪の肌だ。玉川の水に、猿股を洗つて可いものか。手拭を持つて、据腰の、しやなり、しやなり。ア、かよいきた、と扇子を裏表に翻す如きは、沙汰の限りである。小唄、歌澤、長唄、清元など淨瑠璃は、まことうたはず語らずには、活きて居られぬ仕誼ならば、自殺をするより増かも知れない。唸りも、吠えもするが可い。が、野郎の踊ることだけはと然やう、此の町内の連中

の、親の時代あたりから、遺言をしたに違ひない。

渠等も又覺醒した。

で、舞臺で、トコトンが出来ないかほりに、遠まきで地たゞらを踏んで居る。

町内近所が騒々しいのに、數枝の内はもの靜かで、時には寂しい事さへある。

お弟子の數は、まだ少い。土地馴染がなし、花柳界には、場持の極つた師匠があるから、稽古を受けるのは、邸にも町家にも、大方はまだ十二三を頭の子供たちで、學校がへりが一時賑ふくらむ。

時間が、かれこれ同じだから、新道口で、おしやまなの打つかると、――いづれ、踊を教はつて居るのだから、自然と、肩袖に姿態がついて、――（褌までは行かない）――運動場の駈競とは違ふけれども、競争でちよ／＼ひら／＼と、馳り込むは可いとして、格子の所で、淀の川瀬の水車に

しがらんで、私が先よ
で、がたひしと一
揉み揉む。かつこ、駒下駄を脱ぐが早い、私が先
で、框の障子を開けるのに又揉合ふの
だから、あとから、あとから穴があく。

もう春の半ば頃から、格子も障子も一枚は明放し
で、早手まに、唐草すかし、レエスのカーテンが掛
つて、すぐが茶の間、正面は、襖を左右へ、兩方
に、淺黄で縁を取った籠が下つて、紫の總がしつと
りと垂れて居る。――これは娘の方の好みらし
い。

お李枝は、しかし、惜い事には、若いお師匠さん
で、代稽古に立つのではない。絲道もあいて居るし、
生れると、もう、あんよは上手、轉ぶはおへたも、
皆舞臺で育つたから、見やう見真似だけでも、腰が
極まつて、小手の利くことは、出来合の名取などは
敵はせないが、自分も控目だし、お母さんも、棒を
使つたり、さらしを捌いたり、たとへ疲れたと云つ
ても、代稽古などは決してさせない。

―― それに、娘は、實を言へば、あの容色につけても、あはれ、氣の毒らしい、が、十七と云ふ、うら若さに―― 烏森に住へる頃、容色望みで、無理強に娶られて、やがて十年 仔細あつて不縁になり、一昨年をとっしの暮くれごろから出戻りである。

―― 聞かせようか、若い衆に―― 母さんも孀やもめだし、娘も派手むずめな白い花しろはなが、露つゆにしつとりして居るのは、一つはそのためであらうと思ふ。

それから、これは寂しい、と言ふより、寧ろ蒼然さうぜんとして、新舞臺しんぶたいながら流儀りうぎの蔭かげの濃こまかなのは、其の舞臺ぶたいを高く、トンとおりて突つき通し正面しやうめんの縁えんについた、縦たてに細ほそい一坪ひとつぼばかりの背戸せとに、植木棚うゑきたなを拵こしらへて、上に据すゑた箱庭はこにはである。

此の邊へんは、土つちを一寸穿ちよつとほると、もう石瓦いしがはらで、烈はげしいのは、折釘せりくぎ、鐵葉てつえきが霜柱しもはしらを立てるのだから、草も樹も、植うゑては一堪ひとたまりもありはせぬ。

―― 活いけるかはりに、百ゆり合り、桔梗ききやう。その時々ときどきの

縁日ものを取かへる、もの足りなさに――息子が手傳つて、三人で丹精した。

小さな鳥居が一つ。こんもりと深く凄く、しかしお李枝の掌で伏さりさうな森の、杉なりに茂つた中に、賽ほどの大きさで一の目の石の手水鉢、奥へ石燈籠を立てて、尚は深い處に、草葺の祠を据ゑた。まはりは一面の水苔に、針齒朶、芥子藻をあしらつたのは、箱庭氏得意の壇場で、びつしより沼のやうに濡て居る。暗い森に、晝の螢を見る如く、ぼつりと一點の燈明は、お李枝の工夫で、紅い眞綿を河蟬の胸毛のやうに、ちらりと燈籠に掛けたのである。が、出戻つた筆笥の底に忘れた結納のなごりでなければ可い。あゝ、これを手まさぐる時、森の雫が雨と降つて、其の爪紅を染めたらう。

初夏の晝も小雨に濕る。

これなん、武藏野のむかし、隅田川の渡頭に近き、浅茅ヶ原の原中に、跡をとゞめた姥ヶ池の、下つて、吉原土手下の森の一つ家を、京町二丁目あたりの

二階から見た模景なのださうである。

近頃、其の箱庭の一つ家に、毛筋ほどの細い篠が立った。ラチオかと思へば飛んでもないこと、森の上には雁が一羽。義宗の卿の、足利を追つて、寄せたまひし、白濱の渡、その、橋場の空あたり、孤影寥々として、月明かに愁思を點じ、瀬戸の翼を翫す、これもお李枝の意匠である。

また、擬へた吉原土手に添つて、二ツ三ツ茅ぶきの屋根が殖えた。それ／＼大籬の寮の趣きださうであるが、柴垣、片折戸が軒よりも高いのは可訝しい。それに土手下を繞つて、小砂利で、姥ヶ池のなごりの小流の趣きを見せたところ、何うも川とは思はれない。のみならず、其の邊の水には標示すべき稱がないのだから、一層の事、會社の勤の弟が、標柱を刻んで、細字で、「隅田川」と題して立てた。

「何うだい、此なら誰が見ても大川だ。」

「―― 餘りだね。」

お母さんが納まらない。地震當時ではあるまいし、土手から橋場が見通せるものか、それに勝手が逆だよ、と極められて、奮然として、今度は、「大井川」 と杭を打つて、次手に蛇籠を奢つた。

「―― 可厭だわ、兄ちゃん。」

弟だけれども、男は惣領だし、出戻りのひげ目の兄ちゃんである。

「―― 可やね、その方が、一層やけで

水が満々として居さうで、――

やけで水、もをかしいけれど

「―― お富士さんも見えさうで涼しくつて好

い。――

と師匠は小節に拘はらない。

兄ちゃんが圖に乗つて、裸體の雲助を三個、大井川の眞中へ押立てた。

「―― 馬鹿にして居る。」

これにはお李枝が嬌瞋を發した。

「灸をすゑて行くから可い。」

「晩飯にならうとする時だつた。お佛壇の線香を、

眞個に長火鉢にくべたから、兄ちゃんの弟は、小人

島の孤兒の赤禪したのを三個、大井川から抓んで、

攫つて二階へ飛んだ、小天狗の捷術で。

「―― 雑と恚うした不斷のくらしで 苦

勞があらうに呑氣らしい。」

一體、震災の焼出されで、またがらんとして居る。

六疊、四疊半、二間の二階に、目立つものは新しい

二枚折の屏風ばかり。兩方へ一枚づつ、菊五郎

(註、五代目) の一つ家の姥の、出刃を逆手に、

うつくしい稚の頤にむずと皺手を掛けたのと、戻橋

の扇折の被衣を捌いて、屹と成つたのが貼り交ぜに

なつて、けば／＼しいばかりである。

はじめは、其の時々、に刷出す、菊五郎の肖顔の繪

草紙の、店に顯はれる初刷を狙つて、百枚ためるの

を一生の心願にした、三十六七八枚の頃、――
二十三で、いまの子どもたちの父親の、情人が出来
て、眞夜中の浅草田畝を、しぐれ空に跣足で遁げ、
追手と思ふ燐火の可恐いのが、三巴に狂ふ提灯を、
一つ家の森にかくれて遣過ごした時も、其の繪姿の
折本は袖で抱いて離さなかつた。

此の師匠は、引手茶屋、住吉とかの娘分で、仲
町の名妓だつたさうである。

―― 父親は顔が肖て居たらう。

烏森で、それが菊五郎の繪とともに、震災でなく
なつた。

芳年、周延の何度目かの復刻でもある事か。屏
風の繪は、安附録か、おツつけ口繪の石版である。

男弟子の、殆どない事は―― つもつても知れ
よう。石の枕だの、戻橋の鬼女だのは、経師屋連を
引くためには、怪我にも家の内に置くまじき、法度

の偶像でなければならぬ。

縁起を祝つて、搔込むのが、主義なれば、つい近間に西の市の神社がある。しかし、それが箱庭に合ふか何うかは未だ考へざる處とする。また凄愴の氣の迫る一つ家のみが、敢て、學家の趣味でない事は――はじめは、太郎稻荷、玉姫稻荷を摸造し、敷設する、家族三人合同の議があつた。が、野良猫が、づしん、がら／＼と裏通りの二階から、此方の庇、境の板塀をかけて驅廻る。胴が伸びて、手と足を突張つて、空を飛ぶと、大なる怪物が夕立雲に乗つた形に見えて、先づ材料を据ゑる位置に極めた植木の棚を蹴轉がし、どしんと遁げたのが、母子が縁側で額を集めた時だつたから。――此の様子では、稻荷さまが、お嫌だらう――との事だつたさうである。

其處で、お李枝が、自分でも其の氣だし、母さんも口を添へて白粉の濃くないのは、一つ家を飾つて娘ををとりにする譯はない、とおなじやうな説明にならうと思ふ。

却つて説く

此の花柳の舞臺では、十一

二のお弟子が一本、お師匠さんが一本、――素
人目には孫悟空の如意棒に似て、六般以上の變化を
する、權、傘、花、三味線、大刀、小劍、猿廻しの
鞭に自在にかはる。――その棒を、今や、鎗につ
かつて、引ぬきの奴で、りう／＼りう、ついて、廻
つて、一つ引いて、稽古の最中。

（待て、新道の、辻の姿 歌舞伎、紙芝居に集
つた、町内連の片傍に、人いきれに惱ませて、お李
枝を其處に立たせてある。）

これよりさき。――實は此の日は、淺草の觀世
音のお茶湯日であつた。心願がある、と言つて、こゝ
三年ばかり、參詣を缺かしはせぬ。

お李枝は、正午過ぎに出て、割に早く、三時半頃
――電車は込むし、此の陽氣だから、少し上氣
をして大門でおりて、やがて花柳の大門を僭つた。

いれちがひに弟子が一人歸つたのである。

「唯今。」

「あゝ、お歸り。」

「込んでたかい。」

「一ぱいよ。」

と、風呂敷包をトンと置いて、息ぜはしい。

「まあ、お休みな。せい／＼言つてさ。此の娘

は。

「お母さん。」

と様子ありげに、

「をぢさんたちは——和倉へ行つたのよ。」

「をぢさんだえ。」

「小石川のさ。」

「あゝ澄ちゃん許の先生かい。」

と、すまして、のみ掛けを一服した。

其の平氣なのを、口惜いと言ふ目で見て、

「先生かいぢやないことよ。」

其處へ、友染の袖が、ひら／＼を超越して、ばら

／＼と木戸口へ。　　「　　」で、
　　榎も障子

も、レエスばかりで開けてあるのに、故と留まつて、
一寸招いて、

「ワーゐ。」

源太を驅抜けたに相違ない。お勿嬢の佐々木ツペ
いが、それでも肩で嬌態をして袖をしなやかに
おじぎが濟むと、氣が早いから、舞臺へ飛上つて、壁掛
を、一寸、一寸、一寸、一寸。いけぞんざいだから、すぐ
には分らない。自分の扇をぬき出して、目をくるツ
として、ちんと正面へ直る處へ、いきを切つて源太
景季。のれんの川波をさらりと捌いて

「こいつめ。」

こちよ／＼こちよ。

「あゝ、ごめんなさい。」

と、一つ家の縁へ遁下りるのを、だしぬかれた源
太嬢が、一つ撥つたあとを追つて駆け上る。

師匠が、舞臺の左の壁に三挺かゝつた、眞中の三
味線を取つて、一つ扱いたのが、リーンと響く。こ

れが合圖のやうになつて、一人が目をばちくりして、
瞳を据て畏まると、一稽古待つ後番が、それでも殊
勝な事には、菊五郎格子の座蒲團を心得て、襖際へ
直すのに目で會釋して、數枝が其處へ。
扇を膝に引つけて

お李枝は、そのうち、抱茗荷の紋のついた、お母
さんの湯呑　ー　兼帯らしい　ー　冷して置い
た、煎茶を軽く飲んで、盆に伏せると、外出から持
つて歸つた風呂敷包を解いたのが、がさ／＼と音が
する。　ー　新聞が五六枚。が、一部づゝ揃つて
居て、大分嵩張る　其の中から、土産の袋
は、紅梅焼か、名所焼か、然らずして、はじけ豆を
覗くのに、すつと眈を切長く二日月に伏せると齊し
く睫が霞むで、下瞼がもの柔かにふつくりする。

其まゝ白い夕顔に威つて咲きさうな、これ
が取つて二十六七にして、まだ娘のまゝの身上であ
る。仔細ありさうな豆を覗いて、何だ、一寸お撮を
すると一所に辻占の擲んで出たのを、開かずに袋へ
戻して、其れごと茶棚へ置いたと思へば、忘れたや
うに指が反つて、豆がぱちりと白齒ではじける。

ツトツーンツ、トツ、テレトン、憎い鳶づら油
揚さらうた、泣くな、よい子ぢや、こんなものやる
か、チリチン、ア、チリトチチン、チン、チン、お
月様いくつ、十三七つ！

「背中の子に見せるんだよ、十三七つ。」

お李枝は、うつかりと七つをかぞへながら、新聞
を一束に引取つて、階子段を、襦をしと／＼と上つ
たが。軽い疲れが出たらしく、件の二枚
折を楯に、諸膝でトンと坐つて、吻と息を吐くと、
坐つたまゝ帯をくる／＼と解いて、麻の葉絞の扱帯
をたぐつて、細く露けたと思ふ胸が、雪白の乳を二
つに捌いて、引結へた水紅色縮緬をしつとりと踏み
くゞみ、襦を曳いて立つたのが、張交の鬼女の被衣
の上へ三尺ばかりすらりとなつた。解きかなくつた
帯紐を、すら／＼と屏風に掛けつつ、心急く状して、
又坐つて、今度は蹴出しのまゝ片膝立。――着
瘦の性が、思ひのほかかふつくりとした、露呈な胸を
庇ひなりに、横坐りになつて、新聞を又取上げた。
が、二間見通しの上、三方の障子に嵌込の硝子を透

いて、犇と、裏、横、隣の二階家が迫つて、何處の
も、窓、障子が開けてある。――氣はつけたが、
もう一度、流眇にづつと見まはす。

この姿は、垣を越えて梅が薫らう。尤も、嗅ぐ鼻
も、睨む額も、覗く目もなかつたが、念のため、袂
に心得た、絹麻の半巾の薄い水色なのを唇に啣へて、
はらりと振つて乳を隠すと、汗ばんで居たのを吸取
つて、眞白な鵠の翼に、波が霞んだ風情がある。

透洩る風が、そよ／＼と、おくれ毛に通ふとも
に、ひきしめた片白脛の縮緬のしぼが、ふくらむば
かり、幽に揺れた。

膝がしらをすりむいた、ツト、ツーンツ、トツ、
テレトン、憎い鳶づら。新聞を取つて、あ
つちこち、あつちこち、急いで、ものを捜すやうだ
つけ。

あつちこち、あつちこち。

頁を――頁を――

「あつたわ！」

と、思はず言ふと、口許をこつて、半巾が、鳩尾を下へ、軽くこつた。

色を染めて、擦つたさうに脇をすぼめたので、横に翻る新聞を膝で極める、と乳はかくれた。

「ー ー 其の段に、五行ばかり。矢野誓 ー 夫

熟と視ながら、落着いて開いた女扇は、濃い紫に、
銀泥の藤。

山歸り
やまかへ

「チャ、チャ、チャ、チャ、チャ、チャン、ヤ、チャ、
チャ、チャ、チャ、チャ、チャン、なんの、男は裸、百貫
の、チャ、チャ、チャ、チャ、チャン、」

お師匠さんの聲がする

お弟子が、次の

番に交つたのである。

「 かけ念佛も向う見ず、夜山で盆をす

つぱりと、切りはらつたる、納太刀、しよぐわん定

宿

「

「しよぐわん定

」

と、下の唄を口含みに、お李枝は、うなづくやう
に扇を疊むと、紫が膚に映つて、襟の影のさすばか
り、乳を掠めて、一小間づゝ細くなる。新聞のおさ
へに置いて、薄い衣紋を引合はせた。

師匠の聲が、

「しよぐわん定宿

——

今つきやしたぜ、其處

で言ふんだよ。さあ、しよぐわん定宿。」

かはい、聲が、

「今つきやしたぜ。」

引取つて、

「子安まで、おりて五六の蚊屋の内。」

丁ど、此の稽古のくぎりの附いた處へ、下町づくりの上品なお媪さんに手を曳かれて、駒下駄を鳴らして来たのが、こゝに紙芝居、姿歌舞伎の辻に、お季枝に手を曳かれて居る稚い子で。――

まつたく五歳である。――お媪さんは、露月町邊の老舗の砂糖問屋の隠居で、これが一粒だねの可愛い孫で。後生願より、息子夫婦の

孝行より、孫に踊を教へるのが、樂みよりは、一大事だ、と言ふ凝り性。姉娘が、もう一人あつて、見事に仕込んで、神明様の祭には屋臺で、踊つて、「ちぎの箱入！」と譽められたのを、去年の風邪

に、九歳で梅は散つた、と言ふたびに隠居は鼻聲になる。

早く桃の枝を繼がうと思ふのに、去年は此の子がまだ四歳。ご勘當を被りましても母者人。――是非とおつしやればお母様、私が膚おんぶで踊れます、と嫁も目の色を變へるので、辛抱して、此の花の時分から漸とおゆるしが出たについては、「師匠さんもありますが、方角が、あなた此方様が、――とかけかまひのない挨拶で。立派な膝つきを濟ましたお弟子だが――年が年で無理もない、大はにかみやさんの、おつとりもの、舞臺へは乗るけれども、ほかに人が見て居ると、トチトチトチどころでない、よち／＼とも動きはしない。お弟子が打つかる時は、間の襖を、暑くてもぴつたりと閉る始末。

宵や待が、漸と形がついた處で、お稽古が、いまや「忍ぶ戀路。――師匠も、導く方角に困つたらう。「さてはかなさよ、」と手拭で、顔も、袖も、裓まで、舞臺からかくれる

のを、御隠居は命がけ、嬉し涙で見てください。

内證で呼ぶ名があつて、おもしろい。

忍ぶ戀路のお咲ちゃん。

かへりの迎へは、子守でも女中でも、使で濟むが、連れて出るのはお媪さんでないと納まらない。御褒美の約束をするのである。

「でも、ものになりますでんせうか、お

師匠さん」

其の癖、お師匠さんの返事より先に、隠居の方が肯定して居る。

「でんすが、あなたに、お預け申すやうにと申聞けましてね、扇とお揃を離しません處がね、頼もしうぎぜんして」

「さあ、はじめませう。」

師匠が、

「今日のお約束は、御褒美はチョコレエト？」

一寸顔を横にして、笑つたばかり。忍ぶ戀路のお
咲ちゃん。

「えゝ、えゝ、こんな引こみ新姐でも、其の方は
かりは、約束堅き、でござんすよ。」

「今日は、それでは蜜豆、お咲ちゃん。」
と師匠が云ふと、お咲ちゃんは、扇の包みで顔を
かくして、おかつぱの頭を掉る。

「昨日が蜜豆でんしたから、今日は、アイ
スクリームと言ふ注文が出ましてね。」

「おや、ご馳走様—— さあ、はじめませう
ね。」

其處へ、飴屋芝居の、幕あきを告條の拍子木が、
辻の方から、カチカチ、カイーと響いて来た。——
時によると、一旦、場所を撰んで荷を置いて、其
の荷をおろした自轉車に、飴屋がひらりと跨り、二
三町 周圍カチカチと打つて廻つて、子供たちに、

しやぎりを聞かせ、すぐ其の自轉車へ、こけらもどきに棟を揚げて、舞臺を開く。――片輪車にあらずして、ぐる／＼まはりの輪二つが、お手輕に化けると言ふ。が、此の時ののは、居場所からであつたらしい、拍子木はやや遠かつた。

「今日は、お芝居よ。」

「おや、芝居、それはお易いご用。」

と隠居は頷いて微笑んだ。

「お媪さんとぢや、いや。」

「おや、此の子は、おや、おや。」

「お李枝ちゃんとでなくツちやあ、」

女中でなし、もりでなし

「お李枝ちゃん。」

「内の娘なんですよ。」

「まあ、お姉ちゃんを、おともだち見たやうに。」

「結構でございますわ、咲ちゃんとお友だちなら、」

二十ばかり若くなるんですもの、ほ／＼、――丁

どお茶湯日で。」

「ほんに、今日は浅草のお茶湯日。」

「観音様から歸つて來ましたから
お稽

古のあとで、すぐ、ご一所に行かせませうね。」

「何とどうも勝手次第な、でも、言ひ出したがさい
いご肯くことではございませんから、ご迷惑を願ひ
まして、――咲ちゃんや、お媪さんは返ります
よ。」

「えゝ、いゝの、初やをよこしてよ。」

「はい、はい、では、お師匠さん、初やを迎に寄
越しますから。」

「その時、あの アイスクリームね。」

「おや、おや、おやまあ呆れもしない。」

と言ふ下から、ほた／＼と成つて、おかつぱを、
するりと撫でる。

お稽古が済むと、

「李枝ちゃん、李枝ちゃん。」

「はい、唯今。」

少時して、不斷着の久留米になつて、パチンもまだめず、白い爪さき下りに、すた／＼と二階を下りた。お李枝に、孫を抱くやうに引つけて、隠居があらためて會釋の處へ。

トツチンチンチン、トチチリチンチン、と口三味線で、ばた／＼と露地に草履の音。一嵩張つた風呂敷づつみを、小取廻しに、十二三のおさげの令嬢。運動やけがして色は浅黒いが、目鼻立のきり／＼、としたのが、其處へお辭儀をして舞臺際へひらりと通ると、手ばしツこく解いた包の中は、舞太鼓に撥に、友染の襷、結紐。二反のさらし、月さらひの出しものに、越後獅子を踊る下稽古の、其の持道具のあつかひぶり、きび／＼とした仕こなしを、藝妓家の娘分でもあるかと思ふと、違ふ。三縁山の緑深く居を構へた、文學博士なにがし氏の令嬢で、小道具の太鼓なぞも、母夫人の手細工といふ氣の入れ方。此の數枝の秘藏弟子。早く、師匠が氣構へて、形をしまった、ゆかたの上の服紗帯も、黒縹子で、しやんとする。

「ま、眞まことに。――ま、眞まことに。」

砂糖屋さとうやの隠居いんきょは、令嬢れいぢやうの風呂敷ふろしきの、ばらりと解とけた踊道具をどりだうぐの花はなやかなのを見みると、もう鼻聲はなごゑになつたのは、「ちぎの箱入はこいり」と言いはれた姉孫あねまこを、惻然そくぜんとして思出おもひだしたに相違さうみない。涙なみだの出でさうな顔かほをしかめて、我わがまゝを言いふんぢやないよ、と些ちと急いそぎ足あしに歸かへつて行ゆく。

「李枝りいちゃん、お湯ぶう」

「あい。」

ひたと差向さしむかひに小ちひさな膝ひざを、膝ひざに突合つきあはせた、忍しのぶ戀路こひぢに、客茶碗きやくちやわんを、唯と、白しろい手てが掛かると、頭つむりを掉ふつて、

「李枝りいちゃんの、お湯ゆのみ吞みでよ。」

「あら、然さう。」

と、一寸ちよいと頬ほを寄よせさうにして、莞爾にっこりしながら、さつきのはじけ豆まめを紙かみに捻ひねつて、膝ひざの上うへへ。自分じぶんでも一口ひとくちつまみながら、御意ごいのまゝ、湯吞ゆのみについて渡わたさうとすると、豌豆えんどうには構かまはず、又頭またかぶりを掉ふつて、

「李枝やん、少し飲んでよ。」

「まあ。」

と優しく睨むまねして、目を伏せた、其の新月の
眦よ。

「私に岡惚れしてゐるわね。」

「何を言つてるのさ。」

と、お母さんが、構へた轉軫越に振り返る。

「ひどいわ、をぢさんたちは。」

ふ、ふ、と優しく湯氣を、さまし、さまし、

黙つて湯治に行くんだもの。」

「いつさ。」

「行きたてなの、昨日ツ。」

と句切を強く、口惜しさうである。

「今日、小石川へ寄りはしまい。」

「當前よ、こんな時間で」

「何うして分つたのさ。」

「それがね、お母さん。」

「あゝ、勸音様のおみくじかい。」と

まではまだ可かつたが、

「何を言つてるのさ。」

「あゝ、辻うらかい。」

こゝに及んでは、博士令嬢の、あれ、これ、それ、と捷業で、身拵へするのを、見まもつて、うつかりしたばかりではないらしい。

「頭腦が悪いわ。」

と呟いた處は、どうやら、わるく小父さんとか云ふものに、小説家を持つた、踊の師匠の娘らしい。

「いやね、お母さん、電車の中で、立派な方がお二人づねなのよ。――あの、何かの折に、よく新聞だの、雑誌なんかに寫眞が出て居るわ。（矢野は和倉へ出掛けたね。）（いつ

（昨日らしい、今日の新聞に出て居た。）然うおつしやるのを聞いたのよ。内で取つてる

のにはなかつたでせう。銀座の角で、一寸下りたけれど、何新聞といふんぢやあ極りが悪かつたから、

黙だまつて小ちひさな銀貨ぎんくわ一つ出だしたら、澤山たくさんよこしたのよ。

「あつたわ、ちやんと、出でて居ゐたわ——

。惜くやしいわ、私わたし」

お母つがさんの輕かるく頷うなづくのが、何どうも娘むすめの方はうへではな
いらしい、其その證しようこ據こには、

「少すこし上うへへ。」

舞まひと太鼓たいこを注ちうい意いした。

「—— 打うつや太鼓たいこで、鳴なるは拍子木ひやうしぎ。」

「お李り枝いちやん。」

「さあ、行いきませう。」

紙かみづつみは、其その子この袂たもとへ、一ひと粒つぶ豌豆えんどう、實じつは、三みつ
つばかり、口くちへ入いれて、澄すまして、木戸きどを新道しんみちへ。

「そりやこそな。」

「お出でました。」

待まつたなしに、看板かんばんぐらみに飛上とびあつたのは足袋屋たびや
だが、早はやいのは洋服屋やうふくやで、殿しんがりは共同きようどう軒けん。不ふ斷だん屈こつむ

から、恸^かう云^いふ時^{とき}と、肩^{かた}で反^そつて、
と急^{いそ}がないで、ついで行^ゆく。悠^い然^{うぜん}として、
故^{わざ}

井^い戸^ど覗^{のぞ}き

「これは、ご新造さん　　ー　入らつしやい。」
咲ちゃんの手を曳いた、お李枝の姿を、屋臺前に
見た時、黒頭巾は圓い頬邊から、ほつかりとした聲
を出したが、

「え、若奥様　　ちやうどお宜い處で。」
ー　と、繕つた。

顔色を見て、言直したほどだから、さみしさうな
か、澄ましたか、お李枝に、何となく、愛想がなか
つたに違ひない。

「この子、よその子よ　　どつちだつて構
はないけれどもさ。」

「え、飛んでもない。それはどうも、成程

お嬢様、お姉様。」

「よくつてよ。現金ね。」

「細い商賣、へい、現金に限ります。　　ー
成程、この間中、親仁が四五日、この周圍へご無沙
汰をいたしまして、しばらくめに舞臺を開けました

折をりに、貴女あなたが一寸ちよつとお覗のぞきで、今度こんどは何時いつ来る、毎日まいにちかい、親類しんるゐの子供こどもがお前まへさんの芝居しばゐを見たみがつてるから、とおつしやいましたな。」

「えゝ、さう。」

「お名なざしの難ありがた有たさに、兩三日りやうさんにち、こゝの處ところ、心待こころまちにお待まち申まをして居をりましたが、はあ、其そのお可か愛はいらしいお嬢じやうちゃんが、其そのお方かたで。」

「いゝえ、こんな可か愛はいいのぢやありません。」

と、づつきり云いつた。が、それでも含ふくみわらひに、片類かたほ優やさしく、

「小石川こいしかはの方ほうの親類しんるゐの子こだと言いつた、其その事ことでせう。」

「御遠方ごゑんぱうゆゑにな、貴女あなた、尚なほお待まち申まをして、實じつ

は
「遠過とほすぎるわよ、小父おぢさん
和倉わくらへ行いつ
てしまつたんですもの。」

「和倉わくら？」

「能登よ、小父さんも能登ですつてね。」

「されば、へい、能州 能登の和倉へ

「小兒衆がござつた、と言ふと宙を飛んだやうに聞こえますな。尤も親御、ご兄弟、ご一所ではございませうが、は、は、は。」

と錆びた聲で笑つた。

「何うとも勝手にするがいゝわ。飛べるもんですか。がたくり、がたくり、汽車で揉みくちやにされたでせう。大供も甲羅のはえた大供同士なんだもの

「ねえ、咲ちやん。」

と、曲つたやうに肩を落して、群つた子供の中に、一番低い、其のおかつぱを撫でる様子を、匆ねた眉の太い下から、目をぱちくりと、伺ひ、伺ひ、

「お嬢様もおいでなさるがようございますよ。」

「遠いでせう。」

「何の、貴女、遠いたつて、唯今から ー いえもし、それが今晚にも、汽車にさへお乗りなされば、宙を飛ぶ雲よりも、樂な、柔かい寢床の上で、すつと一のり、夢を見る間もないくらゐで。また能

州と申す處が、國自慢ではございませんけれどもな、土地のいゝこと、景色のいゝこと、浮世ばなれのした事は

諸州全土とは申しますまい。

が、北國では龍宮と、人が言ひますほどでございまして。」

と頷を、兩腕を組んだ上へ、ぴたりとのせて、透し覗きに、調子を沈めた。

「また、それに近頃は、一寸先づ其の龍宮の乙姫様の親類ぐらゐな女性の方がな、あの邊へお出ましになつて居りますのでな、和倉あたりは幻の喜見城に、珊瑚の根が生えた景色でございます。手前なぞは恚ういふうちにも、ふいと雲にのりますやうに、能州へ行つたり、來たりと申すのが、此の芝居の、種仕掛が、外題によりますと、その龍宮の親類あひから出ますのでな。」

(丁ど此處へ、町内が

足袋屋がさきへ、

どや／＼と來て集まつた。それは、これだけ間があ

つた。距離きよりが遠いとほのではない、遠慮えんりよをしたのである。）

「まつたく、其その未曾有みそうでありましてな。」
黒頭巾くろづきんを正面しやうめんに、飴屋あめやは腰こしを据すゑて更あらためて言いつた。

「かくまで、御大人方ごたいじんがたの御見物ごけんぶつを忝かたじけななうしましたのはな。就つきましては、岩見重太郎いはみぢうたらう、新派しんぱ、退治たいぢ、巖流島二刀響がんりうじまにたうのほまれ、支那しなでは、悟空西遊記ごくうさいいうき。新派しんぱ、新々派しん／＼ぱ、大衆劇たいしうげきは、また大衆劇たいしうげきと、みなそれぞれ、當座一流たうざいちりう、科學應用くわがくおうようを以もつて、お子供衆こどもしうの御機嫌ごきげんを取とり結び居むすりますなれども、決けつして其それが當座たうざの趣意しゆいではござりませぬ。」

實際じつさいの處ところは、御大人方ごたいじんがたの御評判ごひやうばんを頂いたきたい――と申まをす儀ぎは、唯今たゞいまも一寸ちよつと、然さる其その、おうつくしのお娘むすめごに、お話しはなしいたした事ことでござりますが。」

お李枝りえの横顔よこがほの、柳やなぎの細ほそい葉はがくれになつた事ことは言いふまでもない。

「能登は、北國の龍宮、中にも鳳至と申すは、文字の義に於て、おほとり至るでございます。」

自慢高慢にわたつて、他所、他國とは申しませぬ。唯一國だけに、其の名鳥、靈禽に齊しき、御婦人がお一人、天空を飛び舞ふが如く、今の頃は能登の地にござられます。

これが即ち一座と申すか、やつがれ。」

口上の、私も、やつがれと更り、

「一同の神、あが佛とも崇め申す、早く申せばお頭で。諸事萬端。――子供衆對手の、端ものは別と仕り、主意と仕る。主なるものの、くりぬき繪の立役、立女形をはじめ、背景におきましては、山川草木、巖組、家造。皆、其の雲にかくれ、霞に顯はれ、月に影さす御婦人の手づからに、なさるゝ處、――授かりますやつがれどもに取りましては、靈場、名山の御符、御札も同様の儀にござりまして、名劇、秘曲も少からずございます。其の序の曲を一齣、こゝに御高覽に備へますが、

カイと、一音の柝が入ると、舞臺が眞黒に成つた。一面、黒天鵝絨を張詰めたやうである。同時に、お李枝の白い頸が、女の子に曳かれて寄つた。

爾時、黒頭巾は行衣の懷中を深く、一聯いらたかの珠數の、輪にして三尺ばかりなるを取つて、押戴いて、頸に掛けた。

「はゝあ、宗門のひろめだ。」

「辻比羅だな。」

「能登は石川縣、――とすると、門徒眞宗の街頭進出だらう。が、大きな珠數だ。」

口々に言ふのに對して、黒頭巾は掌を額に加へ、わが珠數を拝するが如くにして咳いた。

「およそ珠數の用材と申すは、先づ菩提樹、多羅珠、また木ニ子にいたして、天台は數、百八珠、おなじく百八珠の兩端に、總のあるのが、眞言宗であります。淨土宗は百萬遍をくります都合上、いろ／＼念珠を用ゐますわ。眞宗は金欄の本装束に於て、

ひやくはつしゆ 百八珠、略には五十四顆。信徒の持ちますのは又其
の略の一輪念珠であります。いや、宗派それ／＼
の佛教、また、山伏、修験道。道によるのであり
まして。やつがれの、
と又式した。

「頂きましたるは、深き秘密がござります。質に
於ても、數に於ても、別段の旨がござつて、なか／
＼、恚やうな場所にて疎に申すべきではありませぬ
が、ちらり唯珠一粒の光を申せば、靈威三山のおん
うち、白山の神、姫神様を、高く、蒼穹に頂きます
る一門徒で。教をひろめるではありませぬ、不説説、
不聞聞、たゞ大道飴屋の演技、ごらんの中に、おの
づから御會得が参りませうか、と存じますので。え
い。」

黒頭巾は、また一つ咳いた。

「え、これを御縁に、ゆく／＼御鼻眞、また口
廣うはござりませうかなれども、御信仰を下されま
する段になりますれば、鳳至る
で鳳至座

も如何なもの、
看板も擧げます存念。

よつて鳳來座とも申す庵

やつがれ、姓名の儀は安場嘉傳次　――　住居は
千年の古狸　（長太居るか）　を、自然ご
存じの事ゆゑ、場所がらと申し、麻布貉穴が似つか
はしう　しかし、演劇さま／＼の材料仕
入れは、唯今も申します通り、いざとあれば、此の
自轉車で汽車ぐるみ、すら／＼とゆきかへり。　「
と、言につれ、目で搜して、お李枝を覗いた。」

「　すぐにも、飛んで、姫神同然に存じ居ります、
やつがれどもお頭のもとに參つて授かります事ゆゑ、
何と、雲に乗つてゆきゝも同様。千様萬態、芝居の
變化は極りない。　さあ、いまご機嫌を伺
ひまするは、寶藏のほんの鍵ばかりと、ご覽のほど
を　」

カイ！　と拍子木また一番。

晃然として、其の一面墨の如き舞臺一方の空へ、

北斗七星が顯はれた。これは二錢の景物ではないらしい。本銀の箔を、光に使つて、輝かしたものであるから。

「彼處へ、白山が映るんだらう、背景ですな。」

と京染の若旦那が言ふと、共同軒が覗き込んで、

「繪の出来は。」

「まだ星ばかりさ。」

が、子供たちは皆空を仰いだ。チチツ、チチツ、チイ、チヨン、チイ、チヨンと雀が鳴いた。さながら、其の燕と戯れ、鳩に親むやうに、チチツ、チヨン、チチツ、チヨンに、子供たちは、どよみを造つて、辻の柳に目を攫はれたやうである。

黒頭巾、嘉傳次が、巧に口で眞似たか、鳥笛を含んだかは、確でない。此の聲に誘はれたやうに、常盤津の格子が開いて、一人意氣づくりの圓鬘が路地へ出た。出ると向うの出窓で會釋して笑つた。が、其處にも、浴衣がけの上品なのが仄見えてゐんだ。

此連れが出来て、お李枝は手を曳いた肩も緩んで居よげに見える。

星の光が、白くかはつて、フツと消え、雀の鳴き聲が止むと、井げたの圓い、板の側の處々に裂け目朽ちの見える古井戸が、井戸流しに小草少しばかり、青苔を薄くあしらつたのが、舞臺のしも手寄りに出たのを見たまへ。

正面から一人、かみ手から一人、其の、しも手から又一人。ーはじめのは、くづれかゝつた島田鬚で、次のは銀杏返。あのは緋手柄の大圓鬚。尤も、いづれもくりぬき繪で、其の瘦せたのも、肥つたのも、何故か、みな面竄れがして、フランネルに藍小紋の羽織を着たのと、ゆかたの上へ、色のあせた縞の羽織を着たのと、濯じまの袷らしいのに、浴衣をかさねて、うす汚れた達手巻ばかり、帯をしめないのと、肩が寒さうに、揃つて兩袖を胸へ合せて、お腹をかくすやうにして、悄乎と三つの黒髪を井戸に寄せた。

が、服装を一婦一婦について、こゝに説明をする
餘裕はない。紙か、姿か、繪の此の芝居は、少から
ず人を驚かした。

井戸を深く、無言で首垂れて覗き込む、三人の婦
の繪が、くるりと變ると、忽ち、襟も袖も、緋も、
青も、博多も、縮綿も、濡れつつ流るゝ如く落ちた。
水垢離を取らうとするのか、知らず、むつちりと乳
房を装った腹と腹と、其の白さ滑らかさ、軟かさ、
又其の、濃き薄き腰の紅の

「や。」

「うむ。」

町内 連は聲をのんだ。

帯に縋つて攀上りさうにする、咲ちゃんを、ぐい
と抱上げた、扇包が、片頬を蔽うた。お李枝は柳に
鬢を背ける。

パツと又繪が翻ると、三人の婦の顔は一個づゝ、
雉子 ー ー 山鳥 ー ー 牝鶏の白い首、青い首、

赤^{あか}い首^{くび}に變^{かは}つたのである。

一^{ひと}銚^{てうし}子

「おや、一つ家様へ燈明がついたね。」
「何よ、お母さん、まあ。」

水入らずで、母娘が晩飯の餉臺から、背戸を透かして、お李枝が、

「縁に線香を立てたんぢやありませんか、彼方から微細い蟲が来るんだもの。」

「雨氣があるんだね、些と蒸すよ。」

師匠は、かけかまむなく、ふつくりした白い胸を、片手で搔上げるやうに、軽く衣紋を頸へひいて、

「うまい見當へ持つて」行つたぢやないか。こゝから見ると、まるで森の中へぼつりと灯が點れたやうに見えるよ。あのお姥さんが佛になつたと同様に、矢張り觀音様の御利益だよ。――怪談の時には丁度可い。」

猪口を取つて一つ注いだ、晩飯の一銚子が樂みなのである。息子は當夜は夜勤らしい。

「何が怪談なのよ。」

と、自分の方は、さきへ最うご飯が濟んで、お茶碗へ茶を注いだ處。おつもりが延さうだ

から、一度おろした、はうれん草の小鍋を掛ける。

玉子が一つ鹽梅してある。お李枝の、これは好みで。

お母さんは、ひたしが可い。が、蓋を輕

く取つて、——いま時は風邪藥の稱にしても了

解が悪いかも知れない、振出しの銀の箸を使つて、

玉子のかゝつた、はうれん草の行儀を直した處は、

これをこそ驚菜とも稱へつべしで、嘴の如く銀のす

れ合ふ音も床しい。

お師匠さんは、もう微酔で

「だつて、お前、臺所がごしや／＼して居て、つ

い其のまゝに成つたつけ。今思ひ出した

んだがね。忍ぶ戀路さんを連れてつて見て來たとお

言ひだつた、紙芝居はお前、星が何うとかして

星なんぞ餘計なもんだね。」

と、（この子）とか云ふ、砂糖屋の隠居から

到來らしいのを、前齒でポリと行きながら、

「舞臺が眞黒な處へ――井戸が出た
化けるんだから、とお待ちよ。」

「まだある、なか／＼ある。銚子を中ぐらゐに斜めに傾けた。」

「顯はれたと言はうかね、井戸が顯はれば、焼酎火が燃えるだらう。」

「可厭ね、お母さん。」
と茶碗を取つて、

「あつい、まだ――
「そらお見な。ほんとうの幽霊火ならあつくはな
いんだけれど、焼酎火だから、へたをすると火傷を
するんだよ。」

「何の話よ、お母さん。」
「皿屋敷の怪談だらう、井戸が出れば。」
「呆れるわ。」

「お前さんぢやああるまいし、ほゝほゝ。」

ます／＼佳い色で、

「音羽屋がなくなつてからは、義理か、然もなけりや、家業で、新ものの振事の出る時でもなけりや、芝居の方は御無沙汰がちだけれど
皿屋敷の眞似なぞ
屋も素人ぢやないか。
は子兒のする事だよ。尤も子兒に見せるんだがね。
然うすると子兒がすきなのか知ら。一番わけがないからね、お化蠟燭のやうに厚紙をくり抜いて、捌髪を墨でなどつて、京町裏の學校で使つたものだよ。
お席の板の節穴を、少しづゝ大きく内證で丹念にゑぐつた井戸から、肩をぶか／＼とゆすぶつて、ひよろ／＼と出してさ、うらめしや鐵山どの」

「まあ、お母さん、先生の許のお澄をばさんぢやなくつて、
そんな悪戯は。いつか私に話したやうよ。」

「あゝ、やつたとも負けないで
それだつてお澄ちゃんのものなぞは人形の皿屋敷さ。此方はお前、音羽屋で凄いんだよ。第一お席が違ひます。お澄ちゃんも級が下だから下座敷さ、私なんか、お二

階いの姉ねえさんだつたがね。」

と、猪口ちよくの片手かたてに、蓋ふたものの黒豆くろまめを一寸ちよいとはさむ。

「矢張り甘味あまいしいね。蓬莱屋ほうらいやは——それに重寶ちよひほう

だよ、此この頃ごろは配達はいたつもするんだから、時世じせいは代かつた

よ——仲なか町時分ちやうじぶんには土手どての袖摺そですり稻荷いなりの近くちかに、

ちよん鬻まげに房楊子ふさやうじをさした、お爺ぢいさんの

松助ぼんたうにそつくりだつたよ ひとりもので、

自分で豆まめを煮にて賣うるのがあつてね、名ぶめいつさ。町まちの

人ひとたちも競争きやうきさうで買かひに来くる 葡萄豆ぶたうまめがおも

だつた。が時々とき／＼は黒豆くろまめを——おや、何なんの話はなしだつ

け、

然さう然さう——」

と、又また衣紋えもんを抜ぬいた手てで、一ひとつ膝ひざをたゞいて、

「其その黒豆くろまめを一ひとつさ、お辦當べんたうのお菜かずの中なかから、お

前まへ何どう工夫くふうをしたものだから——お澄すうちゃんが、

幽靈いうれいの、張紙はりがみの、口くちを大おほきくして、脚くはへさせたもの

なんだよ。齒はを染そめたやうで凄すこいだらう。」

「あら可厭だ、」

と憎らしさうに、師匠の顔を色氣なく、房りした
が生際の清い額で見た。前歯が一つ染めたやう
に艶々と雪なす頬に透るばかり年増ぶつて婀娜に見
える。爪楊子を弄んだなりに黒豆を丁ど含んだので
あつた。

「私、氣味が悪い」

「吐き出してお了ひなね。」

「だつて、汚らしい」

「食べておしまひな。」

「だつてたつても、氣味が悪い。」

「勝手におしよ。そら、不斷人形ごとのお化が何
だい、なんのつて子供にされるのが。惜いもんだか
ら、其の新工夫のかねつけ女を、棒にさして、密と
二階へ上つて來たのさ、お澄ちゃんか。うらめしや、
數の子と、私の頬邊の處へ不意に突出したんだがね、
血屋敷は音羽屋と心得て居るから、蒼い顔を見て居
るうちに、口で一寸
食べちやつた。」

「お化の口から。」

「あゝ、口うつし」

ふと氣がついたららしい佛壇をうしろに見た。これは凄味を感じたのではない。線香に心着いたらう。

――立派にお灸に價値する。

「可厭ね、おつかさん。」

お李枝が慌しく、

「うつかり、あゝお茶と一所に、呑んぢやつた。

何うしよう。」

と、肩をくねつた、兩袖が娘らしく撓つたのである。

「根が食しん坊だからさ。」

と、師匠はもつともらしく、小鍋の蓋を一寸ずらして、

「こゝへ、さつま揚を些とばかり。あゝ、切つてあるね。いやにお上品だね。丁ど可い、一所に煮て、長屋の菜鴨と云ふ洒落さ、お醤油を少しお入れな、

お前は甘口だから

「

お李枝は醤油つぎをあしらつて、

「くひしん坊、くひしん坊つて、それだから、おつかさんたら、そんな事ばかり人にいふもんだからをぢさんも、矢張り、さういつて

それだもんだから、逗子鎌倉だとか、三崎だとか、箱根や伊豆あたりまでだ、と誘ふだけけれど、日數のかゝる處では、何をくひしん坊をして、身體を何うするとか、煩ひでもすると、お母さんに濟まないから――そんな事を言つて居たんですもの。だもの、それだから、誘つてくれなかつたからつて、何も――おつかさんお酌をしようか。」

師匠は莞爾。

「おや珍しいね。」

「叱られやしないこと？」

和

倉へ行きたいなんか云つて。」

「和倉へ？」

お李枝は密と瞼を伏せた。

「和倉だか、何處だか、能登のものだつてさ。」

飴屋の芝居からはじまつたんぢやあないこと。井戸だと言へば、すぐに皿屋敷なんだもの、お母さんは。―― 學校でお澄をばさんと、そんな惡戯をしてさ。」

「叱られないでさ、下階は第一課―― 何とかの讀本で、二階のお席はお習字の最中なんだもの。すぐにお灸さ。線香を持たせられて―― おや一つ家の灯は段々景色がよくなるね。」

娘のお酌で、師匠は一層上 機嫌で、

「だけどもね、今時の女教員さんから見れば夢にもなるまいよ。學校と云つたつて―― 先生とご新姐、二人きり。其のご新姐さんと言ふのが

お聞きよ。

しまものの襟つきで、ぞろりと裾を曳いて居て、順に手習子のうしろへ立つて、手を取るのに、淺黄の蹴出しが、眞白な處へ搦んで、ちらつかうと云ふ

んだからね。妓夫のうちの鼻つたらし、新造の子のお茶つぴい、何とか樓の秘藏娘がせいさいで、一騎當千が集まつたから、そのくらゐな事には驚かないけれど、ご新姐さんが、お前、旦那様の先生の黒斜子の巳の時さがりの五つ紋を、半纏にして、黒縷子の襟を掛けて着て居るんぢやあないか。

おませの連中は、大抵あてられツ了はあね。

大方、上野の彰義隊のぬけがらか、私たちの親同様、川越の藩士の落人だらうよ。

「ー だもの、しめしなんか、つきはしない。弟子たちも、飛八丈で刎ねたものさ。私たちの居た茶屋にも、ー あの一家の沼のわきぢやないけれど、ー 大音寺近くに寮があつてね。そこへ泊る事があるだらう。裏道をつたつて、学校へ行くのに、京一の奥だから、かいせきの金子だの、小店だの、刎橋が並んで居る。幾つめかが学校さ。広いおはぐる溝のへりへ立つて、先生とでもいふことかね、お前、ー (ご新姐さ) ー ん、刎橋！」

）と、

朝あさがけに聲こゑを掛かけるのさ。（いま開あけますよ。）

でもつて、濡ぬれ縁えんから庭には下げ駄たで、飛と石いしつたひに、

――秋あきの末すゑ頃ころだつたらうね　――よつめ垣がきに

朝あさ顔がほの小ちひさくなつた枝し折り戸どを開あけるのが、右みぎの淺あさぎ黄ぎ

縮ちりめん緬めんをぞろりと小こ褌つまを取とつて、黒くろ斜な子この半はん纏てんぢやな

いか。何どういふものだか、竹たけのみがきの長なが煙ぎ管せるで片かた

褌づまをおさへたものさ。其その姿すがたで、勿はね橋ばしを

下おろすんだから、一ち寸よいと所しよ作さがあつて手て間まが取とれる。

私わたしは、島しま田ただから先まづ、おとなしいと

お澄すうちゃんは、桃もも割われを振ふつて、そくにポンと

飛とんだよ。」

「あら、をばさんが。」

「ほんとうに、あら、をばさんさ。その癖くせ、しを

らしいぢやないか。人あね形さまあそびをして、二ふた人たりで、飾かざ

つたり、立たてたり、寝ねかしたり、お邸やしきにも、長なが屋やに

も千ち代よ紙が張みのぶんこ一いつ軒けんだからね。私わたしの方は長なが襦じゆ袢ばん

の切きを工く面めんして、人あね形さまに、敷しき蒲ぶ團とんを二まい枚まい、小ちひさな搔かい

巻をふはりと掛けて、ふつくりと紅い枕で、およよし、よし、とか云つて、いゝ心持に寝かすとお思ひ。屏風までは、同じく千代紙で揃へたけれど、お澄をばさんの方には、搔卷も蒲團もない。

不斷は、數の子數の子、練の子なんのつて云ふのが、お數姉さん　ー　と甘つたれて、一枚だけ、ねえ、頂戴なとねだつたけがね。

此方も大切なんだもの。

この頃になつて、お前が可愛がつてもらふのを見ると、あゝ、あの時分、なぜそつくり譲らなかつたらうと、つく／＼、思つたりするんだがね。

いゝおあんばいだ。

と、お李枝のよそつた、鍋のものを汁ばかり。

「　　餘程ねえ、お澄さん　ー　あの女は、人形事の夜具の欲しかつたのが身に沁みたと見えてさ、お前も、一所に、小石川の家へ行つた時見たらうと思ふんだがね。」

近頃、やつと小濱だか、金紗だか、友染の長襦袢
が出来たと云ふのが、こんどめの時に見ると、たし
か二枚とも、それが小搔巻と炬燵蒲團になつて、其
の中へ旦那様が入つてゐるから可いぢやあないかね。
――人形を寝かした氣だらうね。――おゝ、
よし／＼、とか云つて、鹿の子の肩あてを敲くんだ
らうさ。いゝ年をして、
呆れるよ。」

「知らないわ。」
と深く聞入つたが、お李枝の薄い頬に笑靨が見え
た。

「少々恐れもするね、穩かでないよ。だけでも、
いつまでも人形ごとでやつてる處が可愛いぢやあな
いか。――それでも眞個の事は、お數姉さん頂
戴なで、遣切れなくなつて、一枚敷く方を譲つたつ
けがね。」

――それが、其の時分のかたみになつて、私が、
住江（引手茶屋）から急に出て、まあ、遁げた
んだ。――菊屋橋うらの、お前のお爺さん、お祖

母さんたちの内、あの生れた處だよ。」

「ふゝ、」

と、袂を帯へ絞つて、腰をしなやかに、つと舞臺へ上つた。あかりをうけた、頸の白さのうしろ姿は、何百人を手にかけたらう、どの女弟子よりも、親の目には、美しからう。縁へ下りて、線香の燃傾ぐのを直す手つきも、袖を合はせて、勸世音を伏拜むやうで　またそれがはかなさうで

師匠は思はず、ほろりとした。

遠くからでも歸つて来たやうに、上品な顔を見て、

「四方（酒屋）は勉強をしたね、今度の一寸飲めるよ。」

「もう少しとつけませうか。」

「今度は私が働く。」

すぐ手の届く臺所で、酒屋から来たらしい、二つばかり金魚の入った硝子に並んだ白徳利から鹽梅して、お李枝が、蓋を取つて待つ銅壺へ、ひとりは

惜い手つきである。

「身は定まらず、退屈だし、水道尻の水菓子屋の小僧をたまに使つて、（おんかよはせ）をしたもんだから、お澄をばさんが一品づゝ内證で持出すんだもの。人目には立てられない。尤も、衣類なんぞは、私も可厭だし、あの女にもそんな事はさせられないから、箸箱ね、お前のいま使つておいで振出しの箸の入つたそれだの、すきな、草草紙、焼けるまで烏森にあつた、あの一揃ひ。第一が人形の箱よ。――血屋敷と一つ家は、何うしようかと思つて、貼込まないでちらして置いた、似顔繪かそれだかさ。

桃別のお澄ちゃん、袖にかくして、少とづゝ運んでくれたんだがね、勸音様へおまゐりも度々ぢや跋が悪いから、刎橋をお忍びなんだが、そこは――あの町に巢を持つた雀だから、燕もおなじこと、夜の柳でも、臍でも、傘をさしたつて、出入りはひらり／＼自由だけれど、途中があるだらう。――金子の刎橋を出ても、氣味の悪い沼がある。寂しい

傘干場、だゞつ廣い紙すき場、大音寺前、龍泉寺町へ出て、お酉様の前を通ると、團子屋のわきが、もう一面の水田で、すぐ太郎稻荷の森が、しん／＼と晝でも暗いんだよ、そこから田畝つたひに菊屋橋裏で、いづれ夜だもの、コン／＼も鳴いたらうし、狐火も燃えたらう。尤も、夜の嫁入だと思つたらうけれど、――しよぼ／＼雨に袖笠さ、お人形を千兩箱ほどに抱へて、澄ちちゃん、よく來てくれたわねツて、人形箱と一所に、しつかり抱いたら、久しぶりで人形ごとで寝て見ようと、島田と桃割れと並んで、枕でさ。お乳をのんで遣る。くすぐったい、といふ、おなかへ觸つて、おうなの井を食べたの、と言はれた時は、母さん眞つ紅になつた、――それが、李枝ちゃん、お前だよ。」

師匠の顔より、娘の方がぼつとした。

續井戸覗

「――それだと、年ごろといひ、其の時のお母さんが、古井戸を覗いて、身を投げようとした、てツた形だね。」

「ぞつとするわ、鶴龜。」
と身ぶるひする。

「いゝよ、こんなにちやんと育つてるぢやあないか。――ひんこんには暮しても。」

と娘の肩を抱きたさうな手を、膳の上へ控へ、軽く胸を打つて云つた。

「お咲ちやん、あんな小さな子だけれ

ど、怯えて蟲が出なければいゝと思つたくらゐよ。

變なんですもの。その三人の婦の顔が、揃つて鳥に

變つた時は、お山の方から通り魔でもしたやうで、

皆がいやな顔をしたんだわ。」

「桃太郎だつて、お前、犬と猿と雉子

が武者扮装で大小をさして威張るぢやあないか。勝手のちがつた當時のお伽話の何かだらうよ。――

怪しいにした處で、北國くんだりの魔ものが、神明様の御近所で何うするものかね。何か

い、それからどうかしたのかい。」

「あのね、――それまでは、だんまりよ。」

「生意氣だね。」

「そのだんまりぢやない事よ、何だか

知らないけれど唯黙つて、」

と、うつむきなりに頷いて、

「紙芝居の黒衣は一言も口を利かず、何にもものを言はないのよ。――パツと夜があけるの。淺黄空に霞がかゝつて、三人の婦が消えとね、お母さん――それから一寸好いの。井戸だけ残つて、そこは紙芝居だから、擲だか檜だか、分らないけれど、細長い、丈の高いのが井戸の後へ生えて立つたわ。其の居まはりへ、竹垣の破れたのが出来、中は一面の樹林よ。井戸のすぐ横へ、トタン屋根の臺所口と格子戸が並んで、荒れた地面をいびつに取つて、鍵の手に棟割長屋の描割なのよ。」

「ご同然様だね

へい、それから、」

「長屋のはづれが、ぼツとした廣い道で――

(巢鴨街道黒衣が口上で、然う云ふの。

震災後に、私たちしばらく居た事があるわね

何處か似て居ました。――それからね、ま

た雀の聲を聞かせるのが、眞個にうまいのよ。まつたく、しら／＼明に連を誘ふ聲だつたわ。しばらくすると、それはまだ嘴の黄色な、むく毛の白い、可愛い、可愛い、仔雀が三羽、樹の梢を離れて、ちら／＼と出たと思ふと、ストーンと井戸の中へ落ちたぢやあないこと。」

「まあ、」

「子どもたちも、やアと言つたわ。(内側のし

きりに留つて居る、しかし其處には釣瓶の水が溜つて、渦をまいてる、雀の身には、深い、深アい淵ぢやがの。(――然う言ふのよ、口上で。」

「變な聲をおしでないよ。ふう、さうすると車

井戸だね。」

「えゝさうよ。羽は水びたし、嘴へも水がかぶつて、あはれやの、いとしゃの、でもつて、又鳴き聲をしたんだけれど、チイチイ、チイチイ——それは可哀相 聞いても見ても居られやしないわ。」

其處へね、お母さん、格子をあけて、若い學生さん風の、きりゝとしたのが急いで出ると、一寸、見まはす様子をして、すぐ氣が着いて井戸側を覗いたの。」

「まあ、よかつたね、さうかい。」

「でも、それからが騒ぎなのよ。何とかく、つて呼ぶと、もつと年の若い、くり／＼肥つたのが、あたりこ木を持つたまゝ飛出したつけ。自炊でもして居るらしい。もの干棹だ、一番長い。蝉を捕る、あの骨法で。いや拭巾を縫つてなんぞ居られるものか。間に合はない、水嚢を突刺せ、でも

つて、一度さし込んだけれど、何うしてもすくへないらしいの。私もはら／＼して、急にい／＼智慧の出ない處へ、でも感心ね、灰ふるひの柄を物干棹へ結へつけて、それが深い處まで井戸へ入ると、しばらくすると、かはい／＼わね、なき聲がやんで、三羽とも、もう、ぐつしより、揉みくちやになつて上つて來たの。其の學生さんがね。それは
嬉

それは可哀相ツちやないのよ。どんなに吃驚したでせう、それだし、ぐつちより濡れて、ぶる／＼震へて居るんだもの、――芝居の繪ではさう、細くはないから、半分は、飴屋が説明をするんだし
あとは此方が推量なんだけれどもね。

暖めなくつちや、何しろ暖めるのが必要以上だとか、若い方が言つて、七輪に味噌汁の鍋が掛つて居る、あれをおろして、あぶりませうか。

その戸のあいて居る臺所中へ、七輪と灯が出たの、ひよいと踊つてさ、少しをかしい
何でも

徹夜で勉強でもして居た處と見えるのよ、様子がね、お母さん。東雲の街道筋とかで、まだおもて長屋は、戸が閉つて居るんだわ。

七輪で焙るつて、あら、亂暴！ 仔雀を

そんな事をして見たがいゝ、承知しないから――さう思つて居ると、さすがに、さすがだわ。――

「何だねえ、勿體らしい」と、長煙管で、一服、頤を斜めにフツと吹く。

「年上の方が、膚で暖めよう――助かるかな、皆動かなくなつたがと、懐の中へ、ぢつと入れました。深切だわ、ほんとうに優しいわ、ほんとうに。」

其の心意氣ばかりでも、屹と助かる、と思つて居ると先刻七つのお星様の出た處へ、雲が、あの一朶の雲――白い蓮華の花片が、水へ浮いて、すら／＼と動いたやうな。――と、白い指さきをちら／＼とさした處は、豆をつまむとは思はれぬ。

「何だい、偉さうに

とろゝが溢れたや

うな、あれぢやないか。

山葵を利かして、

悪くないね。」

これで見ると、師匠は唯物派だ。

「だから、お酒を飲むから可厭さ——その雲がね、木戸口へすつと下りると、背のひよろりと高い、色の白い、凄いやうな、それで居て、もうお媪さんの——尼さんかと思ふと、胸へ掛けた箱へ、ごへいをのせてさ、行者かと思ふと、白い笈摺だか、袖なしだかを着たのが、市女笠、お母さん、檜笠、菅笠？ 其の笠を目深に被つて竹杖をついて、そろ／＼と地内へ入つて、井戸の許へ寄つて、學生に、何だかものを言ひかけると、それからね、お國訛やら、行者だか、尼さんだかの、お經の文句だか、お禁厭の唱へ言だか、何しろ紙芝居の口上で、よく判然とは分らなかつただけれど、何でも。

尼さん！ぢやない、行者か、巫女らしいわね。其

の旅修行は　　―　小石川の白山様へ朝詣りに行く
處だとか、行つて来た處だとかだが、通りがかりに
見たから意見をする。　　其の三羽の仔雀は、
三人の婦が生命がけの願を籠めた　　―　其の願の
叶つたしるしに、井戸へ落ちて死ぬことに成つたの
で、言はば神様の犠牲だ。もとの井戸へ落すやうに
―　と氣味の悪い聲で、陰氣に、ねツつりと、
推着けるやうにさう言ふのよ。

肯くもんですか。これが肯けて？　お母さん、お
母さん。」

「あゝね、むゝ、さうさ。」
と、師匠は、山葵のきく方を考へて居たらしい。

「　　―　掌に居るうちならば、不思議な掛合に
聞きとれて、うつかり井戸の中へ取落す事があらう
も知れない。　　―　膚につけて居るものを、見す
／＼溺れさして殺せるか、と若い人が言ふとね。目
を閉ぢたやうに、しばらく考へて、何うあつてもき

かなければ、せめて其の雀、一羽づゝ針で突いて片目だけ潰さぬか。――それでない、あべこべに、三人の婦の生命にかゝはる、さあ。見れば男世帯のやうぢや、修行中心得の針がある、といつて、襟から長いのを抜出して、可恐い顔をするんだもの――咲ちゃんが泣出したから、人ごみを辻へ出たの。それで、あとは何うなつたか知らないけれど。

師匠は、なか／＼、ご飯にはしようとしな。

「どう言ふのだね、それで。」

「何よ？」

「じれつたいね。」

と、おつもりの銚子が、踊りの流儀にない動き方をすると、一寸目の表情を用ゐたが、花を呼び、蝶を吸ふとか云ふ、町内の有志が勸察のほかである。

お李枝が、攪ふやうに取つて、臺所へ立つのを、九尺ばかりに流眇で見、

「おや、憚り様。」

「今夜は特別よ。」

「孝行デーかい。」

「それに、金魚が急に見たくなつたもんだから。」

「おや、なほ憚りだね。」

「あら、いけないこと、何うしよう。」と、銚子の底へ袂をあてて、一ふり振つた處は、くどいやうだが、出戻りとは思はれない。

「三疋ともおち了つたわ。」

今朝も焼麩

を食べさしたのにさ。」

「焼麩を恩に被せるのは、震災のお料理ぢやあな

いか。早くおよこしよ。」

と乳へ抱取るやうに、胸をトンと撫でて、娘と銚子を、引寄せた。

「をぢさんには、極内證よ、極よ。」

「何故、何をさ。」

「だつて。先月お茶湯日のかへりに小石川

へ寄つた時。お澄をばさんと二人で、自動車

で送おくつてくれたでせう
ちやうど、神明しんめい様さま
の御縁ごえん日にちだったもんだから、少すこし歩ある行いっしよかうと、一いっしよ所しょ
に降おりて、おまゐりをしてから、李り枝えばう
ねだりさうな顔かほだが、何なにかねだるものはないかい、
と云いふのよ。」

「いゝね、場ば所しょが、縁えん日にちで、ねだるものはないか
は嬉うれしいよ。――先生せんせい、心こころ得えたもん
だ。ふう、感かん心しん。」

「えゝ、さうよ。些ちつとも感かん心しんする事ことは
ないわ。三越みつこしか、どつちかの松まつの中うちでもあるなら
和しらないこと、縁えん日にちで 水羊羹みづやうかんぐらゐ買かは
せたんぢや間尺ましゃくに合あやあしないから 私わたし

「大たいした權幕けんまくだね。」

「八丁堀はつちやうぼりの偕楽園かいらくえんがあるし、築地つきぢの錦水きんすゐがあるし
約束やくそくばかりで、些ちつとも實じつ行かうなんてしやし
ない、まだほかにいくらもある。 責せき任にんを

果さないうちは
私は貸した、と極めてあ
るし、向うには借金だと覺悟をさしてあるんだから
證書をこそ取らないけれども
「

「凄じい勢ひだね。」

「だつて、そのくらゐな事は、當前だわ、をぢさ
んは、私が好きなんだもの。」
と白すぎる頸をツンと長く、すまして言つた。

「おや、呆れもしない。」
と莞爾した。しかしお母さんは、湯呑へ銚子を傾
けたのである。

「お母さん、やけはおよしよ。」
「どつちがやけだよ、串戯ぢやない、今夜は、四
方がうまいんだよ。――それで何うしたのさ。」

「金魚。」

と、白徳利と並んだ、縁の青い硝子を覗きながら、
だから、金魚が欲しいと云つたの。

いけない、おもちゃにばかりして、干殺すから。

小鳥でも、金魚でもいきものは買つてやらない。――断つた處が頼もしいわ。そんなことで、約束を一つ消されては大變なもの。」

「仔雀の矢さきで、金魚がおちたのは、おつかさん氣に成るがね。其の薄氣味の悪い、巫女だか、何だか、針で目を刺せ、とまで見込まれた三羽は何うしたらう。」

「怪しい巫女と、睨合つたのが、年の若い、きりゝとした男だつたから、屹と雀を助けたわ。其の人がね、お母さん。――をぢさんに肖て居たの。」

「おや、お前、をぢさんは、私を好きだ、と言つてるが、其の様子では自分の方で」

「いや！ お母さん、誰があんな」と言つたが、禿頭とも白髪とも。――それほど罵るべき意趣遺恨はない。それにお母さんの出やう

によつては、新聞の記事による、お澄をばさんたちのあとを和倉へ追つて行きたいのである。また其上に、晝間電車で、矢野のうはさをした二人の小説家の風采に對して雑言ははゞかりがある。其處で、振上げた茶はうじの遣場に困つて、

「誰があんな、高利貸や無

盡の宰取に

と言つた、前者は驚くべき好條件のもとに、目下申込中の再縁の對手で、後者は、先の夫である。これによつて、小説家は、やゝ其の面目を保ち得た。

合歡の葉かげ

和倉の町を、一度其の停車場へ戻るとして、道を
端村、田鶴濱、白濱と續き、鹽津、中島へ行く。

此の中島から、東すれば、塗物時繪の輪島に到り、
西すれば半島の中央部を横斷して富來に達する。富
來は國中の名所で、千種の貝が渚に姿を揃へて居る
他の山廓水村の山道、達路などは、幾條
づゝ、又別である。

白濱の里を行くものは、却つて海に遠く、左右に
展けた水田と耕地を廣々と見るであらう。尤も一方
は海、一方は連らなれる山である。が、其の山の、
縁を載せて來り、海の波を包んで寄せる處が、兩側
に白楊樹のまだ若木の並木の植つた、まつすくな、
堤防になつて車馬を導く。

恰も海中へ築出した、遙々長い波止場に似て、十
町に餘るであらう。其の眞中あたりに人の目を驚か
す、殆んど太鼓橋にも譬ふべく、虹に欄干を渡した

やうな木の橋が圓く掛つて、前後の堤防で堰とめた、
波は其の下を打つて、流れて、汐入の湖が、蒼い水
を湛へて居る、渡るものは漠々として浪の上の棧を
高く行く。

—— 白濱の橋である。白橋とも俗に稱へる。橋
も白い、堤防も白い、水の上なる雲も白い。

これを鵲の橋とも呼ぶのである。が大方、えせ歌
人、なま俳家の、せずもがなの風流のすさびであら
う。

鵲は、しかし、湖を巻く山の根の密林にたぐへむ
には、—— 青嵐する頃なれば、藤の裏葉を飜す緑
樹の墨に藍を羽打つて、水に映る躑躅の色も、さな
がら、其の鳥の群居る影を宿すのである。

遙に和倉の岬から、深い入海のこゝから見、夜
のその温泉の町の燈は、紅うちら／＼と三つに見え
て、三つ提灯と、言ひ習はすのが、うつくしい鷄の
毛冠に、さながらであると聞く。

また、唐島、筆染の崎が霧をも霞をも彩るのである。

記してこゝに至ると、世辭にも眉を開いて、一寸景色が見たくなる。同時に、白濱橋の勾配を、宙に自動車が馳ると聞けば、おのづから危つかしさに目を閉ぢよう。たゞに橋のみでない、埋立が低く、水の藻の蓬なるは、直ちに、白楊樹の根を覗いて、雑魚の鱗は行人の衣を笑ひ、青蛙は枝高く旅客の笠を嘲けて鳴く。特別の要地に於て待たないと、自動車はかはらないほど狭いのである。

荷馬は急ぎ、里人は、やがて田を上る時分だが、まだ暮れるにはちと間がある。薄日の空はほのかに曇つて、海を包む崎岬は、何となく暗くかげつた、少し風立ちながら、波は眠つたやうに静かである。

堤防にも、橋にも、殆んど人通りがないから、飛魚の青く翻る勢ひで、中島街道から和倉へ向ひ、衝と並木をいつぱいに驅ける自動車があつた。

大形おほがたにして、空色そらいろの朗ほからかに新あたしい此この一だい臺たいは、和わく倉中くらちゆうで知しらないものない、持もちぬしも自慢じまんの一いっしや車で
―― 相良彌之助さがらやのすけ ―― 其その持もちぬしが直たちに運うん轉手てんしゆで、客きやくを載のせる。

東京とうきゆうから買かつて歸かへつて、時ときはわづかに三みつ月つきばかり、
二千哩せんマイルとはまだ使つかはないと言いふ逸物いちもつである。

駕籠かごかきは畑はたけぬしなり蕎麥そばの花はな

むかし伴家はいかに、木曾路きそぢの此この興きやうがある。それと趣おもむ
きは違ちがつても、ハドソンの所有しよいう者しや兼運轉手けんうんてんしゆ、相良彌さがらやの
之助すけは、まだ豫備よびの輜重兵しちゆうへいであるが、積年せきねんの志こころざしを得え
て、東京とうきゆう、芝しばの某會社ぼくわいしやへ、車くるまを引取ひきとりに行くのに、
はじめての見物けんぶつをさせかたがた、年としとつた母親はやおやを連つ
れのぼつて、行路ゆきには善光寺參詣ぜんくわうじさんけい、歸途かへりには東海道とうかいだう
を―― 名古屋なごやで金きんの鯨鉾しやちほこを見みせた。それよりし
て北國街道ほくこくかいだう ―― 清洲きよす、大垣おほがき、關ヶ原せきは人も知しる。
藤川ふぢかは、小谷をたに、木きの下もとなど、忘わすられかけた
古戰場こせんぢやうを一ひとのしにのして、夜よに入いつて、敦賀つるがの金ヶかね
崎さきに着ちやくしたが、調子テウニツクが好よくて、はずんで留とまらない。

すぐ柳ヶ瀬まで乗りつけたのさへ、秀吉以来の名譽の處を、其の金ヶ崎にもタイヤを留めず、夜中海に沿つた山路を、春日野の峠越えして福井へ馳せた。それから金澤。和倉までは、四十里ばかり。國道坦々として、半日で駈け戻つた閱歴がある。

親なればこそ乗つたよ、と聞くものは、息子よりも母親を禮讚する。孝行と腕達者で、温泉町に響く男であるが。――

現下、其の、中島の方よりする堤防を――和倉から行くより道が短い――白濱橋に向つて、埃さへ軽く軽く、薄日を浴びて、またく間に半ば進んだ、と思ふと、巨大なるブン／＼蟲が、禁厭にかゝつたやうにハタと留まつた。

留まると、笛の一音も立てないで、じり／＼と後退しだした。

後へ戻るのに、折から人脚の絶えた、見透しの堤防を、且は手練だと言ふとやかうの際も

なく直ちに道のはづれに、少々せう／＼の飛地とびちの、谷戸やど出らしい四五軒けんの村むらがある。其その取と着つきの、小ちひさな酒場バアの店みせの角かどを、ぐんと横庭よこにはで留とめた。

ものやさしい女房にようぼうは土間どまに見みえた。が、白粉おしろい氣けなどあるのではない。破れ團扇うちばから顔かほを出だした、ばあーと言いふのを、不真面目ふまじめとさるゝならば、謹つしんで、藪やぶから顔かほを出だした酒場バアだ、と言いはう。

裏うらがすぐ山やまの根ねつゞきで、その雑木林ざふきばやしが店傍みせわきの庭にはになつて、青葉あをばが茂しげつて涼すずしい。二ふたつば

かり卓子テーブルを並ならべた土間どまを劃しきつて、あとの三和土たゝきが本ほん業げふの小ちひさな魚屋さかなやの店みせである。

清水しみづが湧わいて、筧かけひに流ながれる、水船みづふねに鯉こひは躍をどらないが、軒下のきしたに潺せん／＼と灌そくぐので三和土たゝきの魚うをは皆みな活いきて、鯿かれひも、鮪こちも、魴はうぼうも、色いろがそのまゝ、ちら／＼と映うつつて、動うごく。すみをふいた烏賊いかは、女房にようぼうの筒袖つゝそでより鮮明せんめいに、わかなぎの鱭ひれは、其その前掛まかけの紐ひもよりも淺黄あさぎが勝かつ。就中なかんづくしぐみ 蜆ひとやまの一山ひとやまは、紫陽花あざさゐの濡ぬれた影かげをちら／＼とこぼして居ゐる。

咄嗟に、蟹の面が軒からぶら下つたやうに、いきなり赤い面をぬつと出し、ゑみわれたやうに笑つて、「いよう、大將。」

と、煙のもつれる煙管を片手に、片手で煽るやうに運轉手臺を掬ひあげたのは、木津氏、金兵衛であつた。

鴻仙館の風呂番め、こんな處に飲んで居た。相良は、ズトンと、何故か、もぎ離すやうに下りると、ひしやげた茶の中折帽を被つたまゝ、つか／＼と店頭を横切つて、算の口を、たぶ／＼と兩掌に汲んだ。

同時に、扉をあけて、裡から差覗いたのは矢野である。

「さあ、お乗り。」

「いやあ、旦那。」

「お乗りよ。」

「いやあ、旦那。」

「乗るんだらう。」

と、また云つた。

矢野は通りがかりに、金兵衛が、酒の機嫌の――
憎くない無遠慮で――乗つて歸らうとして馴
染の運轉手を呼留めたために、自動車が引返したも
のと思つたのである。

其處へ、相良が、汗じみた手巾で、まだ雫の垂れ
る両手を拭き拭き、日焼けのした、しつかりした、
鼻筋の通つた顔を見せると、慌たゞしく中折帽を引
かなぐつて、

「旦那、相濟まねえですが、一寸こゝでお休みな
さつて。」

「よし、心得た、故障かい。」

とあけた扉から、身軽に、杖を抱いて下りた。車
は然やうに迅く心得て、雑樹の空處へ後向きに引込
んだ、道へ置いたのでは、馬が通ふのに難儀である。

「まあ、休まつせえまし。此奴ばかりは素人手に
は、へい、何うにもならねえもんだで
いで、先づ、ゆつくりやるだ。」
急

と、自分に言ふやうな事を勝手にしやべる。引込んだ卓子の兀膳に銚子が二本ばかり。氣取つて抜いたらしい矢立が斜に構へて居たのであつた。

「盛んだな、金兵衛さん、半座を分けて貰はう

か。」

「へ、飛んでもない、東京の奥様が泣かつしやるだ。」

女房が、ほかの椅子を直したから、庭へ向いて、
「橋を小さく」
白楊樹の間に波を見て
腰を掛けると、運轉手は、前へ来てまつすぐに立つた。

「お足を留めまして、はあ、時間を徒費にして恐縮です。」
「車の故障ではないのです」

金おぢい。」

不意に呼掛けられて、
「あッ。」と言つた。

「彼處で大變なものを、おら見てなあ。」

運轉手は、其の大變なものと言ふものを、直接に、
客 一人に憚る如く、

「こんな驚いた事はないぞ。」

「うむ。」

と突立つのに、矢立を忘れず、呼吸を詰めて、

「お嬢ちやまか、軍人殿 死體だかい。」

と並木を睨んで目の色を變へた。――餘り唐

突ではあるが、其の人物の行動には、恚くきづかは
るべき仔細があつた。こゝで説明をしないで、も
のがたりの進むまゝに、讀者は自ら會得さるゝであ
らう。

「向つて右側だから、 此方からでは見

えませんよ、が、そんな事ぢやない。」

相良は、客へ向直つて、

「旦那 今日 輪島を、ご遊覽で――

此の能登の名所をお遊びの最中へ、まことに申上
げ兼ね

るやうな氣がしますのですが。
「吻と息つくばかりである。」

矢野も椅子に腰を浮かせた。

「何事が起つたんだい、いや、然うぢやないか

何を見たんだね。」

「それがです、はあ。」

なほ直立の姿勢のまゝ、

「輪島へ、おともをします途中でも、

二三お話をしました通りで。東京から、

此のハドソンを運轉して歸りますのに、時間の都合、

それに 打明けました處は、幾分經濟の模

様もありまして、敦賀の金ヶ崎を、夜中に福井へ山

越をいたしました。風こそありませんが、えらい雨

で、それに眞の闇夜であつたのでして

「尤も軍隊に居りました時分、行軍演習等で地理

には心得があります。――金ヶ崎で夕飯を済ませ

ましたのが、午後九時 　　まだ宵のうちでし

て、旦那方が、東京で、これから一寸銀座へ散歩と云はるゝ時間なのでありますな。

赤崎、江良、杉津、大比田、元比田、大谷、大良と上つて、春日野を武生へ参りますまで、海岸の峠道を五里上つて、三里下るのですが、あと五里平坦な縣道を併せて、福井まで三十五哩そこらで、――十二時までには、駄馬に乗つても散歩だ、と甘く見越して、乗出したものでしたが、雨が川になつて、逆落に來るで困難しました。二里、三里づゝに少しづゝ山家の部落はあるのですが、殆ど灯も見えませぬ。大降の暗闇です。しかし、一兵士たりと雖も、軍人が、母親を奉じて居ります。衷心聊かも恐怖を抱きませんでした。」

衣囊の手巾を引出して、雨を拂ふが如く額を拭ふと、金兵衛が、ぐらつく椅子とともに、肩を揺り、卓子の端を大な手で敲いて、

「情婦でも乗せて居て見さつせえ、天狗様が海へポカ―リだ。へ、へ、へ、旦那。其の男の阿母は、

和倉でも、能州一番と云ふ髮結で、へい、その貯めた金で、自動車を買はせたゞが、金べえ握らせて東京へ出したでは、宿場宿場へ引掛つて、もとも子もなくしたあとが、玩具の風船を腰につけて、ふら／＼と泳いで歸るべいと、其處で、阿母がへい、監督について行つたでがすよ。」

「馬鹿を言ふな。」
と眞顔である。

そゝけ鬢の女房は、茶の給仕に、しをらしく、手拭だけ新しいのを帯に挟んで、皿鉢をのせた棚の下に框に腰を掛けながら、傍聞きして笑つて居る。

「自動車屋さん、それぢや飲むね。」

矢野は口許で猪口の眞似して、

「一つもろともに傾けようか、泊は知れたし。」

「―― 雑樹の中なかの古井戸ふるいど ぢやない

こゝは新店らしい。―― 井戸いどのわきに合

歡むの咲さいた様子やうすが、まことに好いいよ。」

「え、何處にですか。」
何事ぞ、やゝ驚いたやうに言つた。

「その山の根に、見えるだらう。―― 自動車の
塗色に、ほんのりと映りさうだよ。」

「あゝ、悚然とします 旦那―― 所

の事で、せずともよい、親孝行の眞似方ばなしを小
恥かしく申したですが。―― 唯今の其の山越でし
て。―― 雨に籠つた孤屋などでは、鯨が戸惑ひを
して、汐を噴きながら、谷戸や、峠を轉がると思つ
たでせう、自分ながら、何とも、化ものも同然な。

其處へ、三體、五體づゝ、石の御出家

―― 地藏様が、自動車の光の影に、ふは／＼と
顯はれられて、道の端や、古塚、榎の根方、橋袂な
どに、立つてござるではなうて、しとり、しとりと
歩行いて來さつしやる。歩行いてですわい。

錫杖をつかれたもあれば、掌に人魂のやうな、ぼ
やりと光る玉を載せられたのもあり、片手を、停止
で、差上げらるゝやうなものもあり、 それ

を幾ヶ處で見ましたが、皆前途から連れ立つて
来られて、車が行逢ふと、下が海の崖ぶちなり、切
立の山の窪なり、道をよけて、ならばれて

此方が拜をして通ります時、にこ／＼と笑はれた
も見えました。中には、眞正面から、ふつと雨を霧
にして、二丈三丈の大きな姿で、車の屋根を、宙へ
スーと上つて、乗越されたのもありましたですが、
いつもそれが拜まれます前後には、屹と村、家、た
とひ掘立小屋でも、藁葺があつたのを覚えて居りま
す。

棚下の女房は、殊勝に見えた。片手で拜んだので
ある。

「母親は、たゞお難有や、お難有や、と申します
し、不思議とは思つても、把手持つ手が、それにビ
クともしませんで、齒車の一二三などは、口でかぞ
へるよりも容易かつたのですが、唯今は何とも、ど
うもー

白楊樹のあひだに合歡が咲いて居りましてな。

――女、婦の生首

「――女、婦の生首！」

刻下、聞くよりも、言ふものの顔が、唯凝視められた。相良運轉手は、深夜、山路を歩行かる地蔵尊の事とともに、戯言を操るには餘りに不器用らしかつたからである。

「埋立ての折に、こゝらの山の土に交つたでありませうか、堤防の彼處に――一ヶ所、合歡の木が生えて、こゝにあるのと同じやうに咲いて居ります。」

相良はハドソンの後部を透して、

「あゝ、身震ひがしますです。地から四尺ばかりの軟かい枝に、かなり大きな青白い蛇がからみついて居りましたが、合歡の其枝と、つぎの白楊樹の間に、白い顔が宙に引掛つたのが見えましたのです。」

「そんでは、首くゝりだ。」

と、金兵衛が咽喉をぐくり、と口を開けた。

「いや、袖も裾も何にもないんだ。」

「裸骸だかや。」

「手も足も何にもないんだ。――首ばかりで。

ぶツ捌けた、ほれ、解けほぐれた黒い髪が頬邊の兩方うへ波を打つて、風にさわ／＼と動いて、少ツと丸みのかゝつた顔が、海の正面を向いて活きとるやうで。」

「殺つたな！ 軍人。」

と、躍り上りさうだつた金兵衛は、尻が椅子に附着いて、ぐら／＼と揺れるばかり、氣あがりがして、急には起てない。

「何が軍人だよ。」

「ぬし、知らねえか。――館のや、梅の五番

の客人が、裏の棧橋から嬢様を連れて、ボオトで出た切り行方ちゆうが知れねえだ。――奥様が、

へい、ふしだらを出來いたで、氣が狂れて居さしつけ。出會次第、生首をちよん切つたんべい。」

「血が出て居ない。」

「潮で洗つて持ち来ただな。」 「何しろ、さら

し首、ごくもんにかけてある。」 「えゝゝ。」

「框の隅に引込んだ女房が、低いうめき聲をもらしたのである。」

「可恐い、血は出て居ないが、赤い蛇だの、青い

蛇が、いくつもの、によるゝと、首を捲いて動いて、

血のやうに、ぬらゝして、おまけに、あれだー

合歡の枝に搦んだ奴が、舌を出して、ちよろゝ

と頬邊から、唇を

「うゝ、もの、其奴が密通の對手づら。」

田舎稼ぎの、うた坊主よ。執念の深いやつだで、

蛇に、へい、なつたんべ。」

「矢立をだてに持つうちは、時代がのみこめないも

のらしい。」

「何か知らんが、話にもなちん可厭な氣持だ。」

相良は、中折帽を片挫ぎに引握んで、更めて矢野

に禮した。

「旦那、わしも男です。恐れはせんです。恐れはせんですが、あり得べからざるものを、現に見ました。見ましたと申さなければなりません。」

山の中を歩行かるゝ地藏尊には、母親を乗せて手ぶしに聊かのくるひも来ませんでありましたが、今の女のごくもんには、殆ど自己を忘却します、身體の中心を失ひさうです。大切なお客のおともをして――前途の、あの白濱橋は、一寸たりとも、把手にくるひを生じますと、生命も車も一大事でありますので、思ひ切つて後退をしましたのです。」「又一息ついて、

「しかし、あれです、一遍こゝへ来て、いく分か精神が静りますと、あり得べからざる事と申しますのさへ、餘りにあり得べからざる事にして、何うも私の此の脳頂の間違ひだと思ひますから、から身で參つて、唯今、十分に偵察、えゝ見届けますつもりなんです。お手間を取らせまして済みません。おつかあ、さつきから此處を通る人に、別に變つた様子

と言つてはなかつたか。」

女房の、陰氣にうなづくのを見ながら、

「コップで、もう一杯、水を　こぼれる

ほどお願いだ。

は、大丈夫だ、おつかあ、わしの身體に生首はつ
いて居ない。」

相良が、さみしく笑つて言つたほど、氣の弱さう
な女房は、筧から汲んだのを、おど／＼と盆にのせ
て來た。

「いや、ありがたう。」
受取つて、清水を冷く美味さうに、手に翳した時
である。

「わあ、合歡の花が水に映るだ。そら、蛇が居
る。」

金兵衛が威すと同時に、コップが相良の手を落ち
て、パシヤツと散つた、大きな欠片は、金魚にもな
らず土間を流れる。

「これ串戯も。」

「まあ、可い。」

と矢野は肱をついて居た洋杖の柄を、卓子の端へ
徐に掛けて、

「邪氣を拂つたのだと思へばいゝ。硝子の欠は、
合歡が散つたやうで綺麗ぢやないか。おかみさん。

私どもは氣をつけるが、踏んで怪我をする人があ
ると不可ない、あとで、よく掃除をしたまへ。濡れ
て居るから、其處は安心だよ。――處で運轉手
さんはビルがよからう。

いや、私が第一飲みたくなつた。

――おかみさん、先刻から機の音がすると思ふ
が、違ふかね。今時餘り聞く事はないんだが。」

「織機でございます、お喧しう存じます。」

「あゝ内の納戸かい。お媪さんかね。」

「旦那、おつかの妹で、いゝ新造だが、へい、出
戻りで苦勞をするだ。」

「お酌にも出ませんので、一向役に立ちません。」
と女房は帯の手拭の端を爪さぐる。

「無論だよ、出戻りの別嬪に酌をさせる事は、東京でも流行らない。」

つきもないことを、意味深さうにうつかり言つた。

「忙しい世の中だから、遊んで居るのを、じれつたがつて、やけに褌を取らうかの、料理茶屋待合の女中になりたいの
然うかと思へば、近所から、辨當持で、カフェーの女給に誘ふのなんぞがあつて困らせる。」

ふと心着いたやうに、聲が判然した。

「何しろ、運轉手さんにはビールだ。」

「え、飛んでもない。」

「自動車代を飲潰さうかと、阿母が心配したくらみだで、此の男はいくら飲んでも、へい。」

「また、馬鹿を——」

「金兵衛さんのお銚子のおかはりだ。」

何、いよいよ、酔つたら、三人で別の自動車を頼
まうと 土手から橋は歩いても構はない。
こゝは最う和倉の懐中へ入つて居る。

其處で、おかみさん、私には硝子盃で

榊もやるか、面白い。榊で一升 ー あとはお燗
にしておくれ。それから肴だが、さつき

から、其處の蜆が狙つてある。砂のないところが身
上だから、其の清涼な水で、摺鉢で、ごし／＼、お
手を煩はして、味噌汁です。並びに、鮎を鹽焼か。
皆 三人前たつぶりだよ。

ー 金兵衛さん、きみのやつてる、其の胡麻よ
ごし見たやうなものは何だい。」

「情ねえ、旦那。 ー 迷子 まづ、迷

子だね ー 大なのと、小いのと、へい、(迷
子やーい) に出て、内證飲みをやればとつて、へ
い、胡麻よごしはがんすめえてや。烏賊の生を細引
いて、其の墨で和へただよ。冬漬込むのが定規だべ
が、即席が又一倍でね。へい、わしちが方で、此奴

を、年増膾と言ふだね。

おつかの前もあ

るが。」

酒肴の施主がついて、金兵衛の意氣頗る昂り、

「むつ／＼と仇白ツけえ肉へ、おはぐるをべつとりだで——密通をした奥さまの胸中を、もぐるみ膾で食ふだよ。」

相良は雲がかゝつたやうに、又眉を暗くして、

「何しろ 氣が濟みません。私は行つて

参ります。」

「まあ、落着くが可い、心配をしないで、其の

生首ならばだ、一寸私が引受けよう。」

金兵衛が、きよろんとして、

「もの、葬つてやらつしやるかね。」

「何を。」

「はあ、烏賊の頭の事かね、生首といはつしやるは。あの陣笠見たやうな處は、齒切れが

して、こり／＼と、うまいものだ。」

矢野は聞き棄てに、笑ひを含んで、

「運轉手さんも、では、其の年増臈か。」

「え、眞平。」

「土手の首が氣になるかい。」

「それとは違ひます。――はあ、頂くなら、其のすみ烏賊の心太突と云ふ奴で、刺身を長めに皿に装上げて、箸に吸つく處を、噛みながら、ビールをぐツぐツ。こんなご馳走はありませんや。」

「これも強兵だな。――おかみさん、註文は分りましたね、可、肴は揃つた。さあ可いから、お掛け。――飲まうよ。」

と、枘の口を一息で、

「お、久しぶりだ。」

と肩を斜めに、

「さてお二人。しみつたのだが、大じん

でもないものが、唯ご馳走をするのを怪しんでは不可い。安直に驕つて置いて、私が聊か學者がらうと言ふ野心がある。深い研究でも何でもない。

しかし、私のやうなものでも、友だちに、高い趣

味で、其の深い研究をした博識があつて、其の人から教はつた、近頃仕入れたばかりの見聞なんだか、狙つた、かるた、一枚が、よみ手の歌にぶつかつた氣がするよ。」

矢野は莞爾した。

「――運轉手さん、きみは、女の生首を、ごくもんだ、と言つたつけ。矢張り　可厭な言だが、梟木とか　繪に描いた、あんなものの上のつて居たかね。」

「いゝえ違ひます、それは。」

蛇の影の映らないビルは、ゴツ／＼と快く咽喉を動いて通る。

「兩方に　柄ですか、細い木が立つて、根に臺がついて、上にも一本渡つて居ました。」

こんな家業をします所爲か、迅い處で確かに見て、よく認めたと自分でも存じますが、其の眞中に白い顔がみだれ髪で曝してあるんでして。」

「一寸、衣桁と云ふ形ではなかつたかね。」
「え、然う、然うです、然うですよ。」

「田鶴ヶ濱は板戸、障子、雨戸、扉、建具の産地で、軒並だつけ。廣く諸國へ版賣をするんだらうね。」

「この筋ばかりぢやありません、京大阪から、出羽奥州まで、むかしから船の便があるのでして。」

「引越車のやうに、高々と其の建具を積んだ馬に、今日も山路で出會つたよ。彼處で、衣桁は出来るだらう、何うだらう？」

「さあ？何うだね、おぢい。」
「餘り見掛けはしねえだがね、工手間むきだで、出来ねえ事がありますめえで、塗は輪島で言分はねえだ。」

「座敷向きには及ばない。たゞ形だけだとすると、屹と早手間で出来ようと思ふ。」

「勿論です。」

「で、見たのは

白木だね。」

「然も新しいやうでした。」

「可、うけ賣で、學問を見せつけよう。生首だの何の、と飛でもない！――それは、ある、御神體だよ。姫神のお姿　もしくは其のお姿のうつつだよ。」

しかし驚いたのは運轉手さんばかりではない。いまどほりはなくつても――合歡の花の簪した、亂れ髪の影で、水際が眞黒に、湖の中は騒動さ。洲ばしりの緋の二才、慌てももの黝かいつに、鮎などが、藻に口をあけ、蘆から目を揚げ、青くなつたり、赤くなつたり、枝から落ちた蛙も交つて、鯰は鬚を萎して黄色くなつて居るだらう。

矢野の顔を、みな、みんなが見た。

「言ふまでもないが、生首か、其の白い顔は、造りものです。」

「蛇が居たと言ふんだね、それは居たらう。」

今の時節だから、合歡の樹へ這はないとは限らない。續いて其の顔を覗かないとも限らない。

しかし首を捲いて居たと思つたのは、それは布だ。

首を包んだ彩布で、風に煽つて居たかも知れない。

「切だ、布だと一口にいふものの、それは扱

ふもの 神を扱ふは少々失禮だけれど、も

し並木の間に飾つた、とすれば、それは扱ふと言ひ

たい。事ゆる 或は使ふものか。要するに

奉仕するものの心ごころで、綾錦もあらうし、紗綾

縮緬もあらうと思ふが

どつち道、つかはしめと言ふものにも、威と徳を

顯はすために擬へる動植物の中にも、その姫神に附

随した蛇はない筈だ。けれども、場合によつて、神

體を守護するなり、われら凡夫を驚かすなり、臨機

の方便によつて、如何なるもの、どんな形を現形さ

るか、それは一寸分らない。

唯女の顔が白木に載り、蛇が絡ふと言へば凄し、
不氣味だし、何よりも先に、情なく、あさましい。

が、論は要らない。蛇そのものが直ちに
一類の神である場合はいくらかもある。二荒山、赤城
にもあるし、いまの能登の舳倉島だらうと思ふ、猫
島にも、十餘丈の百足と、一抱に餘る大蛇と戦つた
話がある。別に、狐は勿論だらう。其のほかにも、
いくらかもある。

何しろ、神となれば、奉信するものは、必ず頂禮
しなければなるまいに、それを堤防道の並木へ曝す
——曝すと言つては禮を失するかも知れないけ
れども、運轉手さんが一目見て、生首だ、ごくもん
だ、梟木に架かつて居ると、一度でも思つたとすれ
ば、——曝すと言はれても仕方があるまい。

しかし、考へるまでもない、直ぐ分る、西洋でも
基督は、何う言ふ像、何ういふ畫を拜むか、言はず
ともだらう。信ずると、信じないと、それは又別問
題だ。

現げんに、運轉うんでん手しゆさんの話はなした、地藏ぢざう菩薩ぼさつを見みたまへ。
殆ほとんど到いたる處ところ、山やまにも、谷たににも、町まち、村むら里さと、寺てらにも、
墓はかにも、そこら路傍ろばうにも立たつて居をられない處ところはない。
勿もつ體たいないが、中なかには手足てあしのもげたの、片類かたほそげたり、
甚はなしきは頭つむりの缺かけたのさへあつて、誰だれも不思議ふしぎとは
し
ないではないか。

「姿すがたの怪あやしく見みえたのは、此方こつちの目めで、神かみを
白楊樹ボブラの並木なみきへ据すゑたのは、誰だれか事つかふるものが心こころあ
つての所業しわざだらう。此この場合ばあひ、私わたしの想おもふ姫神ひめがみが、嬋せん
妍けん窈えう窕てうたる
「

榭ますが利きいた。もう銚子てうしが來きて居ゐる。

「其その面影おもかげを、自みづから、合歡ねむの花はなの中なかへ、ほのか
に顯あらはされた、とまでは言いはないが。」
矢立やたてを腰こしに、ぐいとさした。

「金きんおぢい。」
椅子いすから腰こしの離はなれ工合ぐあひが、一段いちだんと見事みごとであつた。

「何處へ行くよ。」

「ちよツくら、へい、其のさ、お顔に對面だ。」

「正體を見届けべし。」

「此奴、生首だと言つた時は、中尉殿の夫人が切られたと、自分で言ふ癖に、腰が立たなかつたではないか。」

運轉手が、隣の卓子を叩いて言つた。

「何ちゆうだ、影法師ばかりの長蟲にさ吃驚して、コツプをばらにしたではねえか。腰が立たねえではない、酒がじわくりと留めたゞよ。私もこれ、朝から暇つぶしで、（迷子の迷子）を遣つてるだ。」

旦那様の馳走で、盆と正月、一時の此の鹽梅では、もの、これ日が暮れべし。何か一種とこつさ握つて歸らねえでは、弘法様にも言譯がねえで、やつらさと出向いての、對手とものによつては、其の別嬪の神様さ、引抱へて持つて來るだよ、いや、おんなばきあ

「あれ、勿體ない。」
と女房が、鮎の香の裡で。

「まあ、待て、待て。」

矢野が、金兵衛の立つのを留めた。其の手には銚子が三十度に傾いて、

「一つ行かう、さあ肴が来た。其の清

水なら、鰈、鯛などあらひも好からう、迫々皆に出しておくれ。處で、其の姿には、無暗と手を着けないのが可からうと思ふ。神の威を借りて

怯かすわけではないが、こゝは、もの識ぶりの私に手柄をさしてくれないか。其のためのご馳走だ。！

「都合によれば」衣桁に飾つたやうな
其の姿を、片づける
と云つては、姫頭に

對して過激だが、折疊みして納める法も心得て居ない事はない。

聞きたまへ。――

私の想像があやまらなければ、不思議な其神は、
出羽奥州一體、南部、津輕、秋田、一の戸、八の戸

に到るまで、在々所々、秘密に――しかし秘密と云つて、禁を犯すのでも何でもない。が、祭るものが内證にするから、一宇の殿堂も社閣もない、板屋茅屋のすゝきとともに、草に隠れ、森に忍んで居らるゝと言ふのだが。

オシラ神、お白神と云ふんだよ。通例は――雄素、麻、また芋の麻白、絃の絃白とも、文字には顯はして、其の一例づゝに、いろ／＼な解釋があるのだと聞いて居る。が今は唯必要なのだけを抽いて饒舌らうと思ふ。い 恚ういふのは、説くので解するのでもなく、唯饒舌るんだね。

と軽く猪口を取つた。運轉手の皿には、烏賊の心太づきが、箸に従つて、速かに餐却さるゝこと一寸二寸三寸である。

「七重、八重、十襲、二十襲、その上にも、布なり絹なり包んである。其の神體をあからさまにいふのも如何とは思ふが、學者が學問のために見たのを

教へられたのだから、其のまゝに話すがね。一口にいへば、木を削つて、目鼻を描いたやうな純樸なものださうで、それに、いま言つた通り幾重にも衣をかさねて、見ると、頭から裾まで唯深々と被衣を被いだ姿で、頭、面の方が少しわかるやうに、然も秘すやうに、頸の處が、綿を包んだきれいな紐で結へてある。――男なら兜の緒と云ふ形だ。

其の被衣なり、裳には、いま言つた通り、大和、唐の錦、蝦夷錦、綾織、浮織、牡丹、櫻の花を装つたのもあるさうだが、一々見たわけではない。もとが秘密の姿だし、然ういふ中には、またどんな精妙巧緻の、筆なり刀なり、端嚴、典麗な妙相があらうも知れない。

もと／＼雄神雌神二柱で、烏帽子頭、姫頭――と云ふわけは、此のかみに、馬の首のと、鳥の首のとが別にある。いづれも雌雄一對です。

鳥の頭はまだしもだ、並木にかゝつたのが、大きな馬の首の正面でも、樹の上に衣服を着て、衝立は

どに立つて、居たら、運轉手さん、それでも相當に驚いたらう。」

「ほう。」

と言ふ息の下に、ビルが音もなく口へ消える。

金兵衛は、馬に似ぬ首を左右に振つた。

「私が此の事を聞いたのは——實は先にも一寸言つた、篤學博識の博士で、邦村柳郷さんと云ふ、其の人の邸へ、縁があつて、奥の一ヶ所。八の戸のある舊家から、神巫——いや、巫女が随伴して上つた姫神は、靈活、鋭敏、俊捷で——邦村氏の令嬢が、ピアノを弾くと、大な藏づくりに成つて居る、萬巻の書棚の中の、居所で、舞を舞ふリリリーンと、幽玄な鈴の音が聞こえるんださうだよ。男神に三つ、女神に四つ、黄金もあらうし、銀もあらうし、其の頸り紐に鈴をつけるのが爲來りになつて居る。それが、人氣の些ともない、眞暗な書齋——と云つて、殆ど文庫藏のやうな裡で、鳴るんだね。ピアノを弾くと——チリリリ、リンと、また馳廻るやうな音がする。」

令嬢が然ういふもんだから、家の人たちも、電燈を點けて檢べて見たが、姫頭のお白神には、觸るものも何にもない。軒に吊るし、風を故と受ける、ふうりんも、調子が悪いとなか／＼音のするもんぢやない。西洋館だし、大切な書物を積んだ處だから、鼠の防ぎは、最も嚴重につけてある。は

じめ二三度は、若い令嬢のことだ、氣のせみだらうと濟まして居たんださうだが、一晚十時頃に、お父さんの柳郷さんが家へ歸つたことがある

郊外で砧村と云ふ閑靜な處だ。―― おかみさん、

機はいゝ音がするね。」

杯を靜に置いた。

「樹蔭に窓あかりが映して、令嬢のピアノが聞えて居た。お父さんとしては、一寸、一步立停らうではないか。人情だよ。パツと電燈が消えると、」

二人は慌てて申合はせたやうに掌で眼を拭つた。

「令嬢の跽音が、急に起つて、隣室で消えたから、

何事だらうと、急いで入ると、令嬢は、お母さんの膝に縋つてゐて――今夜はお白様が窓を覗いた――といふんです。鈴の音が餘り近いから振り向いて見たら――といふんださうだ。

何は措いても、刺戟が強く、神經を昂らせるは悪い。で、絹に包んで筐を深く、今は納めてあるといふんだよ。

尤も、此神の出處の、八の戸の舊家には、百體以上、二百年來の古い姿もあるさうだが、人勝手に、場所を移すわけには行かないから、巫女のように掛けて、一々神意を窺ふと、いづれも東京ゆきは承知がない、斷られた。その中に、一番若く、大正のはじめ頃に出來た其の姫だけが、

(參るよ。)

と言はれたさうです。その位活潑なんだから、邦村の令嬢が、其の後筐に向つて、いまに佛蘭西へ行きますが、ご一所に如何と言ふと、あり／＼と夢枕で、

(參らうよ。)

しかし、百體に餘つて、皆東京へ出るのを嫌つた
と言ふ、もともと隠約、秘遊の神で、村里にあつて、
蠶の守、田のみのり、家運長久、子孫繁昌、従つて、
男女のかたらひ、また火防の神です。これをよそへ
運ぶのは、多くは巫女で、祈祷にも、うらなひにも、
例の口よせにも、まじなひにも、利益に授け奇蹟を
示す 其の奉仕して諸國をめぐるもの
中には、むかしの傀儡師、人形 使があり、尚ほ、
其むかしは、唯、手にして神の徳を語つたのが、綾
となり、からくりとなり、やがて、人形が芝居にな
り、語るのが淨瑠璃になつた。 ー 舞、謠、歌
舞伎のはじまりにも關係があるんださうだ。

（讀まるゝ方は、こゝにて、安場嘉傳次の飴屋芝
居に一顧をたまはれ。）

てる／＼坊さん杓子神 ー いまこゝでやつて
見ても可い、箸をまはして ー べろ／＼の神さ
んは ー と言ふ卑俗なものにも縁があつて、其箸
に目鼻をつければ、すぐにお白神の分體にならうも
知れない。然ういふ時は ー づぼんぼ、つほん

ぼ、つぼんぼや　ー　團扇で煽ぐ化入道は、其の
神に對する、惡魔かも知れません。

卑俗なのがある　ー　同時に崇嚴微妙なのが必
ずある。繪も、芝居も皆同じだ。

では、お白神の本地本領は、と言ふと、またいろ
／＼説がある、が私の從ひたいのは、すぐ其處に

「

「え、」

「えゝ。」

二人は聲を合はせた。

「雲が晴れば、仰がれる白山の姫神、白山の女
體權現であられようと考へる。」

紫の桑

「その靈徳を傳ふるために、白山權現、こゝには
姫神と言ひたい。其の姿を奉じて、むかし、出羽、
奥州へ傳教、布道したものがあらうと思ふ。それは、
烏帽子素袍であつたか、袴、紋服であつたか、或は
兜巾すゞかけか、女性なれば、練衣に紅い袴であつ
たか、尼に似たか、當今の彼の地の巫女のやうか、
其處までは私は知らない。唯、口すぎの
ため、たつきのためとすれば、一般のお札くばり、
諸國遍歴の事觸れ、――下つて猿廻しも、萬歳
も、もとは厩なり、臺所なり、お札を配つて歩いた
のださうだがね。――ひとへに姫神の道を拓くも
のには、素より、達識の士、優雅の婦人もあつたに
相違ない。」
それとしてだ。」

銚子もビールも揃つて又並ぶ。

「京大阪、九州の方へは行かないで、なぜこれ

が奥州へ入つたかと言へば、京阪は眞宗の根城が固つて居る。それに、熊野新宮の靈、八幡宮の威が廣大だ。そこへ行くと奥羽は僻遠の地だから、阿武隈川の埋木も、埋れて後は、十村五郡を蔽ふほどの桑の幹、栗の枝がないから、幣束の立つ處は何處にもあつた。第一交通が頻繁だつた。――

一體、此の邊の人物には、歴史で地上に顯はれた英雄よりも、海を航した隠れた豪傑が多いかも知れない。これも此の頃、漸と知つたが、新しく仕入れただけ覺えて居る。

津輕藩へ入込んだ、いまなら輸入品だね、
物品を――勘定所調べた記録がある。

一、輪島塗物、膳椀、家具の類、――一千一
兩餘、文政の末頃だぜ。」

「輪島塗もの
むかしの金子で千一兩あまり、へへッ。」

酔眼を伏せて拜むが如く、兩手で頂いた金兵衛が、手を翻して矢立から筆を抜き、懷中から、折込んだ土地の新聞と――人捜しのたよりにも心得たらう――一所に、半紙を取つて、

「へへツ、成程。」

「それには、會津塗も交つて居た。其のつもりで――可かい。金米糠、生姜糖、薩摩

芋、橙、串柿類、瀬戸もの類人形、張抜面、ピツピ、ガラガラと、可いかい、これを、お勘定所で、恐怖い顔の役人が、袴で、鯨子張つて、帳面に控へたかと思ふと、

――江戸時分、歴乎としたお旗本の老人が、駕籠の中で、孫の土産に買った、ひよつとこの面に、歸つてすぐに喜ばせようと懷中紙をよつた紐をつけて、頭を縦にふり、横に傾けて、被具合を見て居る處へ――なにがし殿――知合の歴々が通つて、向うで會釋の駕籠の戸が開いたので、此方も戸を開けた、御老人、はずす間がない、又ツと出して挨拶をした顔が、其のひよつとこの面。いやはや

その時は、と云ふ話に似て、餘程をかし
い、尤も、洋服でやつても同じかも知れないがね。

――越前鎌、和倉鎌
こゝの名産と見

えるね。合せて此が五百兩。越中、鍋釜の類。これ
は和倉に關係なしか。蠟燭、鬢附、これは會津らし
いが、――桐油、菅笠、加賀蓑の類で、七百兩
は大きいだらう。惜い事に、田鶴ヶ濱の建具はかい
てなかつた、が、皆船だ。場所によつては、すぐ其
の堤防下からでも積んで出る。大日本海を洋々と遙
に奥州へ浮ぶんです、松前へ乗切るです。

其の船の中に、山伏か、紅い袴が、白帆の鷗、舷
の不知火のやうにまじつて、白山の姫神を渡し申し
たとする。

隨伴のものの遇不遇、幸不幸、それ／＼によつ
て、形代も、それ／＼に變られたであらう。また
お釋迦様相傳の佛菩薩も、海を渡られてよりは、時
と場合と教によつて、いろ／＼に像がかはる

とおなじやうに、星うつり、ものかはるとか云

ふ間には、本地白山のお白神にも、いろ／＼のろの相がまじつて、おしろ佛、うしろ佛と、云つて、怪しきつきものの形となり、樺皮佛、掛佛となつて、内證 念佛の秘像となり、桑の木人形のあやつりともなり、桑の木地藏となつて、惡趣に出現、――
いやこれは益々名爛だ。
杯を煽つて言つた。

「實は、おしら神を削るのは、畝の東西に、枝の向合つた紫桑、――紫の色の桑の枝でなければ成らないとしてある。ために桑の木地藏の名も起つたらしい、丈も二尺五寸と云ふけれども、さうは極つて居ない。かはつた姿のもいろ／＼あつて、――
いま運轉手さんが並木で驚いた、――衣桁に頭ののつたのは、松前の阿呼寺に一體あるのと同じ姿だ。しかも阿呼寺のは、最近、西洋人が発見したと言ふんだよ。

しかし、其の阿呼寺で発見したのは、小さなもので、臺――元來は持つ柄なんだが――其の衣桁の形の――高さが八寸ばかり、黒塗で金の

金具が打つてあるさうだ。だから合歡の蔭の女の顔は、きみたちも鼻肩だらう、活動映畫の、あの大映しだと思へばいゝ。

此の衣桁形のは、實際珍しいものらしい。殆ど凡てが、柄に面頭のあるものだから。けれども既に町へ出て、街道の並木へ顯はれよう、現はさうとするのだから、中でも目に立つ形を撰んだ、と思へば不思議はない。

要するに、佛蘭西へなりとも、一所に（参らうよ。）と言ふ活発な神があるやうに、何百何千、出羽奥州に存在するお白神の中に、姫神が一體。もとの白山の麓へ歸らう、歸つて装束を更めよう。或は新に威徳を標さうと、よいか、夢枕か、其の意を人間に通じられたのがあつて、誰かが奉仕して、奥筋から上つたのぢやあないかと思ふんだ。

坊主の説教ではないけれども、豫言者は故郷に容れられずぢやあない。白山の靈威は、加賀、越前、飛騨、美濃、越中に、巍然としていよ／＼高く、天

に白く、紫の脈を打つて、輝いて居るのだから。

けれども、いま現に、此の白濱に顯はれた、奉仕のものは、誰か知らん、姫神を啓示の適不適、よしわるしは、それは如何か分らない。

些と堅くなつたね。魴はまだ暖い。」

ほろりと肉を離した箸を、半ばで控へて、

「いや、些と饒舌るのには憚りがある。お白神の知識どころか、此の能登にさへ、昨日今日の旅人の分際として、姫神の神意を知つたかぶりは矢禮だ。

が、修験か、行者か、神巫か、巫女か、——この邊で神を扱ふ　いや、顯はさうとして居るものについては、少し想像のつく事がある。——ために、正體を見もしないで、並木の生首に知つたかぶりもしたわけなんだ。　金兵衛さん、

鴻仙館には、三階、　四階があるね。」

呼掛けられた金兵衛は、輪島塗の一千兩、加賀蓑

の五百兩の、書おぼえに見惚れながら、ほか／＼と、おなじく鮎ニを筆つた處、その片身を引攪つて、猫が四階へ驅上つたやうに、吃驚して、

「えゝツ、ある、ある、あるだ。へ

い。」

「不斷使はない、餘り上りおりをしないらしい

」

「棟の尖端が塔になつて居りますよ。旦那、よく晴れると、其處の白橋からも――其の何ですか、パイノ、ガラノのやうに見えます。」

と運轉手が、かながきの註を入れた。

「停車場を些と乗出すと、もう見えるだね。――

あの白い髯の爺さの又父親が、若い時血氣もんで、へい、共同湯の塔より先に押立てたゞが、餘まり高えで、空を往來の天狗様が嫌はつしやる。魔が魅すで、めつたに、へい、使ひましねえ。」

「魔も魅すだらう。私は、あの階子段で變なものを見たんだ。」

「や、大い顔のね、婦の、青い。」

「あ！」

蜆を洗つて居た女房が、濡手の震で、ハツと寄つて、

「可恐うございます。」

「怯すな、金おぢい。」

「おかみさん、そんなに、洗はずとも、もう可からう。
大丈夫だ。」

「はい、お汁は、もう煮立つて居ります。」

「また飲めるな。」

「あの、壇の、途中で折曲つた上に、小さな窓がある、見ると、温泉の廓の廣場に、石の井戸がある。其の井戸を取巻いて、三人の婦が覗いて居たんだ。」

それがね。」

矢野は、椅子を寄せ、巻蓑を深く吸つて、杯を休めつゝ、

「妙なのは、階子段の欄干さ。――黒ぴかりになつて居るが、節だらけの百日紅の樹が畝つたまゝに使つてある。

餘計な穿鑿立をするんぢやあないけれども、其の百日紅を樹なりに使ふために、故と折曲げたかと思ふやうに、段が急で、突當つて、もう一階上る處が、足休みの板敷で、圍んだ壁の下が戸のない押入。また深く廣く出來て居て、塗枕、角行燈が入れてある。入れてあるに仔細はないがね、薄暗い處だし、宿屋の三階の途中だ。や、隠座敷があつて、女が寝て居る、と思つたよ。」

「夜中だかね、旦那。」

「まだ朝の間さ。」

「串戯こに魂消さしてはいけましねえ。場所が、よくねえで、眞個に、魔ものでも寝て居たかと思つた。宿屋家業で、いけえ事、古い枕の使はねえのがあるだがね、何度か、お客様の頭のついたもんだ。棄てるも、流すも勿體ねえだで、あすこへ並べて置きますだよ。」

「ご奇特です。成程、すか

してよく見ると、おなじやうな古行燈が二三十、女枕がその間に並んで六七十もあつたらう。だしぬけに暗い處で、然う揃つたのを見ると、すや／＼寢息でも聞こえさうだし、ほんとうに、日の光を嫌ふ弱い病人か、幽霊でも逗留して、寢てゐさうで、餘り氣味のいゝもんぢやあないよ。

其處へ、この頭を突出した。我ながら

餘り見状がよくなかつた。が、何のために、夜這が天井を探すやうに、用もない三階へあがつたらう、言譯をするんぢやないが、驚くな、驚くな、金兵衛!

おぢいはもとより、運轉手まで、先づ其の語調に驚いた目をニると、矢野は笑ひながら、眉を顰めて、

「梅か、あの廊下へ狸が出るぞ。金兵衛、斷つて置いたから、驚かずに、まあ、お聞き - - 狸も

古狸の大狸の牝狸だ。呆れた事には、私が泊つた

――其の晩から忽ち顯はれた。知つ

てるだらう。あの晩、良寛と、良勘、坊

さんと按摩の間違ひがあつた。あの後すぐだよ。障

子の外から、異に仇な年増の聲で、

「長太居るか。」

「居るは何ぢや。」

金兵衛が響きに應じた。

運轉手も高聲で、

「は、は、は。――七年さきの夫の敵。」

此家のおつかあに頼みたい、正のものです。」

「あれ、山から黒犬が駈込みました、――氣

味が悪うございます。」

畑の方で、犬が鳴いて、機の音が一寸留まつた。

「すなはち、狸は遁げますな。」

「飛だ串戯もんで居さつしやるだ、おら、へい、海から大狸が出たかと思へば、むかしはなしを、ようご存じだ。旦那は何處で、其の話を聞か

しつけか。」

「いや、一番で聞いたよ、眞面目にさ。だしぬけに一度、――長太居るか、――と呼んで、それから、バグン、パタン、あの長い廊下を、中庭を廻り廻り、やつて来て、すぐ障子越しに聲を掛ける。眞個だぜ、串戯ぢやあない。」

次第次第に、つい釣り込まれて、此方でも、――居るは何ぢや、――とうけ答へをしたと思つてもらほう。紅い唇で舐めるやうに笑つて笑つたと思ふと、ふいと居なくなる。

――今度は驚いた。少時すると、中庭彼方の、遠くの方の、廊下でなしに、高い處から、トーン、トーンと降りて来る。それが、あの三階なんだ。」

仰向いて聞く金兵衛の鼻の穴がすぼんで、可笑い。

「何だか、其處へ飛出すのは、敵、――まあ、

狸たぬきとして置く、
狸たぬきの術中じゆうちゆうに陥おちいるやうな氣きがする。按摩あんまの間違まちがひがあつたあとで、また、どんな事ことで、帳場ちやうばを騒さわがせないものでもない、もうそちこち眞夜中まよなかだ。

が、出でたり、消きえたり、高たかい處ところから降ふつて來きたりされたんでは、氣きになつて寢ねられなからう。――人間の智恵にんげんちゑと言いふものも待まつておくれ、私わたしの智恵ちゑと云いふものも、こゝになると小ちひさなもので、だらしのなさは、障子しやうじの穴あなです。まさか唾つばでは遣やらなかつたが、――あの釘くぎで用心ようじんをしてくれた、廊下らうかの障子しやうじへ穴あなを開あけた。

開あけるとだね。

(おや穴あなを開あけたよ。)

すぐ、其その障子しやうじで、言いふぢやあないか。――

「旦那だんな、眞個まったくで。」

と運轉手うんでんしゆの乗出のりだす傍かたはらに、金兵衛きんべゑは、犬いぬでも潜くゞつたやうに、卓子テーブルの下したを、きよる／＼と見廻みまはした。

「嘘なものか、それ處ぢやあない。」

（人間の智慧と云ふものも、小さなものだね、障子の穴ほどだよ。）

狸の假聲を使ふ奴もないもんだが、氣を悟つたやうに、此方の思ふことを、婦の聲さ。これにはまゐつた、冷汗が出た、――お剩にもの言ひツぷりが、一人きりぢやあない、誰か、何か、まだ居さうだと思ふと、果してです。

（塞いでお遣りよ、知恵の目を。）

舌も翻さず、掌を返すが如しさ、パツと其の穴が隠れたんだ、――白くなつて。もう勝手にしたがいと、寢床へ、どしん、音をさして、打倒れると、今度は聲音が二つになつて、小刻なものと、はなのと、かけ構ひなく音をさして、スツと遠くなつて、階子段を、段々に高く上つて、フツと消えた。

「窓から抜けたぞかね。」
と金兵衛は拳を握つて堅くなる。

「抜けたとすればだ、其の見當は、ちやうど、あの行燈、枕棚の上の窓の見常にあたる。――其處から――井戸を覗く三人の婦の姿を見たんだ。

「――が、まあお待ち
金兵衛さん、あの三階に客は居まいね。」

「居ましねえとも、へい。めつたに使はねえ處だ、雨戸も閉切りの時が多いでね。早い頃は、年に二三度、高い聲では言はれましねえが、ばくちに使つたぞ、いゝ衆の旦那方が。勝負事だ。

「氣さ荒くなつて
三階でやると、屹と金だかゞ大くなるとつて好まつしやる癖に、そのたんび、喧嘩さ起かつて、血さ流した事もあるもんだで。それと、へい、春秋二季に、北國筋の道具屋の衆が大勢で、いくら、いくら、そりや、いくら
ぢやあ、ぢや、ぢやあ。」

と兩手が漸と陽氣に弾けて、

「大糶をやつたもんだてば。――それも、へい、間違ひで、怪我人が出来たでがすでね、此頃ぢや、ほつても使はねえで置くだがね。はて、何うも魂消たこんだ。飛んで歸つて、一つ調べねばちつて、これ、一人では飛べねえだが。」

「この上、おぢいに宙を飛ばれて堪まるものか、飛べば片手に徳利で、團扇で雲を煽ぐだらう。」

「こゝは、串戯ごとでねえ。おれがで行かずば、町の、へい、青年團の衆の手を借りての。」

「いや、然う騒がれては困るよ。本来ならすぐ翌朝にも其の話をする處だつたが、いきなり饒舌るのでは、お隣づから、此方も狂れて居ると思はれようし、それに、鴻仙館に祟りも、こだはりもあるのではなく、私が、からかはれて居るらしいんだから、誰にも何にも言はなかつた。が、來なり早々馬鹿にされた形があるので聊か癢だ。」

手を擧げると、銚子のかはるのを、もう女房心

得た。

「一風呂浴て、海を見はらしながら、朝飯を済ますと、氣のさつぱりした處で、尚ほをかしいが、朝鳶といふものにばけて、廊下を歩行き出したんだがね。スリツパだから音はしない。が、何うもあるき方が夜半の跽音の運び工合に似たやうで馬鹿な心持さ。それほど耳について離れない。」

何だか、軍人さんの座敷の前は、ぶら／＼用もないに歩行きにくい氣がするから、座敷の前を眞直ぐに、中庭の向う廊下を突當つて、もう一つ曲らうとすると、可厭に暗い、其處に三階の段があつた。

あゝこれだ。狸が鶉越をやつたのは――

軍人さんの座敷へ通ひをするのだらう。お巳代かね、あの女中でないのが、帳場の方から上つて來た。

「お客があるのかい。」と上を指すと、氣もないやうに、「いゝえ、」と言ふ。これは、然うありさうな事だね、いま聞いた様子でも。――
勿論釘のさゝつて居る場所ではないから、構はず踏

掛けたんだが、段が急で、欄干へつかまらないと、足許が危かしい、それが例の百日紅と来て居る。で、猿の枕の波に辻つて、行燈に助船か、のつけに怯かされたと言つてもいゝなあ。

板敷へ立つと、捻曲つたやうに、もう一段階がある。足場は悪し、それに、成程閉つて居たらう、薄明はさすが暗いから、さすがに、うっかり上れなかつた。

目の前に――立つた胸ぐらゐに小窓が見える。閉つては居たが、私の座敷からすると、横へ正面で、まるで變つた海の景色が見えさうだから、一枚開けると、硝子戸でね。眞向うの海へ海豚が縦に揃つたかと思ふ、長く突出た波止場のほかには、その時は、何にも目にはつかないで――唯、井戸を繞つた三人の婦――三星と云ふ形です。」

矢野は、猪口と煙草を左右へ、一方は、指で卓子を手でくぎりながら、すぐ次へ、

「一人は高島田で、濃い黄薔薇色に臙脂をぼかして、瑠璃鳥でもあらうと思ふ、飛模様の袷か、単衣に萌黄の帯 派手なものです。――一人は、ワンだか、ツウピイスだか、緑色のドレスで、銀鼠でもあるだらう、きら／＼する靴たびを膝の上まで、で、リンネルか――靴だ。断髪ぢやもない、耳隠しとか云ふのらしい、が、何故か帽子は被らなかつた。

中に一人、白い姿、勿論羽二重らしい、が、白い姿で、何もなしに、切袴とか云ふのだらう、が、肉に大口でも穿いたかと思ふ、腰つきの凜とした、紅の鮮麗な袴を穿いて、豊にさげ髪を垂れたのがある。

「――それだよ、金兵衛さん――あとで、軍人の漕いだポオトと行合つた船の舳に、端然として居た、あの姿は――」

「はてね、旦那、何うも、へい、夢ではねえかね。」

「夢のやうだよ。白衣に紅い袴といへば、別に何の不思議もないが、だしぬけに温泉の廓を、高い窓から見たのがそれだ。人間の智慧だけの障子の穴から覗いた氣がする。その穴は、朝見ると、もとの通りあいて居たんだがね。――謹んで思ふと、雲から降りて来たやうだし、慌てて見ると、鶴が仰向けに飛ぶやうです。

みんな容子が妙齡らしい。けれども、遠いし、横向きだの、うしろ向きだの、第一、巫子でもなくて、今時そんな風俗の、それが姿といひ、容色といひ、づつと立勝る、と思ふのが、正面の癖に、あと二人より、うつむけに深く井戸を覗いて、頸が長い、と思ふほどさ。

波止場の尖に風があつて、根を壓へた大巖にしぶきは立つが、髪も靡かず、裾も動かず、――底に龍宮の影か、其の女たちの運命でも映つて見えさうに、熟と取圍んで居る石の井戸側の方が、却つて、ぐら／＼と動くやうで、打つて敵る海に従つて、此方の足が妙に揺れる。

場所は一體、和倉なのか、何處か、遠い島の面影か、前世の幻か、と自分ながら怪しくなると、三人の婦が一齊に私を見た。サ、何處を見たか、そんな氣がして、覗いたのが恥かしく、足許へ目を伏せると、下の段が井戸に見えて、深く、じり／＼と引込みさうで、つかまつた百日紅の欄干に、紅い影が映り、突き透しに庭の躑躅が底に燃えた。

それほどに、紅色の袴が目に着いた。

— —

横川

――

柏原

「やあ、いゝ鹽梅だ、すいてる、すいてる。」
細面で色白の少年が、三等の座席をトンとたゝいて、

「こゝへお掛け、姉さん。此の急行は、割にいつもすいてるツて會社で聞いたが、眞個だね。――それから此方側は、直江津で夜があける頃から、一目に海が見齏らされるさうだ、親不知、子不知、なんぞ、名高い所を通るんだよ。羨ましいなあ。」

「可厭だ、あたし、そんな所。」

上野の山を背にして、黄と紫びろろの、にこくの緒の兩ぐりに、佐野屋の白足袋。もう道中の氣に、襦はづれも引緊つて、裾をきりりと、藤紫のコオトで、まだ立つたまゝ、睫毛を伏せたのは、お李枝である。

力二郎と云ふこの弟は、會社員だから、ネクタイを氣にして一寸モダンで出さうな處を、紺紵に兵

子帯で、繕つた様子もない。

「可厭だつて、其處を通らないぢやあ行けないぢやないか。」

「では、其處だけ横を向いて、目をつむつて行くからいゝ。」

「何だい、内ぢや、碓氷峠で雲助が出る、と云つて怯したら、三個つまんで袂へ入れる、と言つた癖に――さあ、鞆は網棚へ、こゝだよ。可いかい、バスケットは、傍へ置くがね、籠んで來たら下へおろすんだよ。それこれを公德と云ふ、お分りになりますか。」

「知つてますよ、そんな事。」

「もう、ぢきだ。さあ端正と掛けて。」

「あんちゃん。」

と腰を淺く、パツチリ清い瞳で見上げて、

「切符は赤いの。」

「聞こえるよ。」
と低聲で、たしなめて、力二郎は麥稈帽の新しいので車内を又見廻した。それでも、七分は乗つてゐる。

「女の一人旅はね、姉さん、これが賑やかでいゝんです、——安全なんだよ。ね、」

もつと低聲で、
「しかし、成りたけだね、誰とも口をきかないで。」

片頬を静めて打頷く。
やさしい鬢も重たげである。

「どんな事でも、用があつたら給仕さんに言ふですよ。でなけりや車掌さんに。」

旅行案内の折目を開いて、心得た萬年筆で、軽く
敲いて、

「このしるしをつけた處が、辨當、お茶——」

姉さんが好きな鮓がある。鮓ぱんは廣告を遠慮しようか。小山の鰻は線路が違つて、お氣の毒様。

あゝ然うだ。高崎でも賣るツてね、初端が五加棒でござんすから、そのつもりで、はゝはゝ。」

「いゝことよ、澤山。」

「それから、この四角な記符が電信を扱ふ驛だから——ねえ、姉さん。」

「えゝ。」

「僕は思ふんだがね、をばさんと先生あてに、やつぱり電報を出した方がよくはないかね、さうすりや、すぐ此處で、ウナ電で打つて置く」

「あゝそれはよして頂戴。」

と、姉らしい分別を見せて、

「温泉へ乗換の津幡は」

「此處だよ、津幡——」

と案内をお李枝に渡して、一枚匆ねながら、指をつくくと、兩方の額がひた、と寄る。

「あす朝八時

分。俱利伽羅驛を越える

と直ぢきです。これが、そら、木曾きそ義仲よしなかの古戦場こせんちやうです。」

「そんな事ことよりかね、あんちゃん。」

青藍グライイン色いろで、白しろい柄えの涼傘ひがさをまだ手てにしたまゝ。

「電報でんぱうはよして頂戴ちやうだい。それでないと、此この汽車きしやが、
ぢかに温泉おんせんへ着つくのなら可いいけれど、乗換のりかへがある
でせう。此この津幡つばたまで、迎むかひに出でて下くだすつては、
眞個ほんとうに濟すまないから。一ひとつ二ふたつ、ね、和倉わくら
から驛えきが十幾じふいくつかあるんだもの。」

「だつて、そりや何どうだか。」

場所ばしよが取とれ、荷にが入はいり、これで一肩ひとかた抜ぬけた氣きで、
忙いそがしい處ところで力りき二郎じらうは燐寸マツチをすつて卷まき苳たばこを横よこに啣くはへた。

「だつて、屹きつとよ、——あたしが承合うけあふ。」

「をぢさんは、（あたしが好すきだ。）からだ
らう、例れいによつて。」

と、長幼ちやうえうの序じよを亂みだした煙けむりの吹ふかせ方かたをする。

「何よ、知らないわ。」

と、薄睨みをして、それでも、につこり。

「では、もう下りるから。」

「まだいゝ事よ。」

「いや、もう直ぐ出る。」

「あんちゃん而降りて了ふと、あたし何だか心細い。あたし、行くのはよさうか知ら。」

「何を、馬鹿な事を云つてるのさ。いま時の旅行だよ、食べすぎのほか何の心配があるんです？」

「そんな事を言つたつて 何にも咽喉へ

は通りはしない。」

「オレンチをお食べよ。バスケットの中にあるから。それから、途中で、もう可厭になつたら、何處でも構はない。其の記符のある處でおりて、電報をお打ちよ。さうすりや、どんな事をして僕が迎に出向くから。――そんな場合はだね、停車場の中か、驛の見える、茶屋にでも、休所にでも待つんですよ。離れた旅籠へなんか入つちや駄目だよ。さうすりや何の心配もないんだから。」

「――唯ね、新聞には出てゐたが、をばさんの方が一所に行つて居るんだか、何うだか、小石川の家で一度確めればよかつたと思ふんだがね。」

「両方とも電話がないから不自由ね、行つたり來たりして居るうちには、手間が取れて、今度は旅先で聞き合せなんぞして居るうちには、日が経つて、一生に一度ぐらゐ思ひ立つた、旅が出来なくなるし、それだし、大丈夫。」

（旦那様大事で附着いて行くのは、私たちの流儀ぢや流行らないけれど、可愛い、可憐い人形は一人でやれない。情夫と駈落をする時でも抱いて遁げる　　今まででも、

お澄ちゃんは、人形様ごとで、何處へ行くにも離れないから、屹と一所だ。　　それでなくつて、

誰があんな、ひねくれものの、氣むづかし屋の我まゝの世話をするものか。）　　ツて　　お母さんもお言ひだし　　まつたく、然うだわ。」

「まつたく、然うだは驚いたなあ。だつて、姉さん、人形は我まゝを言やしまい。」

「あんちゃんは知らないからだわ、人形だつて、
此方の言ふとほりになるもんですか。――そつ
ぽを向いたり、すねて見たり、――其處が可愛
い。」

と涼傘の柄が乳に觸る。弟だから、聞きやうが率
直で、

「人形事の先生か。あゝ、小説家ツてもものも、だ
らしがねえな。」
と下町の子で、一寸地が出る。

―― お早く、お早く、お早く願ひます――

驛員の手を煩はして―― 恚ういふのは早く追
出すに限る。

また一時、混雑の中を、早い事、力二郎はもう外
側の汽車の窓。お李枝が、しんみりと、

「力ちゃん、澤山我まゝをして濟みません。

歸つたら、あの、奉公でも、何で

もするから。」

「何を、何を詰らない。」

「お前さんに、なけなしのお小遣を使はしてさ、
こんな涼傘なんか驕らなけりやよかつた。」

「

「およしつたら、見つともない。」

「持つてる日傘で澤山だつたわ。」

力二郎は息を引いて、

「えッ、董の大きいんだか、櫻の小さいんだか、
あの傘を持つて乗りや、汽車の綱渡だ。香にまよふ
梅ヶ軒端ぢやあるまいし。」

「馬鹿にして居る」

何でも、あたしの事

といふと。」

「眞個はね、僕は當分のところ、岡惚も何にもな
いから、姉さんに達引けば嬉しいんだよ。」

思はず涙ぐんで、

「力ちゃん、難有うよ、これは翳さないで抱いて

行く。
「

力二郎も、ものは言はず、麥稈帽を取つて、横顔を煽いだのである。

「お母さんを氣をつけてね。」

「別れるやうな事をおいひでないよ。」

「でも、しばらく、不忍にもお別れだわ。」

「

と、其の柄が解けて翻つたやうに、いつの間にか手巾が解けて、目を蔽つた。

「では、観音様——行つて参りま

す。あゝ、出る。」

「達者でね。」

横に行く汽車の、窓から、窓から、何の窓からも、同じ顔の、お李枝が、お李枝が、お李枝が、お李枝が。

其の夜の午後十時半——

汽車は松井田あたりから、もう冷やかな碓氷川の
流れに添つて、窓が寒くなるまゝに、連つた燈もは
たりはたりと、嵐に吹消されるやうに次第に暗くな
つて、ごうと響く音がないと、田家、村舎の田畑に
遠い燈に紛れる、と思ふうち、汽笛が冴え、訝が鳴
り、巖の大なる門をカーンと敲いて、機關車の光が、
縁側碧面を衝くと、立處に妙義山に迎へられ、碓氷
の澗に包まるゝ。幾千歳の積翠を凝、鬱樹の青い雫
は、窓に滴り屋根を迸つて、構内を黒く流るゝばか
りである。

清涼たる嵐氣迫ると齊しく、石炭の煙を白く漉し
て、巖膚に吸つて消す、其の立靡く一幅の靄の裾と、
相交叉して、もく／＼と屋臺障子から立騰る湯氣は、
店の燈の冷やかさを暖めて、こゝに名物の蕎麥があ
る。

蕎麥の黒さを衰に着て、旅人が、さら、さら、さ
ら、汁と共に霧を吸ふ。――驛内さながら巖窟
にして、廂に常磐樹の落葉した店頭に、十四五人、
直ぐ裏の崖清水の流るゝ音に立泳ぎするやうな群の

中から　　薄く、すらりとした紫の褙が抜けて、
停車中の列車に、白い頸と、撫肩と、帯を包んだ細
りと靡いた裙と、後姿を見せたのは、松井田あたり、
夜が冷くなる頃から、其處とも分かず、座席の窓を
見失つて、星を削つた妙義山に掻消されたやうだつ
た、花柳の娘である。

やがて、月の末なれば、單衣で出たらう。コオト
を、こゝまでも脱がず、其のまゝ慎ましく居たらし
い、坐り皺も見せず、清らかな耳元の鬢の左に、晃然
と白金の透彫の羽をつけて、翡翠の目をくるりと二
ツ、蜻蛉が留まつた。

簪が、あるくと、きら／＼と、影を幾條か藤紫の
コオトに斜めに流して、雨絢を見るやうに、また其
のなよやかに身についた膚のちら／＼と透くやうに
見えるとともに、青い玉の目は二つが殖えて、六つ
七つ、ちら／＼と照つて、頸もとに美しい。

「いゝ簪だね。」

「まやかしよ。」とスツト抜いて、見せて、に

つこり。
はかない中に優しさの品ではあるが。

こゝで乗つて居た列車が二つに分れて、すつと動いて山裾へ、迂つて行くのは、降りたものの見る目には、フト魂が抜出しでもするやうに、寂しい氣がするのであるが、會社の弟が懇に其處まで知識を與へたと見えて、お李枝のうしろ姿は、する／＼と後について衝と階段を上るのに、裳が足りびを、すつと包んで、兩ぐりが軽く浮いた。――芝、門前の師匠の娘は、膝頭をすり剥いて、見物の前で擦つても、それが嬌態になるのを知つて居よう。

夜あらしが、また颯として、残んの藤の一房が葉がくれに成つたやうである。

唯、カタ／＼と歩廊に日和下駄の音を高く、お李枝のあとを追つて出たのは、亭主か、賣子か、蕎麥屋の男で、向　顧巻はいさみだが、山間のうそ寒さが膚についた習慣らしい、紺の筒袖の兩手をすくめ

て、ぬつとして、足ばかり忙しい。

茶碗を頭に、肱を張つて、揃つて、箸の構へを崩して、手弱女を見送つた、店に立食の連中には、薬味まで、女が居て切盛をするから心配なし。

だから、言はない事ではない。蕎麥の代を拂ふのを、お李枝が忘れて、食遁げと思はれたらう。

「旦那 ー 小山の旦那。」

馴染で其の姓を心得た、風采のきりゝとした、勤務の一員の來掛るのを慌てて呼んだ。

黙つて立停るのに、心易立のお辭儀ぬきで、ひつたり寄つて、

「いま其の、あ、あの前の四臺目へ入んなすつた娘さん ー ご婦人ですがな。素敵な容色の、容子のいゝ。」

黙だまつて、點頭てんとうを重ねたのは、小山こやまさん――
早はやく、ご存ぞんじの事ことと見みえる。

「甚はなはだ唐突たうたつでございますが。」

「給仕きふじに言いひたまへ。」

「はあ？」

「すぐ拂はらつてくれるよ。まさか、しかし奇抜きばつだ

な。」

「旦那だんな、其その奇抜きばつにつきましてなんでして。」

カンノ、カン、鎖チエツを試こころみた、若わかい驛員えきゐんが其處そこへ立たつと、首くびへ箱はこを釣つつて半纏はんてんの胸むねを反そらした揃そろひの四よ五人にんが、お尻しりを一つ胸突どつづかれたやうに、ひよつこり、すたノと寄よつて來くるのを、「何なんでもないんだ。」
と筒袖つゝそでで、左右さいうへ廻まはつて制せいしながら、

「かけ一いち、お詔あつひで、もり出だしましたが。」

「輕少けいせうな事ことぢやないか。おれなら、驕おこるなあ。う

ふん。」

「旦那、お忙しい處を不可ませんよ、御串戯で。代價は餘分にくれましたんで、つりを取らないんですからな。そんな事ぢやないんでして。」

「ふん。」

「箸を持つたかと思ふと、ぽつと紅くなりました。な。蕎麥は釜ぶり、ご鼻屑分に、熱うございました。ましたからな、そりや尤もなんです、

（蕎麥屋さん氣を悪くしないで頂戴。）と此の邊は確ですがな。（いつか姨捨へ行つた時、此處の蕎麥を食べたといふから、あたしも立食で、をばさん）

「をばさん、あの婦人は上野から一人だぜ。」

「で、でございませう。でございますから、怪しいんで、（）をばさんの土産にしようと思つたけれど、極まりが悪いから止すわ。（）然うで

せうて。皆みんな驚おどろいて、じろり／＼と見るんですものな。團だんたい體たいか、道だうしや者しやか、講かうづう中ちゆうの味み方かた澤たくさん山さんなら、隨ずいぶん分ぶん立た食ちをやんなさいますが、いまのやうな婦ふじん人じんが一人ひとりで食たべるのは、はじめで。をばさんに土みやげ産げもをかしく、様やうす子すが、何どうも、たよりなくつて、おまけに一人ひとり旅たびと來きた日ひには。――旦だんな那な、差さ出しましたやうですが、それとなく、途とちゆう中ちゆう一ひとつ氣きをつけておあげなすつて。(――一口ひとくち吸すつたわ。――おいしかつてよ。) 其それ切きりで行ゆわきなすつたので、猶なほ更さら何どうも。」

「可よし、可よし。」

悠然いっぜんとして、兩りやう手てを衣かくし兜しへ、

「あの方ほうは自家じか廣くわく告こくらしいな。――其その一ひと

口くち吸すつたやつは何とうした。」

「そつくりしてございますが。」

「持もつて來こんか。――馬ば鹿か。おれ

が食くふか。のぞみてが、他ほかに澤たくさん山さんある。」

淺あさま間まヶ嶽たけの煙けむりにも、千ちくま曲ま川がはの瀨せ波なみにも、其その夜よの

汽車は闇夜にして、善光寺平の燈も暗くまばらであつた。山は次第に累り、野は愈々流れつつ、大雪の難さへなければ、生けるものの脈を數へて、呼吸の數の合ふばかり、午前正に二時二十分。

—— 柏原ア ——

これ丑滿つる眞夜中である。

後部の一番後らしい、列車の口から黒い脚が二本下りた。やがて大山脈の根の草の、香もせず、音もなく、車輪を驗する一電の陰燈に青白く、むら／＼と映し出ださるゝ歩廊の端へ、のそりと顯はれたのは、紙芝居の安場嘉傳次。裁着は其のまゝに、帽子を脱いだ頭は、頂邊禿の周圍が黒くて、結び目のない願卷である。

鳥にも獸にも、いま時分、驛員の二三のみ列車のほかは、渠唯一人で。

「珠數さら／＼と押揉んで

」

と、謡がかりの一節は、好い機嫌で、酔つて居る。

すぐに合掌を高々と、額越しに揉んで、先づ西に向つて禮拜した。その西にこそ戸隠山。南には飯綱山。北の方には妙高山。東の方に、斑尾山。其中央なる黒姫山は、驛の前に聳つて、残月、一箭の光もあらば、五山、頂きはまだ白からう。雪できこゆるとともに、線中第一の展望臺に星もなかつた。雲くらき深夜の柏原の光景は、讀者の判察を請ふのである。

「西に、戸隠大明神。まつた西方大威徳。」

頭を南に、恭しく、

「南に、飯綱大權現。南方軍荼利夜叉——北に、妙高大菩薩。あゝ、星が見えれば近からう。」

——その眞中にござあつて。」

と、とんと踞まつて、

「黒姫山、女體大権現。」

其處で、また立上ると、腰から萬歳扇をツイと抜いたが、左の手が、もそ／＼と袂を探ると、握った拳を、ぬつと突出し、大きな口でふつと吹いて、ふはり／＼と煽ぐと、あれ、あれ、あんな事をする。雪とも花片とも、眞白な細かな粉が颯と屋根へ掛けて、舞上つた。

「何をしますか。」

「いやあ、これは驛長様。」

「驛長ではありません。」

「はあ、驛員様。」

「此方は何でも構ひません、何をするんです。」
「え、御當所は雪の名所。――雪は豊年の貢とござれば、此の處、一手擬へまして。」

「六月ですよ。」

「前以て、冬分のご祝儀をな。」

「迷惑です、埃だらけです。」

「さ、さ、其の埃につきまして、列車の中は辨當の包紙やら、煎餅の袋やら、目に餘るちらばり方ゆゑに、手前、隙にあかし、切りこまざいて、落花繚亂。白雪紛々の體とごさい。ご覧ませ、一寸一捻り捻つた處が、粉のやうでも残らず蝶々。山嵐とともに、八方へ散る、とごさい。」

「迷惑ですよ。」

「ご迷惑とあれば、もとの袂へ、颯々と、煽いで戻す。此の處、落花枝へ歸るの形。しかし此の方はゆるしもの、奥儀の一手。」
「と洗ひざらした剥身絞の片肌を脱いで、衤形に敷いた紙の吹雪を眞丸に煽ぎはじめた。」

「うまいなお立合。懐中へ、ちら／＼舞込む――
これでも鳴らした時分には、緋縮緬の肌脱もやつたもので。」

「汽車が出ます。」

「お出なされば、此處へ寝ますて。」

「嘉傳、嘉傳。――」

おなじ昇降口の闇中から、沈んだ錆のある聲が掛つた。

「お山が白めは起きますでな。」

づか／＼と降りた肩幅の確乎した、焦茶の背廣服を無雑作に、額の髪が眞つ直ぐに立つたが、俯向いたから、灰白いのみ、面は分かず、一個の偉丈夫。カフス短に右の逞しい腕をむずと出して、嘉傳次を、ぐいと、片手抱きに、地からひよいと、軽くもぎ離して、列車へ入つた。

脇の下から頭を出して、扇をふつて二いた形は、鳶が蝸牛を攫つたやうであつた。

いらたか

「――先生、其處で――其の三羽の仔雀は助つたんでありますか。」

眞似でも學問はしようもので、卓子の脚のぐらつく講義をしたばかりで、運轉手には、もう先生と呼ばれて居た。

矢野は、襟を合はせながら、懷中を軽く押へたが、「お伽話をして居るやうだね。――其の三羽の仔雀は、と聞く人の方が可愛らしくて、眞に好い。

助つたよ。――然も張合があつたと云ふのは、顔の長い、上背のある、其の道中笠の巫女です。せめて、雀の片目を潰せ、然うでないといふ三人の婦の願掛けが、逆に變じて、一人々々の生命にもかゝはるぞよ、と迫つたけれど、現に、井戸から掬上げて、胸で直膚で暖めて居る仔雀を

道中巫女の出たらめ如きで、水の中へ投られますか。目を潰す。――串戯ぢやない。断然、かぶりを振つたと思ひたまへ。

可厭な氣持さ、井戸越に、蠅がチロ／＼と白い舌を吐くやうに、突出して居た針を、襟へ縫つて納めた、と思ふと、吃驚した。づらりと投げた十尺（註。實物十三尺。）ばかりの長珠數なんだが、井戸側へ網を打つて輪に開いた。それをだね、さら／＼とわがねて、二巻に、巫女が其の手首に掛けた。

珠は一つ一つ、乾固めた大蛇の鱗のやうです。それに其の處々に、異類、異形のもものが繫いである。

（狼の牙ぞよ。）――と言ふ。

（鷲の爪ぞよ。）――と言ふ。（蜈蚣の腦髓ぞよ。）――と言ふ。（貂の顎ぞよ。）――

――と言ふ。血鎧の磔の釘もあつたらう。古戦場の草に燃えた鐵もあつたらう。一つ一つ、噛むやうに、珠數を揺上げ揺上げして、觸る處で尖つた頭で教へ

て、（さあ、善悪ともに、それ／＼の此の御靈の祟りと、身が行力を以つて、その三羽の雀を殺いて、三人の婦を活して見せう。珠数は縮めた。この伸びる丈を、そなた遁げては卑怯ぞよ。） 私は一尺前へ進んだ。

考へても見たまへ。眞赤か、眞黄色か、色の強い花を見ても怯えさうなひよわい奴が、井戸へ倒に落ちたばかりだ、狼の牙だの、鷲の爪だの、聞いただけでも肝が消えようと思ふのが、ぴよ／＼と羽がふるへて、私の動悸に響いて居る。

熟と睨合つたがね。變なもので、血も青くなる巫女の頤に、珠数がぶる／＼と揺れると、何うも突立つた身體が少しづゝ動いて不可い。

――腰かけるものを、と云つた。殿さまだと（床几。）――だが自炊の男世帯だつたから、踏臺はもとよりなし、百で買った験がないから、蜜柑箱のあいたのものない。

甥の奴が、ぐわさ炭の炭俵を持出した。づかりと掛けてね。あげ胡坐をやると、そこで腰が極つた。」

矢野の面は、此酔が澄んで血が其の頬に白かつた。

「膽が据つたよ。これには覺えがある。――
ある其の私立女學校の校長婆が、嫉妬で、うつくしい、おとなしい嫁さんを、陰險に、殘忍に苛める奴が、身體の弱いのは、ものの祟りだ、と云つて、嫁さんを田舎の修驗者の許へ連出して、釣して松葉燻にかけてよとする途中、俄雨に逢つて――然うだ、一寸恚ういつた形の飲食屋へ入つたのに、私たちが、三人で落合つた事がある。飲んで居た私たちを蔑んだ面をする、校長婆の見る前で、三人が、故と手水鉢を大降りの雨樋で洗つて、三升酒を打ち込んで。まはしのみに、かつくらつた。」

もてなし振に、汲かへたか、土間の奥の鉢前の手水鉢に、合歡が映るか、蛇の影か。矢野は屹と見たのである。

「あゝ、若かつたな。」

無然として、寸時、うつむいて額を壓へたが、

「いや、其の勢の抜けないうちだ。巫女の珠數には驚かない。」

人が見たら、頭へ棧俵法師の兜を頂きさうで馬鹿々々しかつたらうが、炭俵の床几に胴を据ゑて、狼、鷲の惡靈と、巫女の呪詛に拮抗する少からず其の場合緊張したぜ。

背後に、家の子郎黨と云ふ形で突立つたのは私の甥で、これは海軍志願で、兵學校の入學試験を準備中の究竟な若ものです。三間柄の長槍に、物干棹の石突をついたはいいが、尖端に、網の灰ふるひの附着いたのは些と滑稽だつたよ。

巫女は瞑目して、定に入つた容體でね、刺高の珠數が、たら／＼と汗を掻くやうに見えたが、懷中の雀は、三羽とも、玉が動くやうに、ぽつと膨れて、羽の暖まるのが、血に通つて、むく／＼、男でも乳

に響く。

女が戀人に逢つた時か、手の觸れた時か、屹と、おなじやうな心持がしようと思ふ。

「―― あゝ、おかみさん、其處に居ましたか。」

三尺ばかり背後の土間に、立つて居て聞くの見たのである。

座のわきの椅子を、がた／＼と揺つて寄せて、

「さあ、お掛け。―― 聽手に女の顔が見える
と、お説教が尚ほ引立つ。――」

「―― チイ、チイ、チイ
蜷を食つた口
で言ふのも變だが、むず／＼と肌へ觸つて、小さな
脚を突張つた。」

「おつかあ、覺があるべい、――
と、金兵衛の仰向く鼻を、押被せるやうに掌で留

めて、

「黙つて聞きなよ。」
と相良が言つた。

「――胸を開いた、我ながら氣が入つた。嘴の一寸出たのが、パツと頬のさきで三羽、一齊に羽を揃へて、黄色が白く光るやうに、まだ朝霞のかゝつた、上の櫂の梢へ、波がしらを打つて、あとさきに飛立つ、と思ふと、巫女が、黒い目でぱち／＼と空を狙つて、珠数を振上げた。地の引力の法則とかいふものに、引かれるやうに、引かれて落ちかゝつたと同時に、甥が物干棹で其の珠数を拂つた。

ね、これが宙で、珠数は撓つた弓。――矢を交へた形に搦むと、おそろしいはずみさ、手棹がポキリと折れて、珠数は巫女の手に靜に垂れたよ。

爾時、蒼白い長い顔で、笠さがりに、ニヤリと笑つたのが、一番不氣味だつた。（元氣な若い人ぢや、雀、小鳥は、枝からで、睨めば落すほ

どの通力は持ったもの。　　まだ行が足りぬ

さうな、　　―　　都は廣い。身は一旦奥州へ歸るぞ

よ。　　―　　恚う、硬いやうな、軟か いやうな、　　―　　

能の橋がかりを見たやうな足取で、端折りもせぬ

長い裙を、新しい草鞋で、向うむきに、竹の杖をつ

いて、長屋口を、街道通へ出ると、此方へは振りも

返らず　　箱を負つた頸を少し上へのばして、

雲を見上げたのは、刈田嶽か、恐山か、其の奥州の

空だらう。」

「こげつくさいぞ、飯か、味噌汁か。

此方は、徹夜のすき腹です。さあ、もう一息ニが

ないと、蓬ひに来る女に　　」

矢野は火のつかない巻苧を、二つに折つて苦笑し

た。

「奥州の空どころか、櫛の梢も見やしない。」

いゝ鹽梅に、鳥は騒がず、
同長屋が端の方から起出して、何やら井戸端ががや
／＼した。
鳥の羽が散り込んだ

などと云ふ。それだつて、だしになれば煮るんで
す。毛蟲の二つ三つ浮いたつて驚くやうな連中では
なさ。

此方は猶更、廂合で鼯が鳴かうが、天井を百足が
這はうが、ものの數ともするんぢやあない。

臺所の揚板へ、蛇がとぐるを巻いたつけが、鎌首
より上へ葱の切ツぱしが突立つてるんだ。巫女の祟
りだと誰が思はう。――唯可恐いのは米屋、酒屋
の催促でね。

時に談者の目は、横背戸の青葉にも、街道の海に
も向はずに、――嘗て、洗つて三升を三人が、
傾けたと云ふ、手水鉢に注がれ居たのである。

「――あとで氣がつくと、夜明方、四邊が靜

だものだから、嬰兒だと火がつくやうに、と云つた
聾で、雀がけたゝましく鳴いて、水音がしたので、
飛び出して、それから掬ひ上げるまでに、幾度も覗い
た井戸の内側に、餘程手を差込んだ、と思はれる處
に、赤いのと、青いのと黄んだのもある。

葉が交つて、袋を翻して、鬼灯の頭を出したのを、
白木の箸にさして、紅白の水引で結へつけたのが
――何、貧乏長屋の總井戸で、板が朽ちて、青
苔で居るんだから、割れ目へ挿まうと、爪楊枝を突
差さうと、そんな事は勝手にね――三方に引掛
けてあつたんです。

其の鬼灯だと見たのが、――此の頃になつて
考へると、オシラ神の假の形代で、頭を圓く頸を結
へて、布切を被けてあつたものだらう、と思はれる
がね。

子供の禁厭だらうの、縁結びの願がけだらうの、
何かの祈祷だらうの、氣味が悪いの、勿體ないのと、
棟別の井戸端會議と云ふ江戸時代から今
以て東京の名物が、がや／＼聞こえ出したつけ。

―
燒かうか、流さうか、氏神様へ納めようか、など
とも言つて居たやうだが、男世帯の若いものには、
相談のあらう譯もないから、此方は耳に掛けるほど
でもなし。

三月、半年経つうちに、十九に成る、同長屋の娘
が、はやり風で亡くなつた、何處の誰とかは、大川
へ身投げをした ― 十九になるものは氣をつけ
ろ、家出をして行方の知れないのも同じ年だ ―
近所居まはりに風説はあつたが、雨が降れば流れ
る、風が吹けば飛んで了ふ、霜柱ほどには形も見え
ず、落葉のするほど音には立たない。

氣にも心にも掛けうとも思はなかつた。

― 間十年ほど立つたらう。 駒込の
追分といふ ― 本郷だが ― 初夏の朝だつ
た。白山の坂の方から草鞋の練足で、舞臺を歩行く
やうに、しと／＼と通る、そつくり同じ姿の巫女だ

らうと思ふのに行逢つて、ハツと思つた事がある。
顔が長くて色が白い。笠の下で、ばち／＼ばちと、
はじくやうに目ばたきをして、行抜けたが、あの埃
の中を、硝子のやうに、透通つて行つたのは、少々
可訝しい。

其の夏です。もう秋にならうとする、蒸暑い夜の、
かれこれ一時頃、本郷切通しの通と云ふのを、片側
に寄つて歩行いて居ると、花屋がある
西
洋花をおもに商ふので、至極洋風な店だ、が、もう
遅いから、一面に白い窓掛が懸つて寂寞して居た。
西洋館ではないから、瓦の廂屋根がある。暗い、重
い夜だつた。フト其の上に、眞白な女の面が眞正面
を向いて、三人見えた。まだ浴衣らしいのが、紫陽
花のやうに薄白い肩を並べただけで、髪容も何も分
らない。それが、妙に、すぐ、あるくものの直ぐ上
に、遠い街燈を靄にうけたせみか、顔の輪郭が黄色
に包まれて、一人づつ、ぽつと大い。

悚然とした。女だから、ぢつと視るのも樂な氣が
して、其のまゝ遁げるやうに通つたが、何だか今で

も分らない。

娘が三人 ー 皆若さうだつた ー 細君

も交つたか、蒸暑いので、土藏造の二階の窓で涼んで居たと思へば、それまでだが、揃つて正面を向いたのが、何うも希有で、いろ／＼考へると、其れが二階だつたか、店の窓掛に、並んで映つたのか、

ー ー 臃になる。

四五日おいて、眞晝間行つて見ると、窓飾りの睡蓮も、店の薔薇も、百合も、撫子も、妙に三色づゝ揃つた。が、小僧一人と、年とつた小さな丸鬚の女房で、ほかに娘らしい影もない。あれは花の精だつたか。袖も薰るやうで、 ー 毎晩魔された夢も、それで好い心持にさめたが、しかし、三人の婦と云ふ事を、それから氣にしだした。」